

福岡市

わき やま  
脇 山 III

——県営圃場整備事業に伴う発掘調査——

(脇山A遺跡第4次調査報告)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第311集

1992

福岡市教育委員会

Waki                          yama  
脇                          山 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第311集



遺跡略号 WKA-4、TNG-I

遺跡調査番号 8933、8932

1992

福岡市教育委員会

## 序 文

福岡市西部の早良平野は豊かな自然と歴史を持つ地域であり、特にその南側は広大な農地と山林の広がる美しい景観を保っております。近年、この一帯では相次いで圃場整備事業が開始されており、これに伴い貴重な埋蔵文化財が出土しております。

早良区の脇山地区では昭和61年度より8ヶ年計画で、県営圃場整備事業が進められています。

このため福岡市教育委員会では、圃場整備事業に伴い、昭和61年度より埋蔵文化財の調査を開始し、現在にいたっております。

本書は、脇山A遺跡第4次調査の成果を報告するものです。調査の結果、縄文時代から近世にいたる遺構と遺物を検出し、特に中世においては脇山地区の開発時期の状況を示す資料を得ることが出来ました。

本書が埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてのみならず広く活用されることをねがいます。

最後になりましたが、調査にあたりご協力を賜りました関係者、地元の皆様をはじめ多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## 例　　言

1. 本書は早良区大字嵐山地内の岡場整備事業に伴い平成元年度に実施した嵐山A遺跡の第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が担当した。
3. 本書使用の遺構実測図は、井澤洋一・野村俊之・吉田扶希子・多田咲子・有馬千恵美・福川小菊・西嶋彰子・土生喜代子・辻節子が行った。
4. 本書使用の遺物実測図は、吉田扶希子・中西香・田中昭子・井澤が行った。
5. 本書使用の遺構・遺物写真は、井澤が撮影した。
6. 本書使用の遺構・遺物挿図の製図は吉田扶希子・中西香・牛房綾子・田中昭子・井澤が行った。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 本書の執筆・編集は井澤が行った。
9. 当該調査出土遺物および調査記録は、今後、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開・活用される予定である。

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
(1) 発掘調査に至る経過.....	1
(2) 発掘調査の組織.....	2
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第3章 調査経過.....	5
(1) 調査概要.....	5
(2) 第1地点 I・II区 (1号道路) .....	13
(3) 第2地点 I～III区 (3号道路) .....	25
(4) 第3地点 I・II区 (2号排水路I・II区) .....	40
(5) 第5地点 (13-7・8田) .....	44
(6) 第7地点 (13-6田) .....	47
(7) 第8地点 (13-5B田) .....	49
(8) 第10地点 (13-3田) .....	54
(9) 第11地点 (13-2A田) .....	58
⑩ 第12地点 I～IV区 (13-1-1・2田、13-2B田、2号排水路IV区) .....	64
⑪ 第15地点 (12-5田) .....	87
⑫ 第16地点 I～IV区 (12-6A～C・7A・B田) .....	92
⑬ 第17地点・18地点 (12-8・9田) .....	98
⑭ 第19地点 (12-10田) .....	103
⑮ 谷口遺跡の出土遺物 .....	106
⑯ 付論 臨山A遺跡から出土した木炭について .....	111

# 挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡の分布図 (縮尺1/75,000) .....	4
Fig. 2 試掘調査出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2) .....	5
Fig. 3 臨山周辺遺跡分布図 (縮尺1/16,000) .....	7
Fig. 4 試掘調査トレンチ配置図 (縮尺1/2,000) .....	8
Fig. 5 調査地点及び事業計画図 (縮尺1/2,000) .....	9
Fig. 6 第1地点 遺構配置図 (縮尺1/400) .....	14
Fig. 7 第1地点 燃土壙SX01～06実測図 (縮尺1/40・1/60) .....	15
Fig. 8 第1地点 燃土壙SX07～12実測図 (縮尺1/40) .....	17

Fig. 9	第1地点 焼土壙SX13~18実測図（縮尺1/40）	20
Fig.10	第1地点 焼土壙SX09・19~21・25・26実測図（縮尺1/30・1/40）	22
Fig.11	河川跡SD01土層図（縮尺1/120）	24
Fig.12	第1地点 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）	24
Fig.13	第2地点 遺構配置図（縮尺1/400）	26
Fig.14	第2地点 焼土壙SX30~35実測図（縮尺1/40）	27
Fig.15	第2地点 焼土壙SX36~42実測図（縮尺1/40）	30
Fig.16	第2地点 II・III区焼土壙SX44~50実測図（縮尺1/40）	32
Fig.17	第2地点 III区焼土壙SX52・53実測図（縮尺1/40）	33
Fig.18	第2地点 土壙SK32~62実測図（縮尺1/40）	35
Fig.19	第2地点 溝SD30~34土層図（縮尺1/40）	37
Fig.20	第2地点 据立柱建物SB01実測図（縮尺1/100）	38
Fig.21	第2地点 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	39
Fig.22	第3地点 I・II区遺構配置図（縮尺1/400）	40
Fig.23	第3地点 焼土壙SX01~05実測図（縮尺1/40）	43
Fig.24	第5地点 遺構配置図（縮尺1/300）	45
Fig.25	第5地点 焼土壙SX01~05、土壙SK01実測図（縮尺1/40）	46
Fig.26	第7地点 遺構配置図（縮尺1/300）	47
Fig.27	第7地点 焼土壙SX01~04実測図（縮尺1/40）	48
Fig.28	第8地点 遺構配置図（縮尺1/300）	50
Fig.29	第8地点 焼土壙SX01~04実測図（縮尺1/40）	51
Fig.30	第8地点 焼土壙SX05・06、土壙SK01~03実測図（縮尺1/40）	53
Fig.31	第10地点 遺構配置図（縮尺1/300）	54
Fig.32	第10地点 焼土壙SX03、土壙SX02・SK01実測図（縮尺1/40）	55
Fig.33	河川跡SD01土層図（縮尺1/100）	56
Fig.34	第10地点 出土遺物実測図（縮尺1/3）	57
Fig.35	第11地点 遺構配置図（縮尺1/400）	58
Fig.36	第11地点 焼土壙SX01・02、土壙SK03・05・07・08実測図（縮尺1/40）	59
Fig.37	墳墓SX03実測図（縮尺1/40）	61
Fig.38	第11地点 出土遺物実測図（縮尺1/3）	62
Fig.39	第12地点 遺構配置図（縮尺1/400）	65
Fig.40	第12地点 焼土壙SX01~06・16実測図（縮尺1/40）	66
Fig.41	第12地点 竪穴状土壙SX07・08実測図（縮尺1/60）	69

Fig.42 第12地点 竪穴状土壙SX09・11実測図（縮尺1/60）	70
Fig.43 竪穴状土壙SX07・08出土遺物実測図（縮尺1/3）	71
Fig.44 土壙SX09・11・14出土遺物実測図（縮尺1/3）	72
Fig.45 第12地点 出土繩文土器実測図（縮尺1/3）	73
Fig.46 土壙基SX03実測図（縮尺1/30）	75
Fig.47 土壙基SX03出土遺物実測図（縮尺1/3）	75
Fig.48 第12地点 土壙SK06・10実測図（縮尺1/40）	76
Fig.49 土壙SK06・10出土遺物実測図（縮尺1/3）	76
Fig.50 各遺構出土金属製品実測図（縮尺1/2）	77
Fig.51 第12地点 河川跡SD01土層図（縮尺1/80）	78
Fig.52 河川跡SD01出土遺物実測図①（縮尺1/3）	79
Fig.53 河川跡SD01出土遺物実測図②（縮尺1/3）	80
Fig.54 河川跡SD01出土遺物実測図③（縮尺1/3）	81
Fig.55 河川跡SD01、溝SD02～04出土遺物実測図（縮尺1/3）	82
Fig.56 鋳冶炉SX12～15分布図（縮尺1/50）	84
Fig.57 鋳冶炉SX10実測図（縮尺1/30）	84
Fig.58 鋳冶炉SX12～15実測図（縮尺1/30）	85
Fig.59 鋳冶炉SX10・14、Pit05・17出土遺物実測図（縮尺1/3）	85
Fig.60 第12地点 遺構面出土遺物実測図（縮尺1/3）	86
Fig.61 第15地点 遺構配置図（縮尺1/200）	88
Fig.62 第15地点 焼土壙SX01～04、上壙SK01実測図（縮尺1/40）	89
Fig.63 第9・15地点 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）	91
Fig.64 第16地点 I～IV区遺構配置図（縮尺1/400）	92
Fig.65 第16地点 焼土壙SX02～04・09・10・12実測図（縮尺1/40）	94
Fig.66 第16地点 焼土壙SX11～14・18・20・21実測図（縮尺1/40）	95
Fig.67 第16地点 焼土壙SX17・22～24実測図（縮尺1/40）	96
Fig.68 第16地点 出土遺物実測図（縮尺1/3）	97
Fig.69 第17・18地点 遺構配置図（縮尺1/400）	98
Fig.70 第17地点 焼土壙SX01実測図（縮尺1/40）	99
Fig.71 第18地点 焼土壙SX01～04実測図（縮尺1/40）	101
Fig.72 第18地点 焼土壙SX05・06実測図（縮尺1/40）	102
Fig.73 第18地点 出土遺物実測図（縮尺1/3）	102
Fig.74 第19地点 遺構配置図（縮尺1/300）	103

Fig.75 焼土壌SX01実測図（縮尺1/30）	104
Fig.76 焼土壌SX02実測図（縮尺1/40）	105
Fig.77 第19地点 出土遺物実測図（縮尺1/3）	105
Fig.78 谷口遺跡出土遺物実測図①（縮尺1/3）	107
Fig.79 谷口遺跡出土遺物実測図②（縮尺1/3）	108
Fig.80 谷口遺跡出土遺物実測図③（縮尺1/3・1/2）	109
Fig.81 脇山A遺跡第4次調査焼土壌分布図（縮尺1/2,000）	110

## 表 目 次

Tab.1 発掘調査の一覧	1
Tab.2 第4次調査地点一覧表	6
Tab.3 第4次調査遺構一覧表	6
Tab.4 第4次調査上塙（SX）一覧表①②③	10~12

## 付 図

脇山A遺跡4次調査 各調査区の遺構配置図 (縮尺1/1,000)

# 第1章 はじめに

## (1) 発掘調査に至る経過

昭和59年当初の臨山地区の圃場整備事業は、約100haに及ぶ広大な地域を対象としたものであった。この結果、遺跡の密度が薄いことが判明した。

昭和60年度に事業計画は具体化され、計画の面積は当初の約100haから82.9haに減少されると共に、昭和61年度から8ヶ年度にわたって計画完了させるものとなった。

埋蔵文化財課では、初年度の工事が予定される地区について昭和60年12月11日から19日の期間に試掘を行い、土壟等を確認した。このため昭和61年度は道路・水路部分の約2,600m<sup>2</sup>と、削平を受ける水田部分の約3,300m<sup>2</sup>の合わせて5,600m<sup>2</sup>について本調査を実施した。昭和62年度も当該年度内に試掘調査を行い、遺構を検出した構造物及び田面施工部分の合わせて約5,000m<sup>2</sup>について本調査を行った。昭和63年度は試掘調査の結果、削平を受ける田面部分の約6,600m<sup>2</sup>について本調査を実施したが、この成果は既に報告（臨山I）済みである。

平成元年度は、試掘調査については国庫補助（詳細分布調査費）を受けて実施した。元年度の圃場事業地域は谷口地区、会川地区の2ヶ所が計画されており、試掘調査を実施したが、折り悪しく田植え時期に入ったため、田越し水や湧水という悪い条件や、担当職員の不足等も重なって、試掘調査の実施は困難を極めた。試掘調査の結果、谷口地区では約70%、会田地区では約80%の地域に遺跡の存在が確認できた。この結果に基づき、農政サイドとの協議の結果、盛土保存、及び設計変更等によって、以下の表のとおり調査面積を決定し、谷口地区は7月から、会川地区は11月から発掘調査を実施した。

Tab. I 発掘調査の一覧

遺跡名	次数	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地地籍	分布地図番号
臨山A	1次	8643	WKA-1	早良区大字臨山字石塚・人来・金田	早良10・17
"	2次	8722	WKA-2	早良区大字臨山字川原田・会田	早良10・17
"	3次	8816	WKA-3	早良区大字臨山字会田	早良10・17
"	4次	8933	WKA-4	早良区大字臨山字川原田・会田	早良10
谷口	1次	8932	TNG	早良区大字臨山字谷口	早良8

遺跡名	次数	年度	事業量	調査対象面積	調査面積	調査期間
臨山A	1次	昭和61	4.5ha	5,600m <sup>2</sup>	5,600m <sup>2</sup>	1986年10月14日～87年1月14日
"	2次	昭和62	5.0ha	7,150m <sup>2</sup>	5,000m <sup>2</sup>	1987年1月4日～87年12月28日
"	3次	昭和63	11.4ha	6,636m <sup>2</sup>	6,636m <sup>2</sup>	1988年9月26日～88年12月15日
"	4次	平成元	8.76ha	87,600m <sup>2</sup>	10,931m <sup>2</sup>	1989年11月1日～90年2月5日
谷口	1次	平成元	5.6ha	56,000m <sup>2</sup>	13,745m <sup>2</sup>	1989年7月1日～90年2月28日

## (2) 発掘調査の組織

脇山 A 遺跡第 4 次調査（平成元年度）

県営脇山圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備部課

福岡市経済局農林水産局農業土木課

福岡市脇山土地改良組合

発掘調査主体

福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査統括 埋蔵文化財課 課長 柳田純孝

埋蔵文化財第二係長 柳沢一男

調査庶務 埋蔵文化財第一係 安部徹

調査担当 文化財主事 井澤洋一

埋蔵文化財第二係 常松幹雄、野村俊之、池田祐司

発掘協力者 森部半助、緒方十代治、緒方清造、印中宣親、細川友喜、

松井一治、山口一郎、山路茂、横尾泰広、青柳寿子、

青柳美智子、青柳律子、有馬千恵美、因ヨシ子、大鶴タカ、

大鶴道代、緒方春々子、緒方ミキ、緒方柳子、川口シゲノ、

北崎明代、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、

小柳和子、柳スミ子、坂本ハツ子、佐藤みづほ、清水邦子、

正崎泰代、高田玉恵、多田映子、谷吉美、辻節子、

鶴田きみえ、富崎栄子、永井鉢子、永井ゆり子、中國登美子、

西嶋彰子、西嶋タツノ、西嶋洋子、稻田香代子、土生喜代子、

土生ヨシ子、原ハナエ、平川土枝、平川伸子、平川富美子、

平川史子、平川真鈴、福田小菊、堀尾久美子、真子アキノ、

馬男木アサエ、真名子キミヨ、真名子シズエ、三谷朗子、

森山早苗、家迫千代、柳浦八重子、山内トキエ、山口タツエ、

山下アヤ子、山田ヤス子、結城千代子、結城多美子、

吉岡勝野、吉岡直美、吉岡光子、横溝恵美子、横溝カヨ子

整理作業 重藤輝行、吉田扶希子、倉光京子、多田映子、西嶋彰子、福田小菊、田中昭子、  
小山田綾、牛房綾子、中西香

## 第2章 遺跡の立地と環境

博多湾に面する福岡平野は、東の三郡山地から派生する山塊と西の長垂山の山塊及び、南側の背振山地から派生する山々によって囲まれた地域をさしている。この福岡平野の西は、鴻巣山を中心とした山陵群が北側へ舌状に発達し、その西側の小平野を走っている。この平野を抜義では早良平野と称しており、今回の報告で扱う駿山地区は、この平野の最奥部の狭隘地に位置し、周辺は扇状地の基部や山麓部に形成された桜田風景を呈している。

「筑前國續風土記」によると、江戸時代の駿山郷は椎原、板屋、小笠木、西村、駿山、内野、石釜、曲淵の八村を含んでいたが、明治22年の町村制によって椎原、板屋、小笠木、駿山の4村を以て駿山村が組織された。歴史的背景を文書や伝承をもとに遡ると、駿山は背振山東門寺の寺領の北麓に位置しており、「門戸口」、「大門」、「上城戸」、「下城戸」などにその名跡を示す小字名が残っている。東門寺の縁起は定かではないが、奈良時代以前から高僧が入山した記事が見える。その後、中世の山岳信仰の隆盛と共に栄え、西油山にあった天福寺との争乱によって焼失している。戦国時代に龍造寺氏によって再建されたが、戦火によって灰燼に帰している。東門寺と天福寺との北側の境は現在、入部の重留に灯篭石として残っている。又、15世紀にこの一帯には「崖ノ名」が成立し、駿山字会田や谷口もこの「崖ノ名」の内に含まれている。

この地域の山畠の開発については比丘尼様伝承がある。これは9世紀後半の貞觀年間に、紀伊国熊野から来た比丘尼が、椎原の下臼に堰を築いて水路を開いたというもので、これらは樋堰、樋の溝、釣溝として伝承され、現在も丘陵地帯を潤している。発掘調査においても、これらの水路に沿って耕作地や集落が展開していることが明らかとなっており、少なくとも水路の開削を契機として地域開発が進んだことは否めない。駿山字谷口の西側、小高い丘の檜の大木の側には比丘尼様と称される石塔がある。これは五輪塔や宝鏡印塔の一部が組み合わさっており、形式は中世のものである。戦国時代の駿山は、観音堂の南に池田大教坊の居城であった池田城が築かれ、北東山稜には大友氏の被官で早良平野一帯を治めた小田部氏の山城—荒平城が存在し、その支配下にあった。又、この一帯は、小笠木川や椎原川沿いに筑紫郡や肥前へ抜ける街道の要衝でもあった。天正年間に、肥前龍造寺氏は三瀬崎を経て、侵入し、大友氏の拠点荒平城を落城させて、早良平野を掌中にしている。

又、地域史の中で特記できることは昭和天皇の即位に際して行なわれる大嘗祭に用いられた新穀を獲るための祭田（主基斎田）が存在することである。現在の祭田は、宇野中にあり、2haが墓園として保存されている。

この主基斎田に近い字石上というところは、今津薬願寺や博多聖福寺と共に栄西禅寺が帰朝後、最初に茶種を蒔いた場所の一つといわれ、中世の重要な位置を示している。

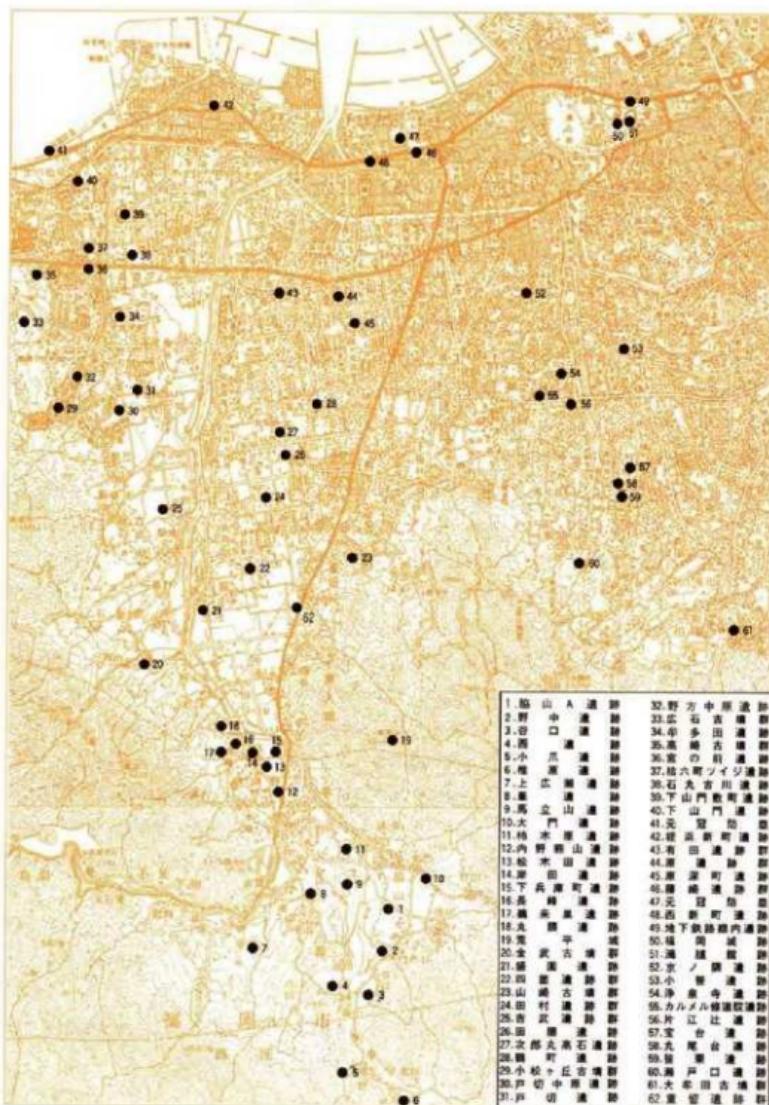


Fig. I 周辺の遺跡の分布図 (縮尺1/75,000)

## 第3章 調査経過

### (1) 調査概要

平成元年度の調査地域は、扇状地形の中央部分に位置し、標高71m～78mを測る。調査地域の字名は大部分が字「金田」に属しており、東側の一部が字「川原田」に含まれる。

この地域の伝承には古くから荒平くずれの伝説が残っており、現地踏査した折にも、地元の人々より、一帯が龍造寺軍との戦さで死んだ武者たちの墓所であること、更にそうした墓の一ついわれる塚や立石の幾つかを教示された。その内の塚については第11地点で報告しているので参考にされたい。試掘調査は5月から行った。

旧地形は開田の際の切り土整地による削平が比較的少なく、遺構の遺存度は良好であった。遺構面は耕作上の直ぐ下に検出できる。対象地域の北東側は谷地形に含まれるので、耕作土の下に暗黄褐色粘質土の包含層が存在する。遺構・遺物の時代は縄文時代から鎌倉時代までの幅

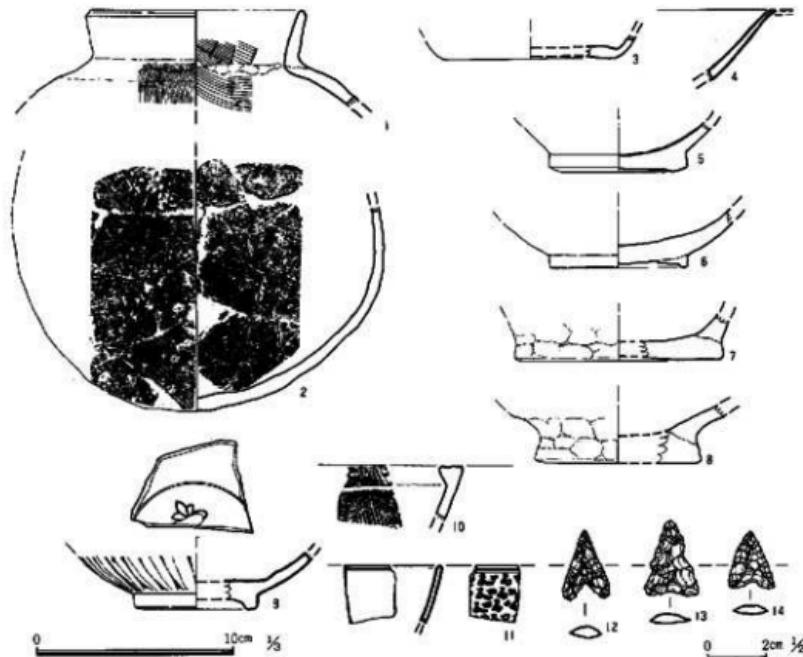


Fig. 2 試掘調査出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2)

をもつが、特に弥生・古墳時代の遺物は少ない。本調査は11月から2月4日まで実施した。

Tab. 2 第4次調査地点一覧表

地点名	構造物・防護施設	計画面積(㎡)	測定面積(㎡)	地区名	期	備考
1 支樁 1号塗跡		1,110	1,286	I-II	99.10.3-11.28	
2 支樁 4号用小塗		620	2,080	I-III	99.11.17-12.13	
3 支樁 2号用小塗		1,360	(1,480)			
4 支樁 13-8 A-B田園			222	I-II	99.11.29-12.19	W区(は)2地点
			151.5	I-II	99.12.4-12.9	
5 支樁 13-8 用小塗(田)		3,232	45.8		99.12.18-12.25	A地区46地点
6 支樁 13-7 A用小塗		1,279	69		99.12.5-12.9	B地区145地点
7 支樁 13-7 用小塗(一部)			87		99.12.5-12.9	
8 支樁 13-6 用小塗		3,522	66		99.12.4-12.7	
9 支樁 13-5 多田園		2,860	449.5		99.1.3-1.11	B地区は9地点
10 支樁 13-5 田園		3,000	418		99.11.1-12.9	A地区は11地点
11 支樁 13-2 A用小塗		3,000	540		99.12.18-12.27	B地区は12地点
			277.5		99.12.9-99.2.4	
12 支樁 13-2 用小塗		3,000	91.0		99.12.11-99.2.4	A地区は11地点
			229		99.12.18-99.2.4	
支樁 13-1 A用小塗		2,860	350		99.12.18-99.2.4	
支樁 2号横水路跡 田	(1,480)	227		I-IV	99.12.11-99.2.4	I-II区は3地点
13 支樁 3用小塗		2,167	57		99.1.12-1.18	
14 支樁 3用小塗		3,238	166		99.1.12-1.18	
15 支樁 5用小塗		3,511	321		99.1.20-2.7	
16 支樁 6 A-B-C田園		5,750	316	I-IV	99.1.13-2.2	
17 支樁 7 田園		2,504	542		99.1.13-2.2	
18 支樁 8 田園		3,000	460		99.1.13-2.2	
19 支樁 9 田園		1,527	191.5		99.1.13-2.2	
	12-10-1 田園	3,894	1,304		99.1.13-2.2	

Tab. 3 第4次調査遺構一覧表

遺構点	地区名	遺構物・田園名	遺構曲数	遺構	時代・時期	備考
1 I・II 支樁 1号塗跡	1	河川跡2、溝6、土壙6、 枝葉土塗	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、サメカイド(サ メカイド)、小刀(小刀)、 打削器(打削器)、磨製石斧	縄文時代後期 ~江戸時代	
2 I-II 支樁 3号塗跡 支樁 4号用小塗	1	溝7、土塗47、坑1塗23 雨水処理物2	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、馬鹿頭(馬頭)、 打削器(打削器)、磨製石斧	縄文時代後期 ~鎌倉時代	
3 I-IV 支樁 2号横水路跡 I-II区	1	溝2、土塗1、堆土塗5	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~鎌倉時代	
4 II 13-3 用小塗	1	上塗1、地土塗1	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~平安時代	平安去澤 跡はII-A-B
5 13-8 田園(一部) 13-7 田園	1	河川跡1、土塗1、堆土塗4、 立柱跡物1、pit	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代	
6 13-7 A田園	1	溝1、堆土塗1	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代	
7 13-7 田園(一部) 13-6 田園	1	溝2、堆土塗4	1	土師器(陶・瓦)、7輪 青銅鏡(鏡)、化粧物、瓦芯	平安時代 ~鎌倉時代	界面はAB
8 13-9 田園	1	堆土塗6、上塗3、pit	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代	
9 13-5 田園	1	堆土塗4、堆土塗1、pit	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 界面はAB	
10 13-3 田園	1	河川跡1、上塗3、洗土塗1	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~江戸時代	
11 13-2 A田園	1	溝1、土塗16、性土塗2、堆墓1	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代	
12 13-1-1 田園	1			縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、土師器(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~江戸時代	
III 13-1-2 田園	1			縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~江戸時代	
IV 支樁 2号横水路跡	1			縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~江戸時代	
13 12-3 田園	1	土塗3、pit	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~江戸時代	平根実測
14 12-4 田園	1	土塗1、溝1、pit	1	土師器(瓶、壺)、磨製石片	縄文時代 ~江戸時代	平根実測
15 12-5 田園	1	洗浄池跡2、上塗2、堆土塗4 雨水処理物2、pit群	1	土師器(瓶、壺)、磨製石片、 青銅鏡(鏡)	縄文時代後期 ~鎌倉時代	
I・II 12-6 田園	1	溝1条、上塗8、堆土塗18	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代後期 ~江戸時代	
III・IV 12-7 田園	1			縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~鎌倉時代	
16 12-8 田園	1	土塗1、堆土塗1、雨水処理物1	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代	界面はB地 点と
17 12-9 田園	1	堆土塗4、pit群	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~鎌倉時代	界面はB地 点と
18 12-10-1 田園	1	溝1、土塗2、堆土塗2、pit	1	縄文土器類(手取器、鉢、 皿)、馬鹿頭(馬頭)、白鶴 (W)、竹筒(竹筒)、木炭	縄文時代 ~鎌倉時代	

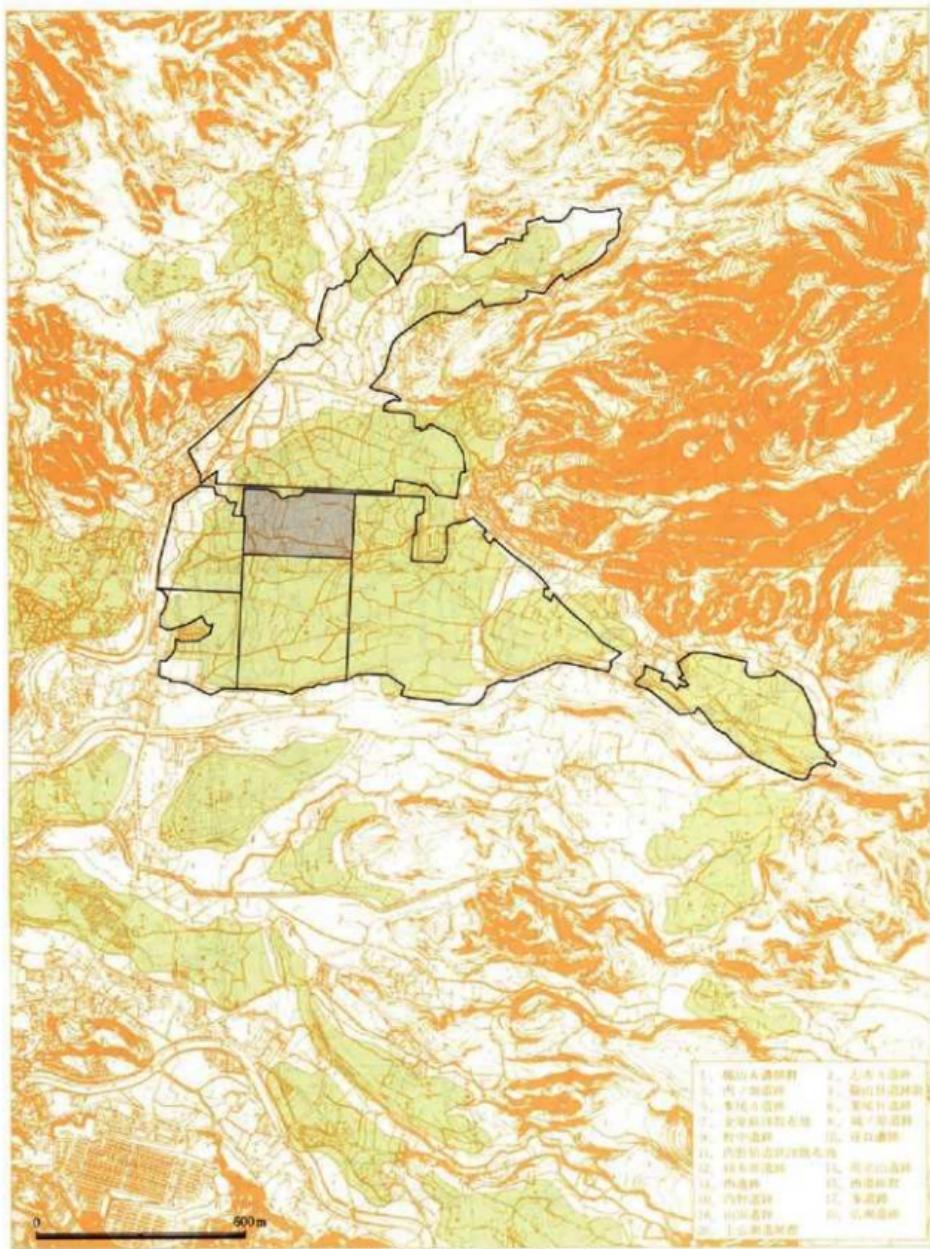


Fig. 3 脇山周辺遺跡分布図（縮尺1/16,000）

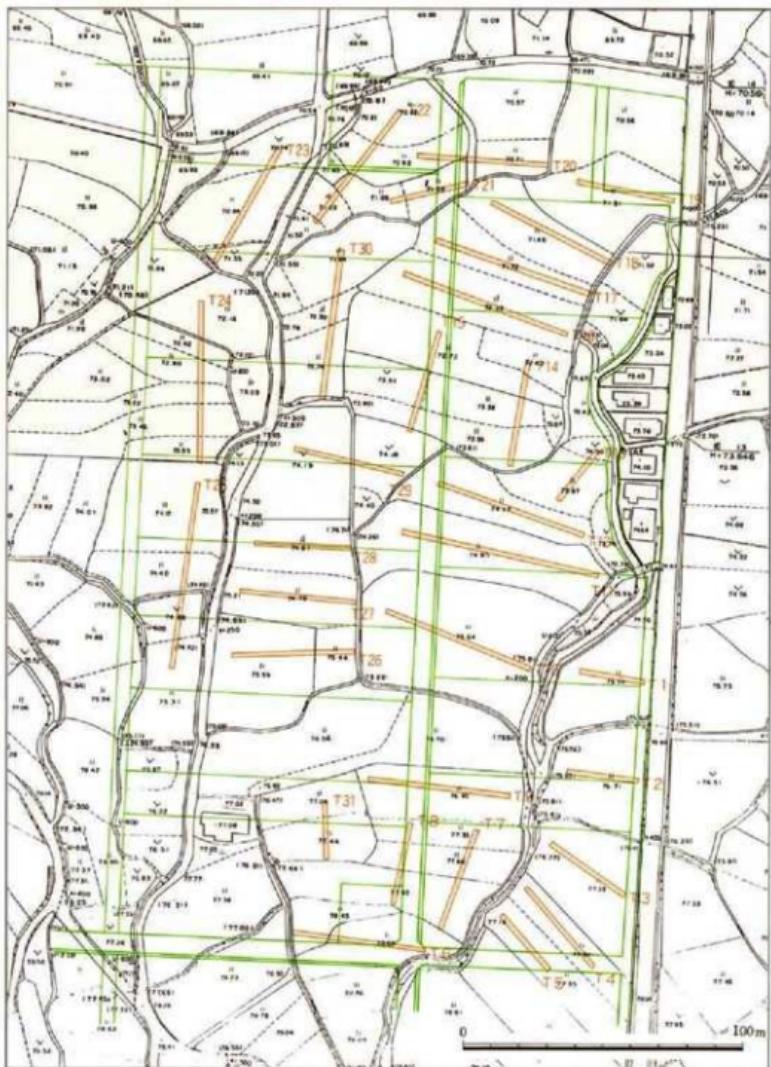


Fig. 4 試掘調査トレンチ配置図（縮尺1/2,000）  
※数字はトレンチNoを示す。

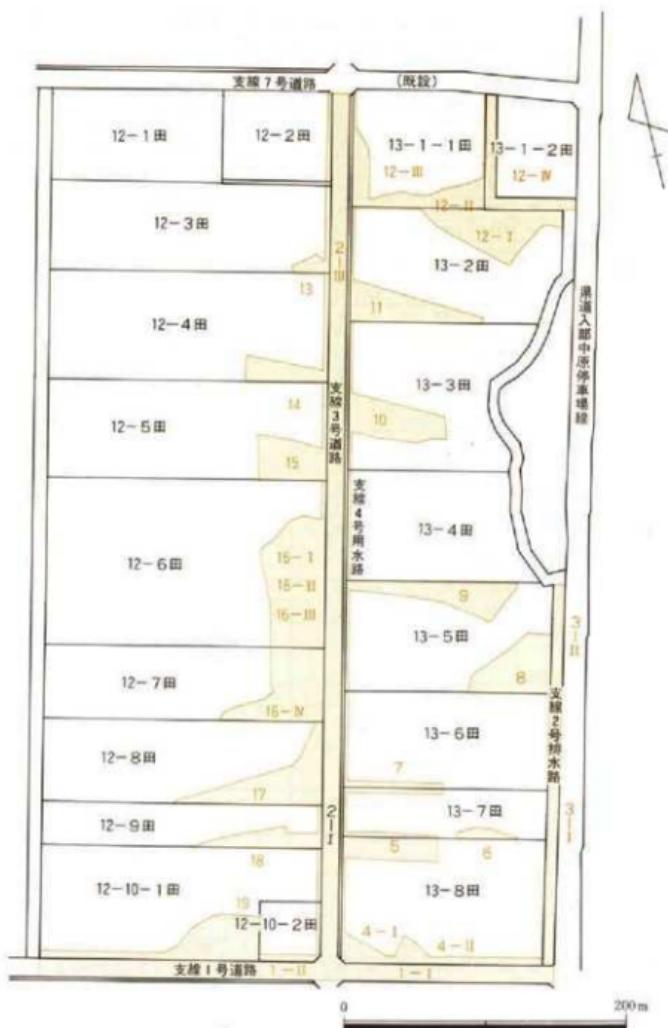


Fig. 5 調査地点及び事業計画図 (縮尺1/2,000)

Tab. 4 第4次調査土壤(SX)一覧表①

地点	構造物・田園表示	造成番号	寸法(cm)		土 壹 物		地盤等級 等級	地 壓 等 級	地 物	圖 号
			長	幅	深	木炭				
1. 西端 2 号道路	馬場山地	SX01	馬場山地	透水形	120	70	24	×	○ ○	
		02	馬場山地	透水形	650	180	21	○	○ ○	暗面
		03	馬場山地	透水形	90	72	15	×	×	×
		04	馬場山地	透水形	195	90	25	×	○ ○	暗面
		05	馬場山地	透水形	120*	90*	32	○	○ ○	整面一部
		06	馬場山地	透水形	140	85	30	○	○ ○	
		07	小堅石	透水形	250	230	56	○	○ ○	
		08	馬場山地	透水形	170	130	27	×	○ ○	
		09	馬場山地	透水形	245	240	20	×	×	
		10	馬場山地	透水形	175	120	63	○	○ ○	2 土師質土質(堅)
		11	馬場山地	透水形	180	125	42	×	○ ○	北部半面
		12	馬場山地	透水形	125	90	8	×	×	
		13	馬場山地	透水形	125	90	36	○	○ ○	整面全面
		14	馬場山地	透水形	170	125	57	○	×	1.5 土師質土質(堅)
		15	馬場山地	透水形	160	120	37	○	○ ○	整面全面
		16	馬場山地	透水形	170	80	23	○	×	1.7 上耕層、暗面(堅)
		17	馬場山地	透水形	140	75	72	○	○ ○	整面全面
		18	馬場山地	透水形	160	95	15	○	×	土師質土質(堅)
		19	馬場山地	透水形	95*	65	16	○	○ ○	
		20	馬場山地	透水形	130	100*	20	○	○ ○	
		21	不堅石	透水形	160	80*	15	×	×	
		22	小堅石	透水形	500	340	30	×	×	土師質(堅)
		23	火							
		24	*							
		25	馬場山地	透水形	110	80	32	○	×	○ 整面全面
		26	不堅石	透水形	90	40*	24	×	○ ○	
	2. 支線 3 号道路	SX01	火							
		1	*							
		SX29	*							
		30	馬場山地	透水形	130	75	33	×	○ ○	西側壁面 3
		31	PEF	透水形	120	80	29	×	×	
		32	馬場山地	透水形	120*	90*	36	×	○ ○	暗面 裸露石 馬場地にみる
		33	火	透水形	260	190	34	○	×	2
		34	馬場山地	透水形	140	100	20	○	○ ○	整面一部
		35	馬場山地	透水形	160	110	46	○	○ ○	
		36	不堅石	透水形	170	100	17	○	○ ○	整面 4 岩竹(堅), 梅(火), 桂(火)
		37	火							
		38	*							
		39	馬場山地	透水形	140	100	30	○	○ ○	暗面
		40	馬場山地	透水形	120	80	37	○	○ ○	北側壁(堅), 裸露石
		41	馬場山地	透水形	145	80	35	○	○ ○	整面
		42	馬場山地	透水形	145	75	27	○	○ ○	整面全面 2
		43	馬場山地	透水形	210	120	38	○	×	2 暗面
		44	火	透水形	120	80	57	○	○ ○	整面一部 3
		45	馬場山地	透水形	95	40*	28	×	○ ○	東側壁面 3.5 土師質にみる
		46	馬場山地	透水形	120	40*	35	×	○ ○	東側壁 3
		47	火	透水形	120	100	23	○	○ ○	整面一部 2
		48	馬場山地	透水形	110*	80	23	○	○ ○	整面一部 2
		49	馬場山地	透水形	130	90	38	○	○ ○	馬場地にみる

Tab. 4 第4次調査土壤(SX)一覧表②

地点	検査物質番号	土壤番号	形態	保水率(%)	堆積物	泥炭	砂土	重上量 kg/m <sup>3</sup>	地下水	通気性	備考
2 支線3号道路	SX50	角柱形	150	105	45	○ ○ ○ ○ ○	堅面一部				
	51	丸									
	52	不定形	芝桜形	190	120	50 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	3			
	53	角柱形	芝桜形	165	68	31 ○ × ○ ○ ○	堅面		馬入一帯(60), 七郎山(3)		
	54	4型形	芝桜形	441	58	12 × × × × ○				清流土壤	
	55	X									
	56	1									
	59	*									
	60	馬入形	芝桜形	60	40	5 ○ × ○ ○ ○ ○ ○	堅面一部				
3 順向1号線	SX01	馬入形	新形	140	85	26 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	3			
	02	馬入形	芝桜形	195	140	33 ○ ○ ○ ○ ○	堅面				
	03	不定形	芝桜形	127 <sup>1/2</sup> 16	10	× ○ ○ ○ ○ ○	堅面		堆存地にある		
	04	馬入形	状	136	78	38 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	2.2			
	05	7号形	芝桜形	292	230	64 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	2.0	土師器(2), 無縫石		
	06	馬入形	芝桜形	165	89	50 × ○ ○ ○ ○ ○	堅面	0.9			
4 13-8 A田園	SX01	馬入形	芝桜形	190	90	31 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	2	鶴丈上谷(2)		
	02	馬入形	芝桜形	155	90	37.5 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	1.2	土師質土器(2)		
	03	馬入形	芝桜形	126	75	15 ○ ○ ○ ○ ○	堅面				
	04	馬入形	芝桜形	155	73	28 ○ × ○ ○ ○ ○	堅面				
5 13-7 B田園	05	馬入形	芝桜形	129	75	40 × ○ ○ ○ ○ ○	堅面		馬土質でない		
	SX01	馬入形	芝桜形	185	135	49.5 ○ ○ ○ ○ ○	堅面	0.9			
	06	馬入形	芝桜形	110	58	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		炭化物		
6 13-7 A田園	07	馬入形	芝桜形	155	90	37.5 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		炭化物		
	08	内形	レンズ形	120	120	12 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		炭化物		
	09	馬入形	芝桜形	165	100	15 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		炭化物		
	10	馬入形	芝桜形	110	100	39 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
7 13-6 田園	SX01	馬入形	芝桜形	180	165	61 ○ × ○ ○ ○ ○ ○	堅面	1.1			
	02	馬入形	状	185	120	60 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		1		
	03	馬入形	芝桜形	180	110	25 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		南部堅面	0.9	
	04	馬入形	芝桜形	145	100	39.5 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
	05	馬入形	芝桜形	160	90	39 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	1 鶴丈上谷(2)	
	06	馬入形	芝桜形	160	120	17.5 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
8 13-5 B田園	SX01	馬入形	芝桜形	145 <sup>1/2</sup> 16	100	16 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○				
	02	馬入形	状	185	120	60 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		1		
	03	馬入形	芝桜形	180	110	25 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
9 13-5 A田園	04	馬入形	芝桜形	145	100	39.5 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
	05	馬入形	芝桜形	160	90	39 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	1 鶴丈上谷(2)	
	06	馬入形	芝桜形	160	120	17.5 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
	07	馬入形	芝桜形	180	165	61 ○ × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○				
	08	内形	芝桜形	175	115	39.5 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
	09	馬入形	芝桜形	200	220	100 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○		
10 13-3 田園	SX01	馬入形	芝桜形	170	65 <sup>1/2</sup> 19	× ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○				
	02	不整形	芝桜形	170 <sup>1/2</sup> 115	100	× × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○				
	03	馬入形	芝桜形	190	155	32 ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○				
	SX01	馬入形	芝桜形	200	105	31 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		内部堅面		
	02	馬入形	芝桜形	175	115	39.5 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	03	内形	芝桜形	200	100	31 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	SX01	馬入形	芝桜形	170	160	54 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	02	馬入形	レンズ形	160	85	29.5 ○ × ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	03	馬入形	芝桜形	150	80	15 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
11 13-2 A田園	04	馬入形	芝桜形	160	90	26 ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	05	馬入形	芝桜形	160	105	48 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	06	内形	芝桜形	175	115	39.5 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	SX01	馬入形	芝桜形	170	160	54 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	02	馬入形	レンズ形	160	85	29.5 ○ × ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	03	馬入形	芝桜形	150	80	15 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	04	馬入形	芝桜形	160	90	26 ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	05	馬入形	芝桜形	160	105	48 × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
12 13-1-1 田園 13-1-2 田園 13-2 A田園 13-2 B田園 13-2 C田園	06	馬入形	芝桜形	140	105	48 ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	07	馬入形	芝桜形	415	330 <sup>1/2</sup> 34	○ × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	08	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	09	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	10	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	11	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	12	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		
	13	馬入形	芝桜形	460	200 <sup>1/2</sup> 47	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○		

Tab.4 第4次調査土壤(SX)一覧表(3)

## (2) 第1地点 I・II区 (1号道路)

この調査区は南北方向に長さ約185m、幅10mを測る道路予定地である。調査区の中央部は標高78.80mを測り、地山は南側と北側へ各々傾斜している。道路は丘陵部を横断した形で計画されている。調査区の中央部には、幅2m足らずの水路が横断し、東方へ流下している。調査区はこの水路を境に南側をI区、北側をII区とした。I・II区の造構は全て通し番号としたが、焼土壙はSXとし、他の土壙をSKとした。造構は河川跡2条、溝状造構6条、焼土壙22、土壙6を検出した。焼土壙の平面形は不定形または不整長方形を呈しているが、遺存状態の良い底面では長方形又は、隅丸長方形を呈する。周壁はいずれもやけているが、堅く締まった土壙は少ない。土層の最下部には木炭材が存在する。SX07-SX19は長軸方向に並べた炭化木が出土している。土壙の大きさは長さ0.9m、幅0.7mの小形から、長さ6.5m、幅1.8mの大きさまである。長さ100cm前後と、長さ150cm以上のグループに分けられる。SX10の壙底には径90cmを測るpitが存在する。溝状造構の大部分は田畠の地割りに関連するが、溝SD05は江戸時代に属している。

### 1) 遺構説明

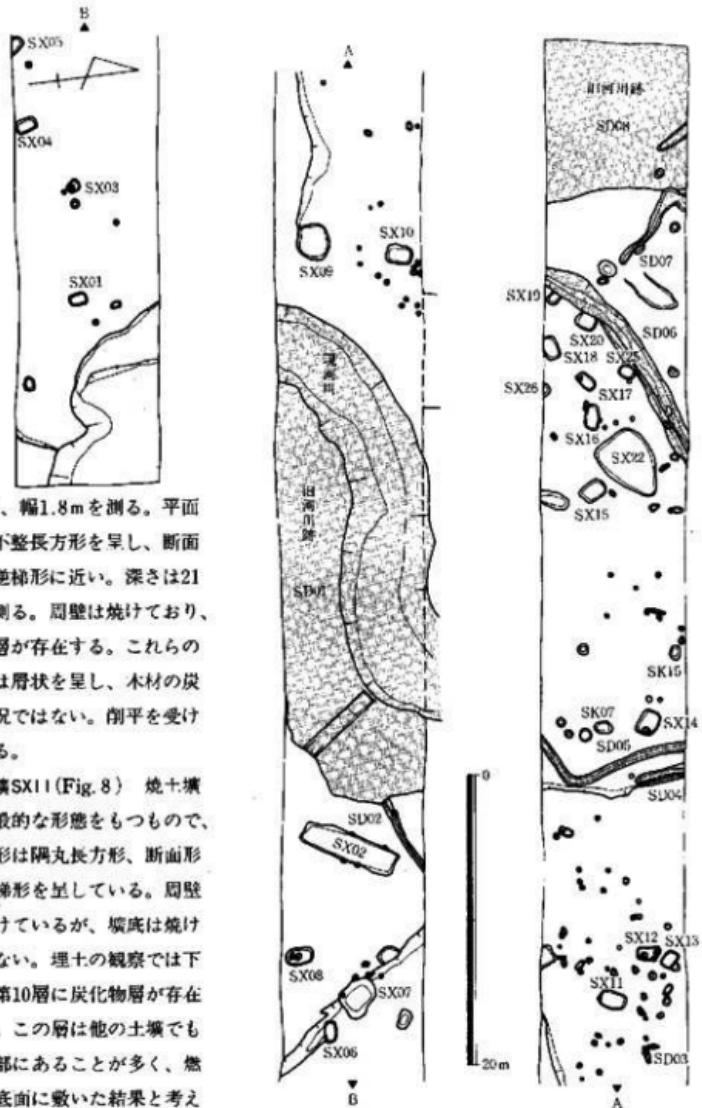
焼土壙SX02(Fig.7) 最大規模の土壙で、同様なものは第3次調査でも検出している。全長は



I・II調査区全景（南から）



II調査区全景（北から）



6.5m、幅1.8mを測る。平面形は不整長方形を呈し、断面形は逆梯形に近い。深さは21cmを測る。周壁は焼けており、木炭層が存在する。これらの木炭は層状を呈し、木材の炭化状況ではない。削平を受けている。

焼土壌SXII(Fig. 8) 焼土壌の一般的な形態をもつもので、平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈している。周壁は焼けているが、壙底は焼けていない。埋土の観察では下位の第10層に炭化物層が存在する。この層は他の土壤でも最下部にあることが多く、燃料を底面に敷いた結果と考えられる。

Fig. 6 第1地点 構造配置図 (縮尺1/400)

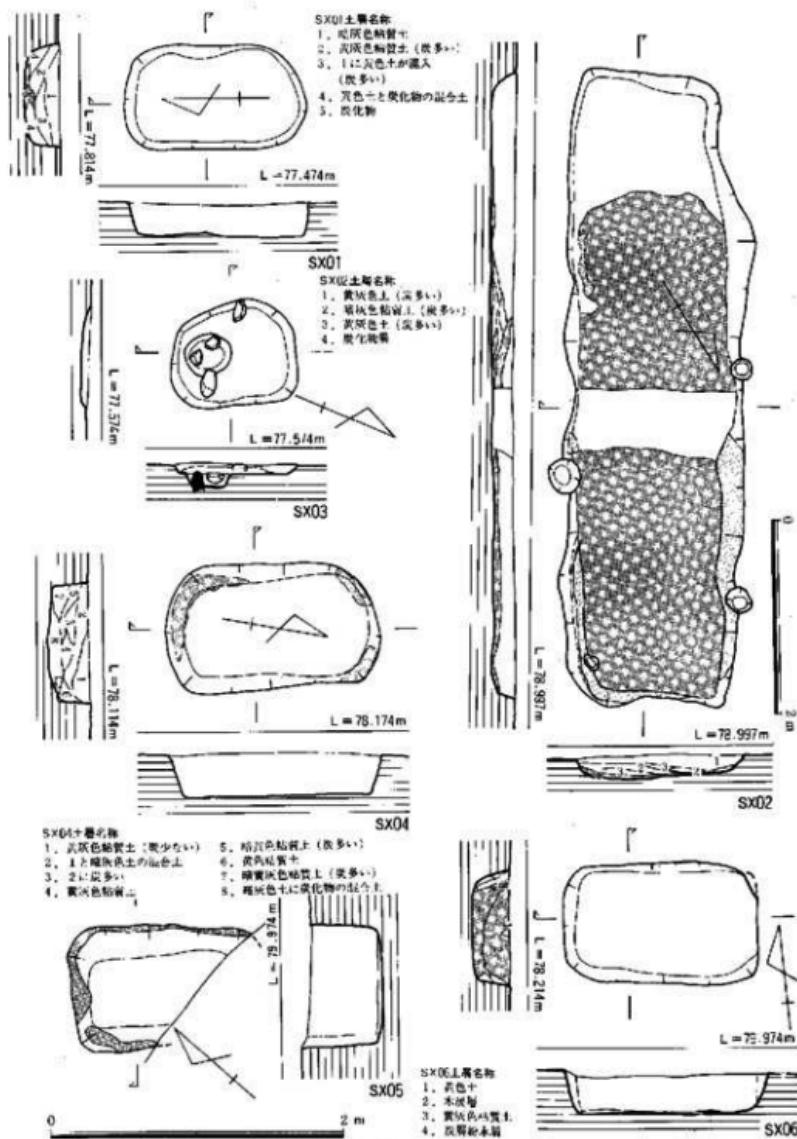
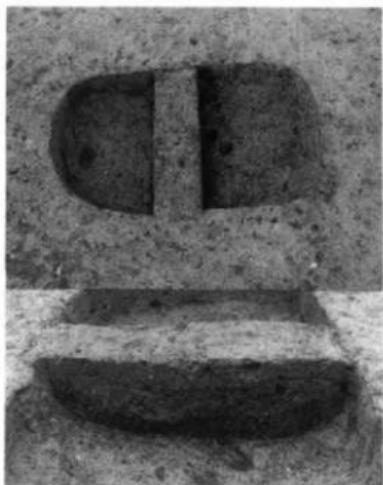
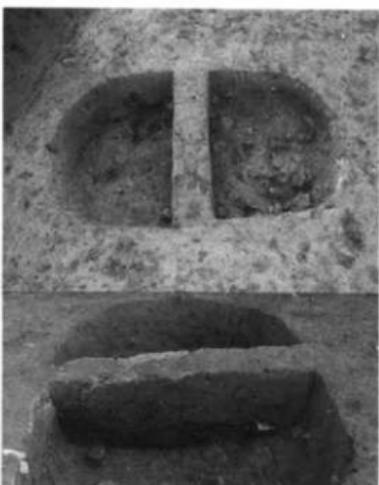


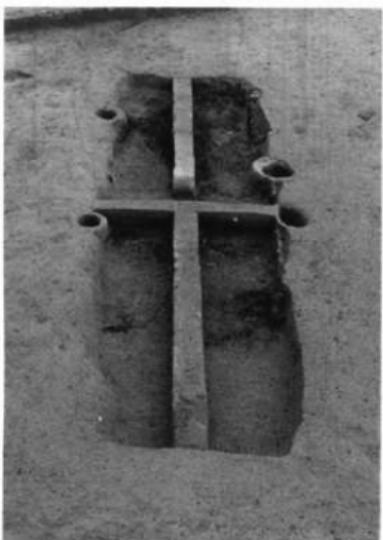
Fig. 7 第1地点 烧上坡SX01~06実測図 (縮尺1/40・1/60)



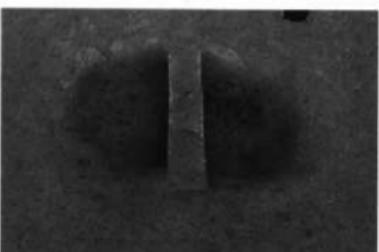
I区 焼土壌SX01（東から）、土層状態



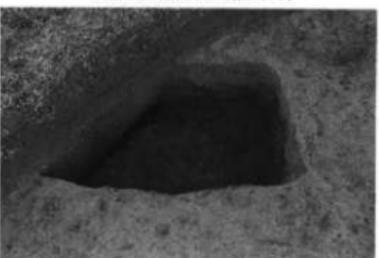
I区 焼土壌SX04（東から）、土層状態



I区 焼土壌SX02（南から）



I区 焼土壌SX03（西から）



I区 焼土壌SX05（北から）

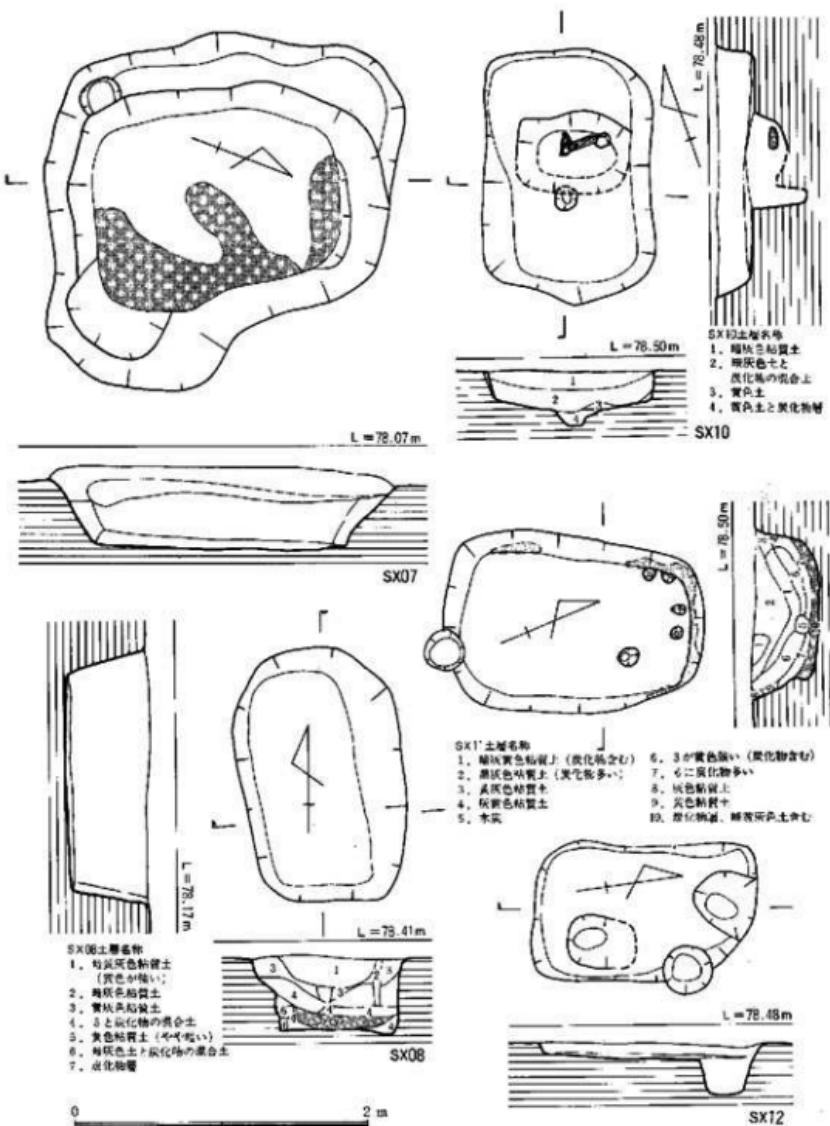
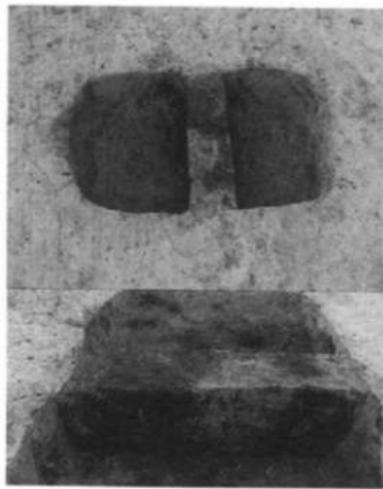
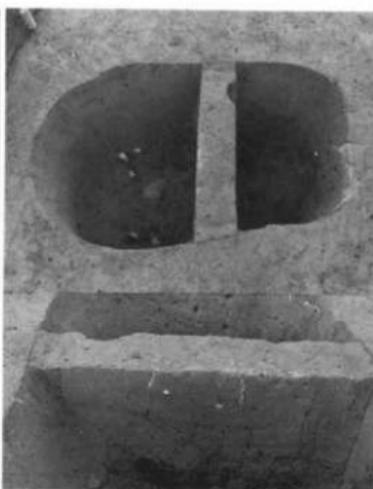


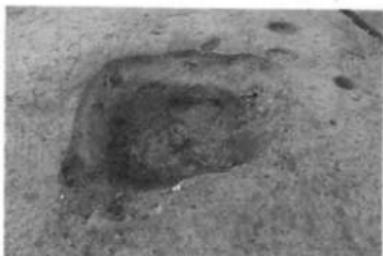
Fig. 8 第1地点 燃土堆SX07~12実測図 (縮尺1/40)



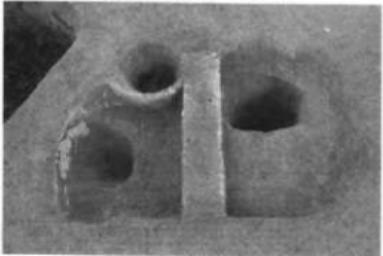
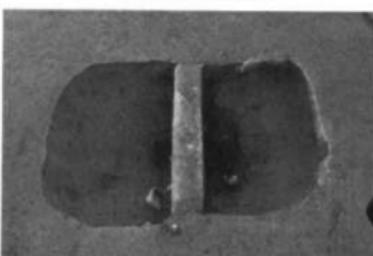
I区 焼土壤SX06（北から）、土層状態



I区 焼土壤SX08（東から）、土層状態



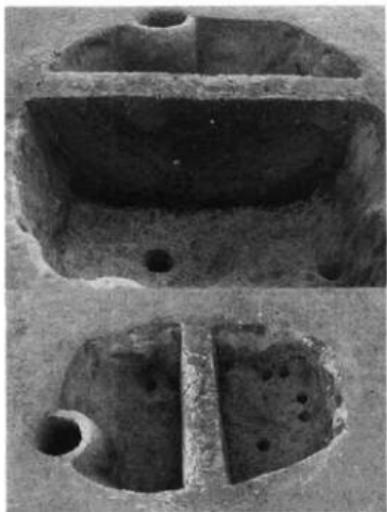
I区 焼土壤SX07（東から）



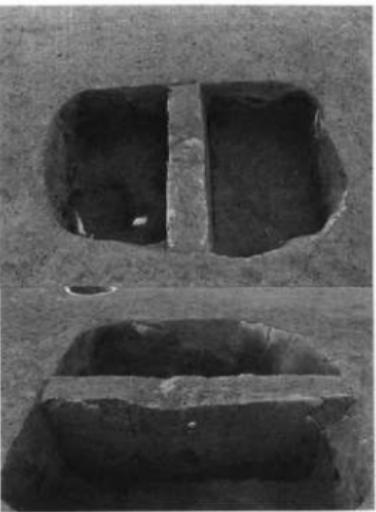
I区 焼土壤SX12（西から）



I区 焼土壤SX10（東から）、土層状態



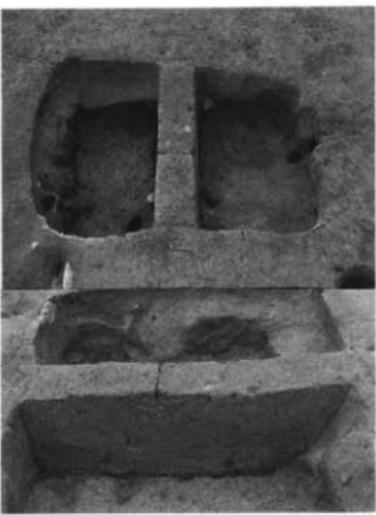
II区 焼土壙SX11（南から）、土層状態



II区 焼土壙SX14（東から）、土層状態



II区 焼土壙SX13（北から）



II区 焼土壙SX15（東から）、土層状態

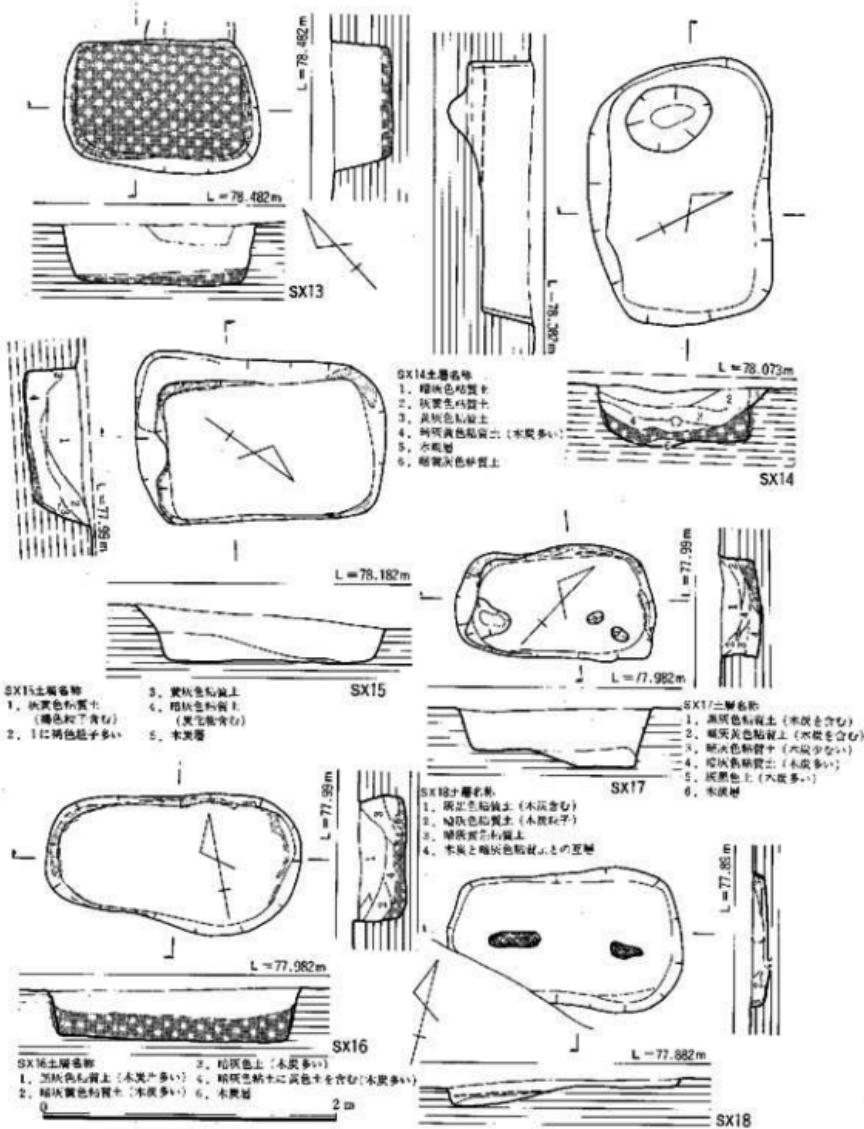
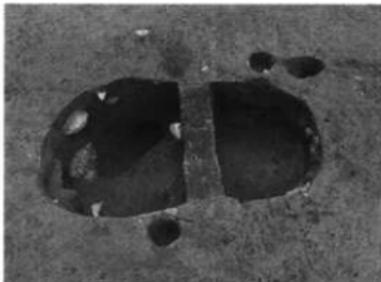


Fig. 9 第1地点 燐上壙 SX13~18実測図 (縮尺1/40)



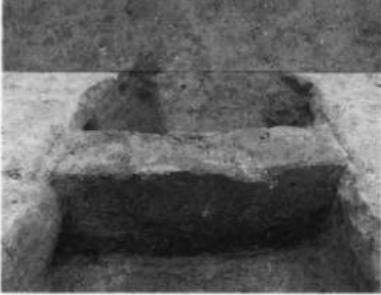
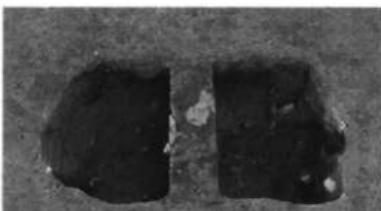
II区 焼土壌SX16（北から）、土層状態



II区 焼土壌SX18（北から）



II区 焼土壌SX19（西から）



II区 焼土壌SX17（北西から）、土層状態



II区 焼土壌SX20（西から）

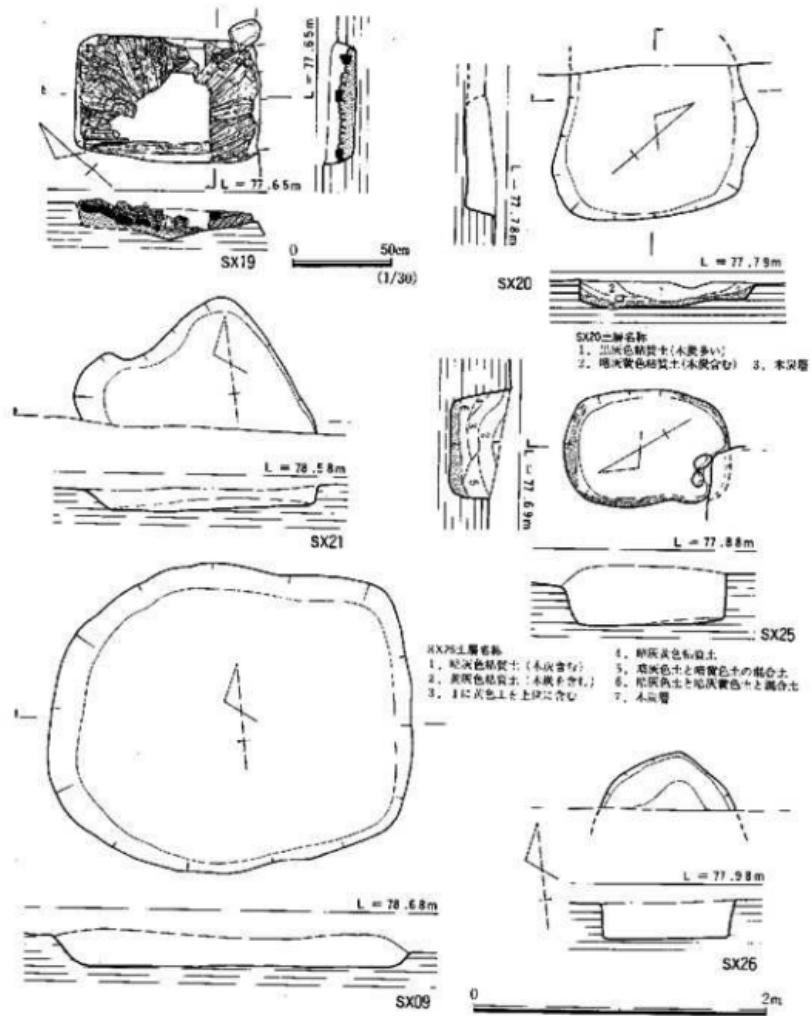
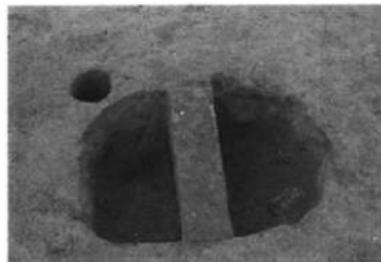
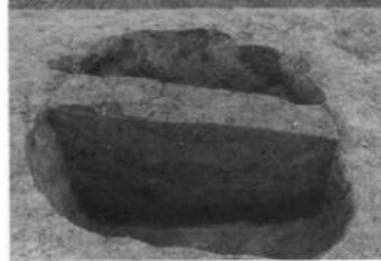


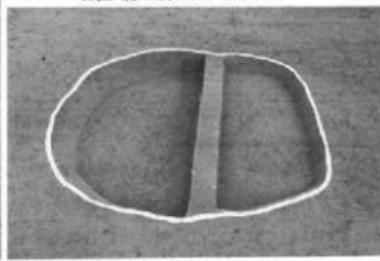
Fig.10 第1地点 烧土塙SX09・19・21・25・26測図 (縮尺1/30・1/40)



II区 焼土壙SX26（北から）



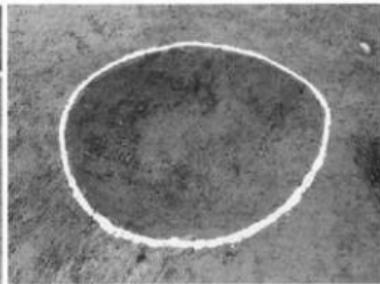
II区 焼土壙SX25（西から）、土層状態



II区 土壙SK09（南から）



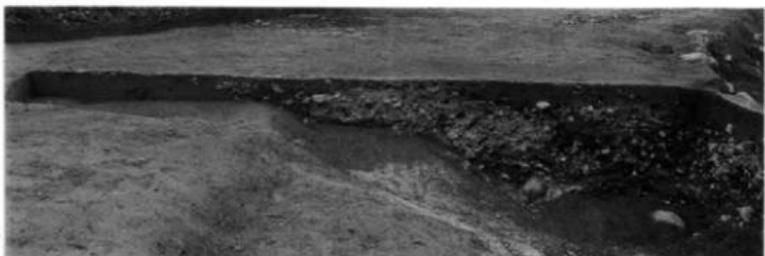
II区 土壙SK07（東から）



II区 土壙SK22（南から）

焼土壙SX19 (Fig.10) II区に位置する。削平を受け遺存状態は悪い。平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈している。長さ95cm、幅65cm、深さ16cmを測る。壙底には木炭層がある。厚さ14cmを測る。木炭層は2層に分離でき、上層は割材や丸材である。下層は小指大の屑材や粉末状になっている。上層の木炭は径3～5cmを測る。土壙の長軸方向もしくは放射状に並べられ、2～3段に積まれている。下層の炭化材は燃料の柴と考えられる。

河川跡SD01 (Fig.11) 調査区の中央に位置し、上部に現在の水路が乗っている。この水路に



河川跡 SD01土層の状況（南から）

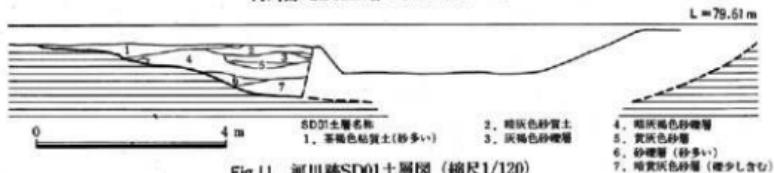


Fig.11 河川跡SD01土層図 (縮尺1/120)

直交するトレンチを設定した結果、断面形が逆梯形を呈する旧河川の肩を検出した。覆土には砂礫が堆積しており、白磁碗、土器器皿等の破片が出土した。この河川跡の復原幅は約20mを測るもので、肩状地の中央部を貫流する水路として開削されたものであろう。

## 2) 遺物説明

遺構他出土遺物 (Fig.12) 1・2は白磁碗。3は唐津系陶器。4は糸切りの土器器。5は繩文土器。7はサスカイト製の石鎌である。2は河川跡SD01のトレンチより出土。4は焼土壙SX03出土である。7はpit 3より出土。6は表土から出土した。6は寛永通宝である。裏面の上位に「文」の文字がある。直径2.4cm、縁幅0.2cm、四角い孔の長さ0.6cmを測る。

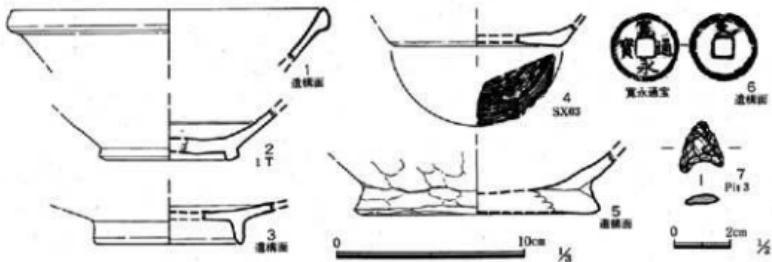


Fig.12 第1地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2)

### (3) 第2地点 I ~ III区 (3号道路)

この調査区は東西方向の道路予定地で、長さ約310m、幅約10mを測る。層状地の中央を縦貫するため、調査区は東側に傾斜する。第1地点との交差部分が最も高く、標高約78.80mを測る。東端部の標高は約70.50mである。造構面は開田時の削平や盛り土施工により、場所によって削平状態や土層状況が異なる。地山は西側が黄褐色粘質土、中央部分が黒褐色砂質土、東側が黄灰色粘質土である。層位的には砂礫層上に黒褐色の固く締まった砂質土が堆積し、その上部に堆積土の黄灰色粘質土、又は黄褐色粘質土が乗っている。造構は溝状造構7条、土壙44、焼土壙23、掘立柱建物2棟を検出した。焼土壙をSXとし、その他の土壙をSKとする。

#### 1) 造構説明

##### 焼土壙(SX)

焼土壙の平面形には不整隅丸長方形と隅丸長方形が、断面形は逆梯形、又は箱形である。規模は大・小ある。大型はSX33を最大として長さ170~260cmである。小型はSX60を最小規模として、長さ60~150cmである。いずれも周壁は焼けている。床面に炭化物又は炭化物含有層が存在する。SX33は平面形が不定形を呈しているが、他の土壙と切り合っており、本来の形状は不明である。焼壁のみ一部存在した。SX31・32・46は境界地にある。SX40~44の底面は一部深くな



第2地点 I ~ III区全景（西から）



II区全景（西から）



III区全景（東から）

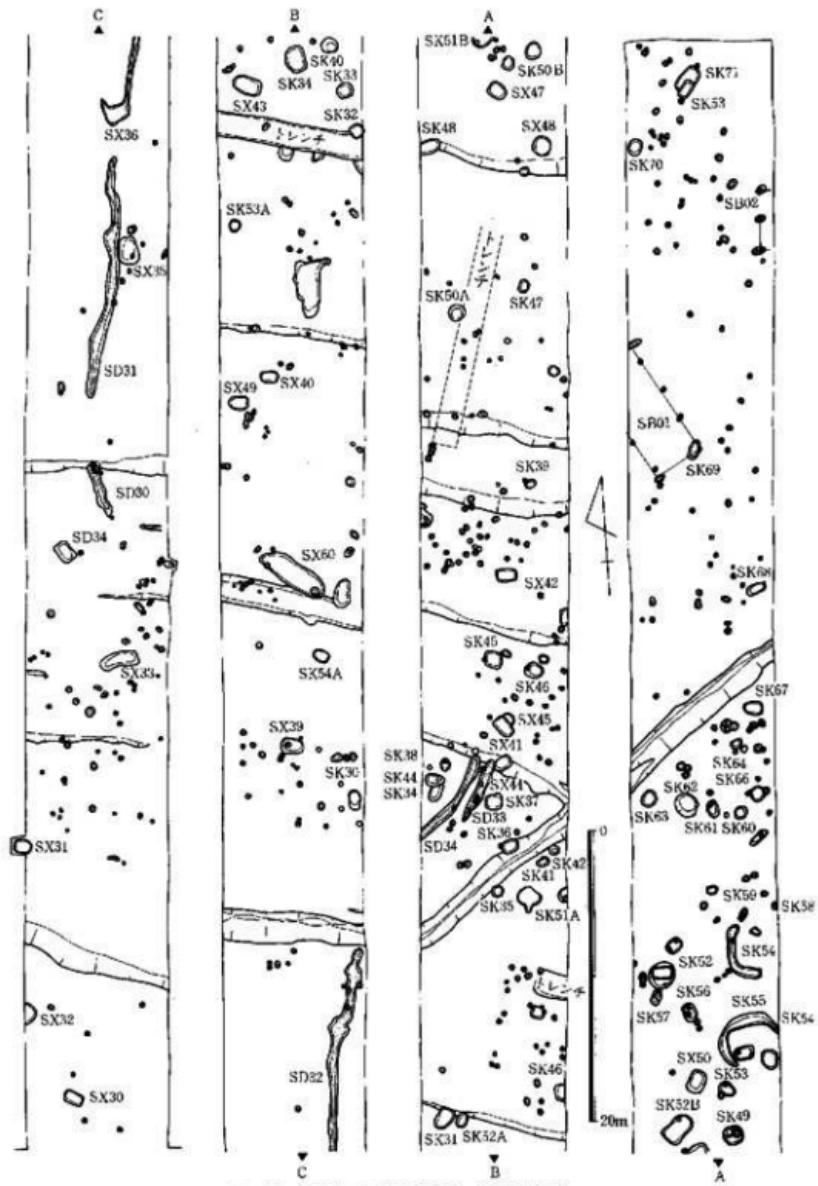


Fig.13 第2地点 造構配図 (縮尺1/400)

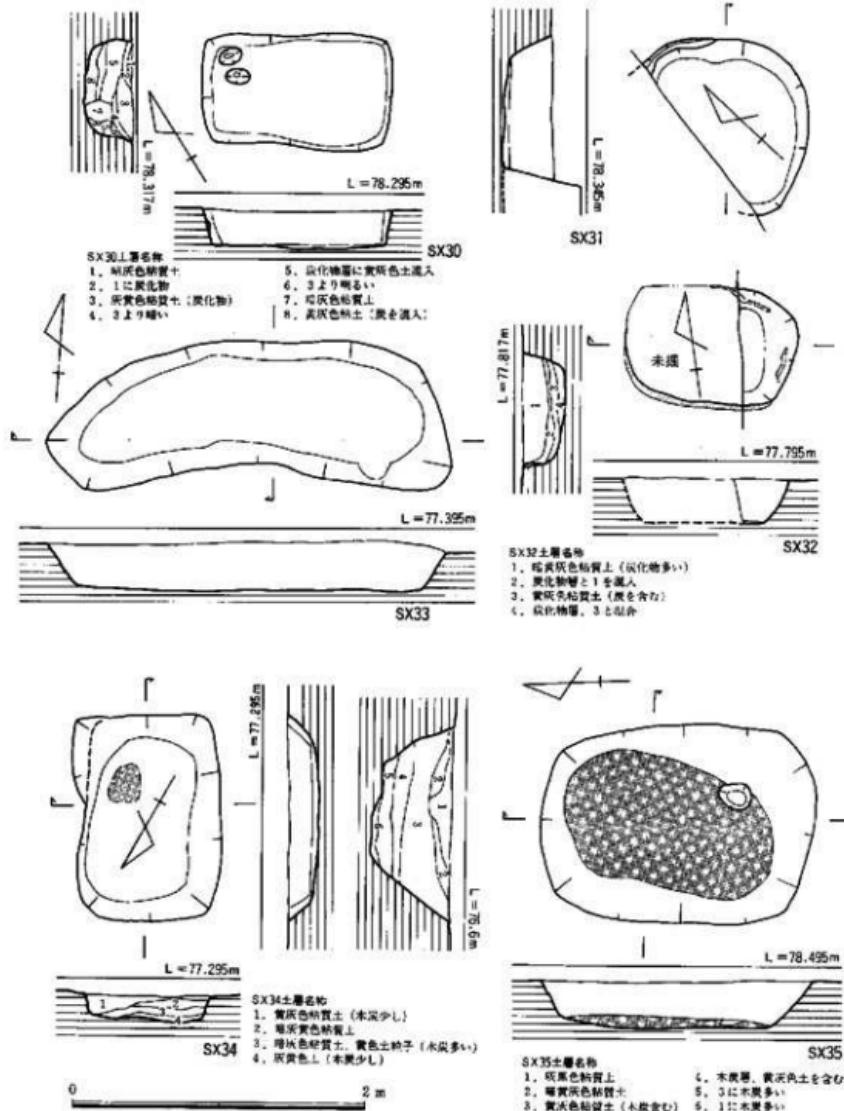


Fig.14 第2地点 燃土壌SX30~35実測図 (縮尺1/40)



I区 焼土壙SX30（南から）、土層状態



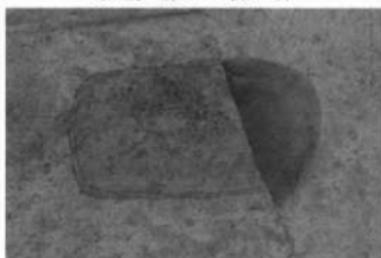
I区 焼土壙SX35（西から）、土層状態



I区 焼土壙SX31（東から）



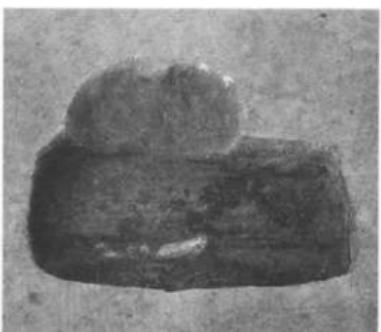
I区 焼土壙SX39（北から）、土層状態



I区 焼土壙SX32（西から）



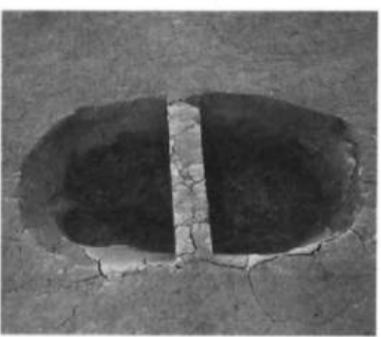
I区 焼土壙SX40（北から）、土層状態



II区 焼土壙SX41・45（西から）



II区 焼土壙SX42（北から）、土層状態



II区 焼土壙SX43（北から）



II区 焼土壙SX43土層状態

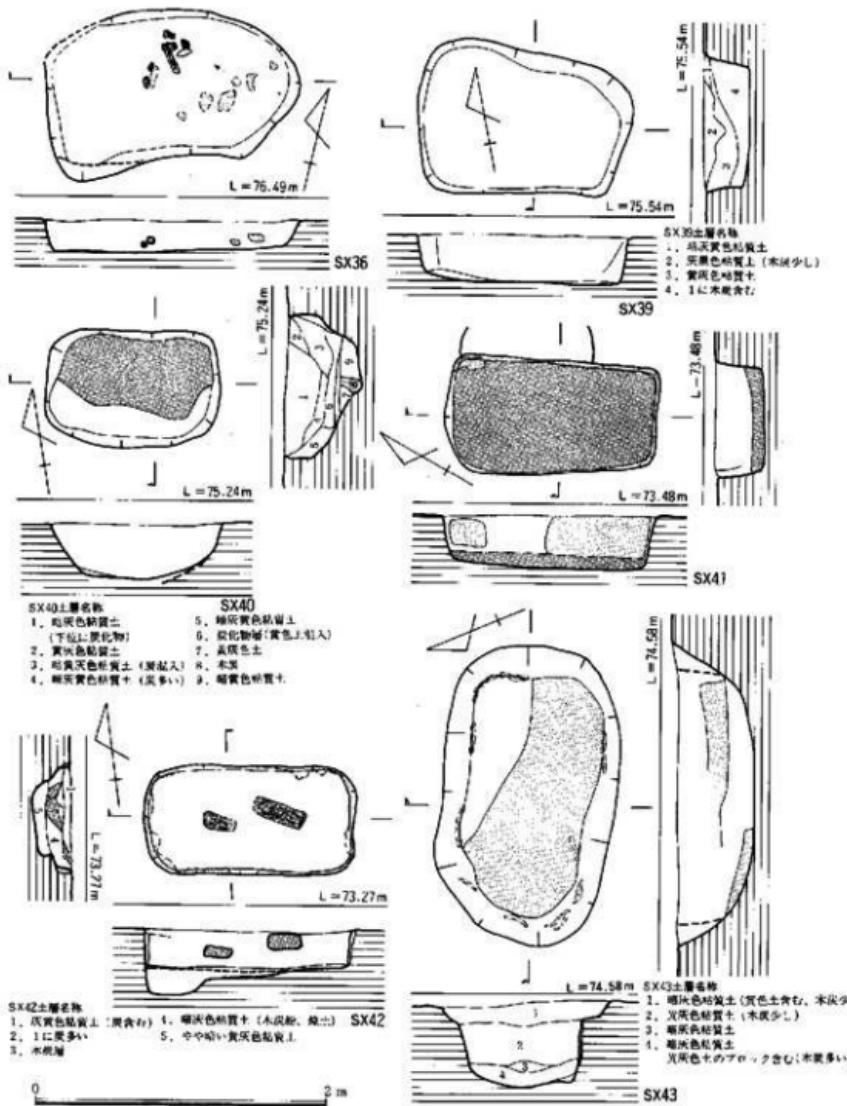
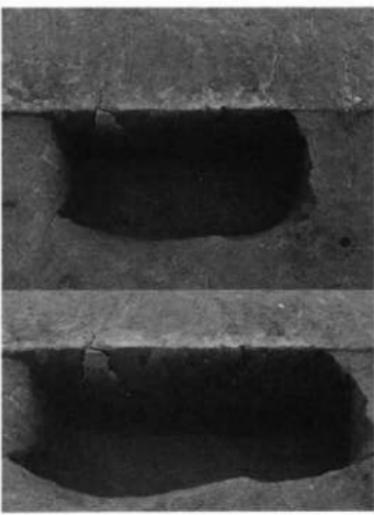


Fig.15 第2地点 焼土塙SX36~42実測図 (縮尺1/40)



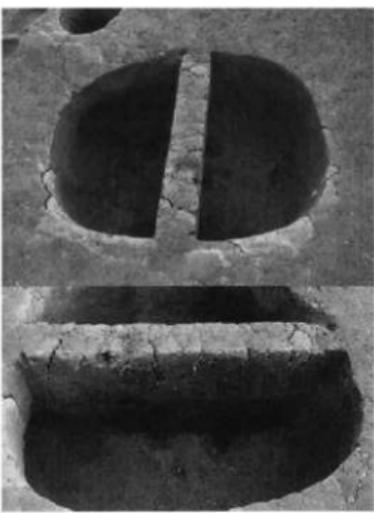
II区 焼土壤SX44（北西から）、土層状態



II区 焼土壤SX46（西から）



III区 焼土壤SX47（北西から）、土層状態



III区 焼土壤SX49（北西から）、土層状態

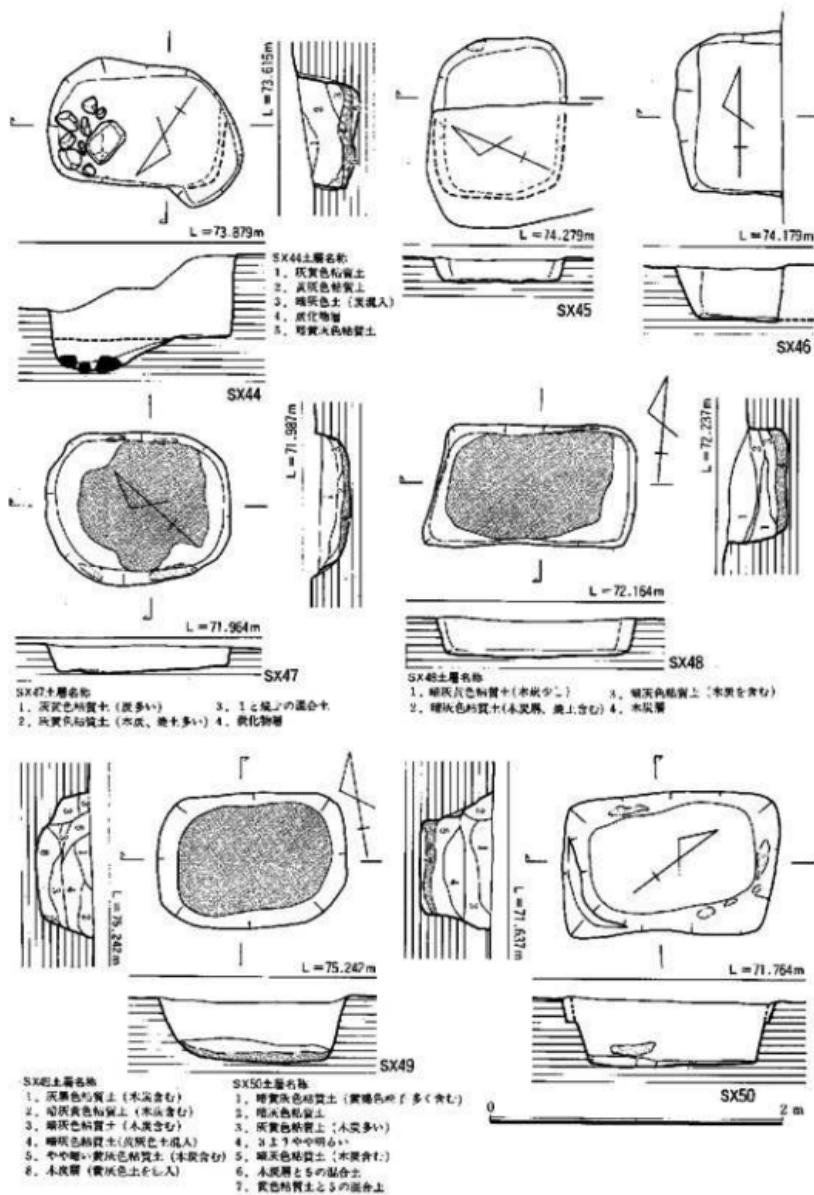
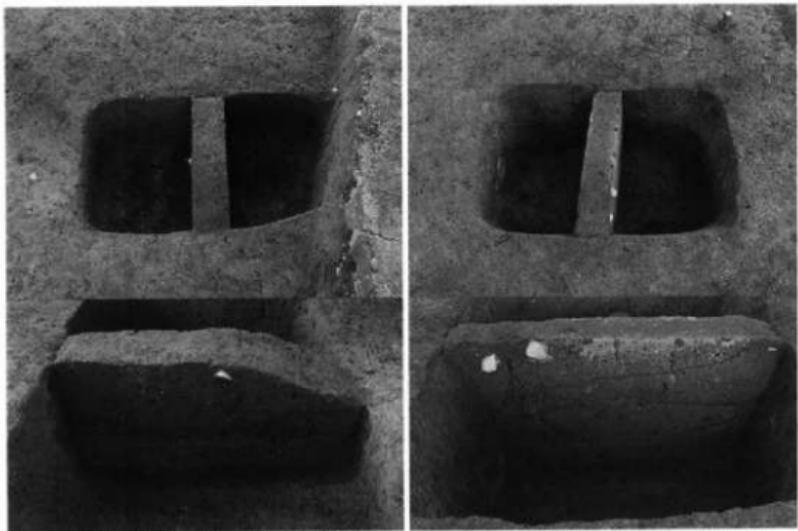


Fig. 16 第2地点 II・III区焼土場SX44~50実測図 (縮尺1/40)



III区 焙土壌SX48 (北から)、土層状態

III区 焙土壌SX50 (西から)、土層状態

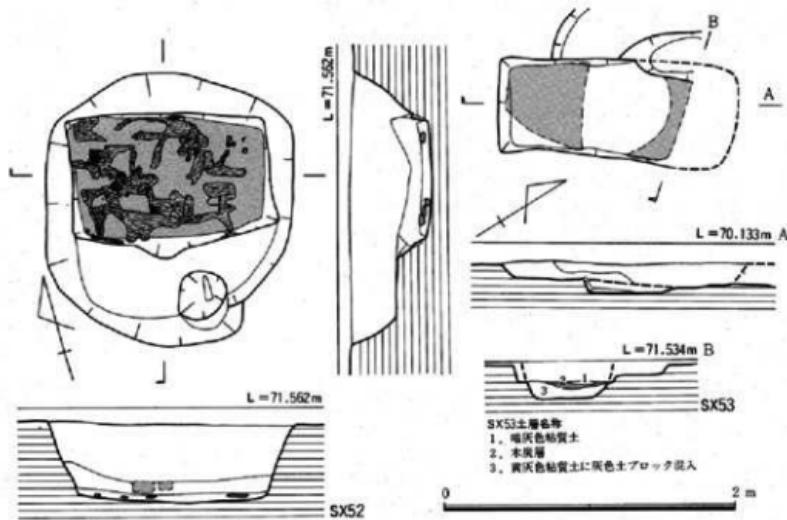
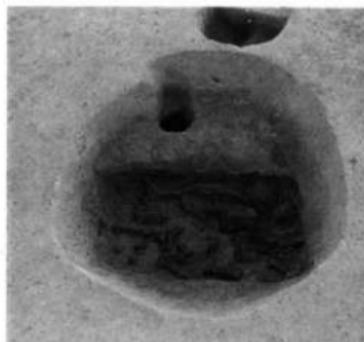
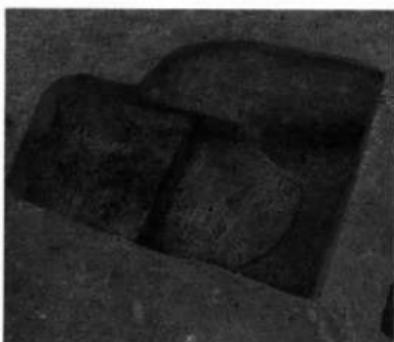


Fig.17 第2地点 III区焙土壌SX52・53実測図 (縮尺1/40)



III区 焼土壤SX52（北から）



III区 焼土壤SX53（北から）

っているが、掘り過ごしのためである。SX45・52・53は他の土壤と切り合っている。

SX42 (Fig.15) 平面形は隅丸長方形を呈し、長さ145cm、幅75cm、深さ27cmを測る。周壁は焼け、壙底に炭化物層がある。土壤上位にて落ち込んだ状態で木炭が出土した。直径10cmを測る。

SX47 (Fig.16) 平面形は不整隅丸長方形を呈している。底面に炭化物層が厚く堆積している。周壁の焼けた部分は少ない。長さ120cm、幅100cm、深さ22cmを測る。壙底は丸味をもっている。

SX50 (Fig.16) 平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形を呈する。長さ150cm、幅105cm、深さ45cmを測る。周壁は良く焼けており、長さは約198cmを測る。土壤の最下部には炭化物層が存在する。

SX52 (Fig.17) 他の土壤と切り合っており、平面形は不定形であるが、壙底では長方形を呈している。現存長190cm、幅120cm、深さ50cmを測る。底面には炭化材が堆積しているが、遺存状態は悪く、層状の木炭が多い。木炭の一部には径10cmを測るものもある。

#### 土壤 (SK)

土壤の平面形は大略、円形と長方形の2形態に分けられる。円形プランの断面形は壁が外側に膨み気味である。長方形プランの断面形は、逆梯形と箱形のものに分けられる。いずれも覆土は暗灰褐色粘質土を主体としている。

SK32 (Fig.18) 平面形は円形を呈し、長さ100cm、深さ55cmを測る。断面形は壁が袋状に近い形状を示す。

SK37 (Fig.18) 平面形は不整隅丸方形を呈している。長さ115cm、深さ66cmを測る。2段掘りになってる。覆土は暗灰色粘質土を主体とする。覆土中より縄文時代の粗製甕片がまとまって出土した。

SK43 (Fig.18) 平面形は隅丸長方形を呈し、長さ140cm、深さ31.5cmを測る。覆土は粘質土である。

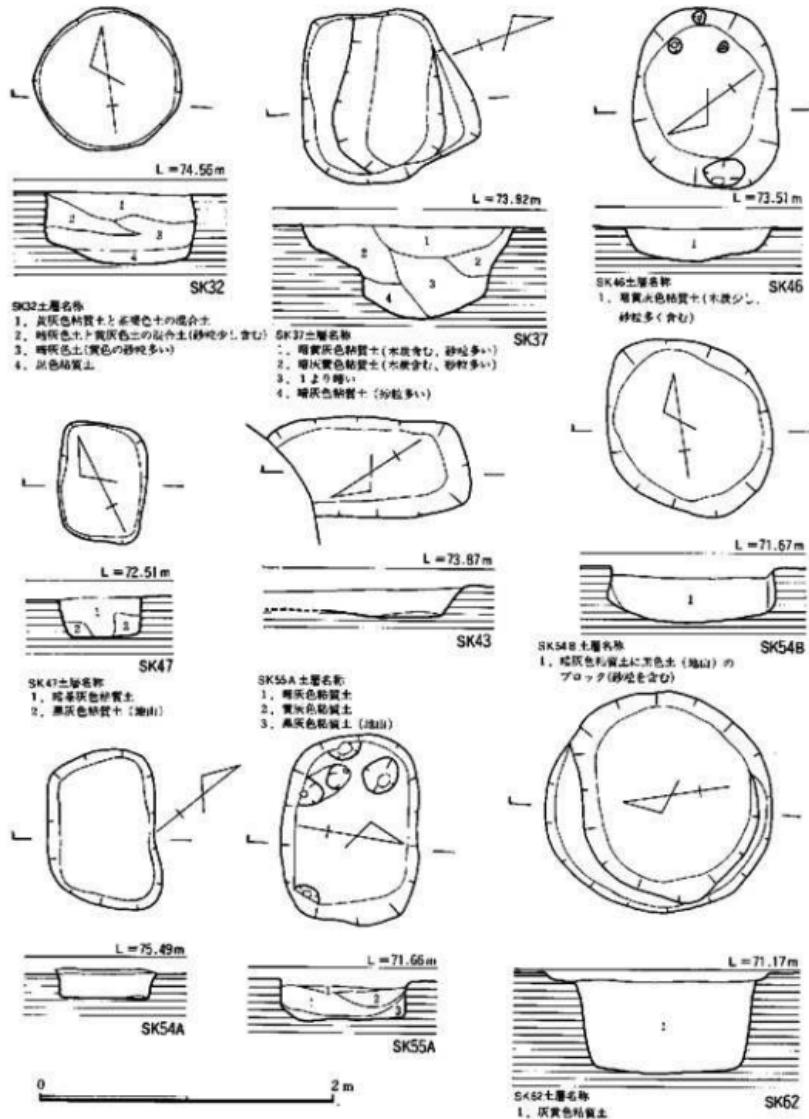


Fig.18 第2地点 上塚SK32~62実測図 (縮尺1/40)

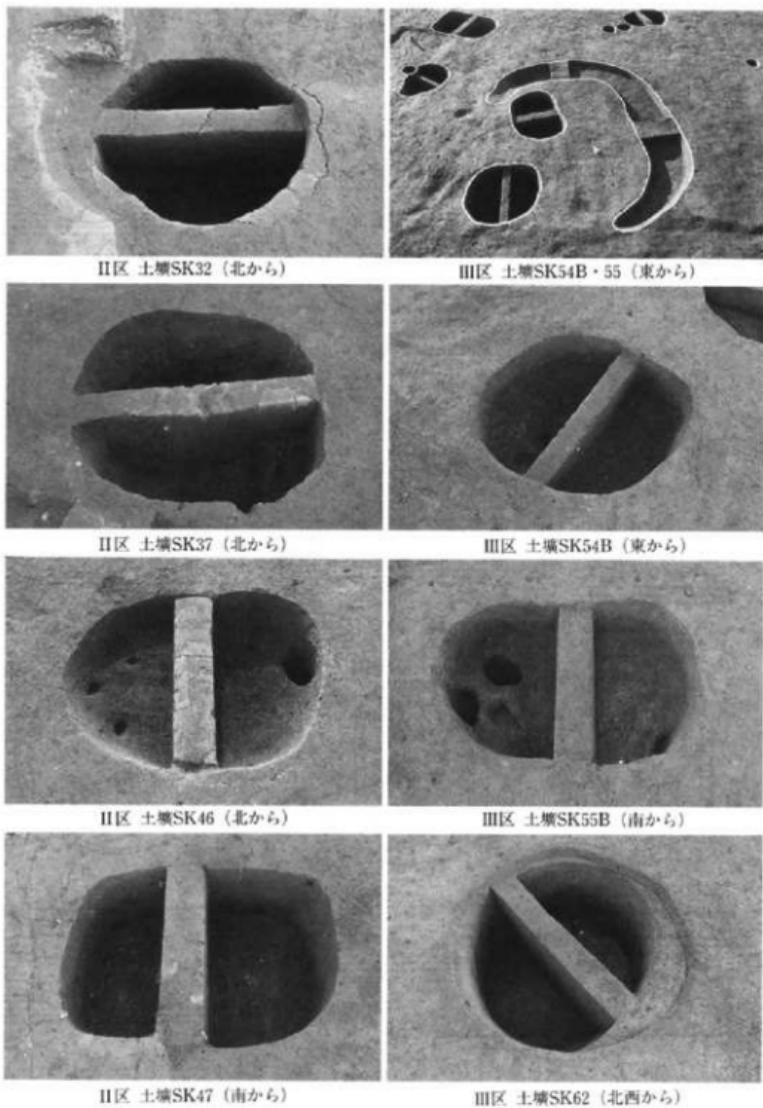
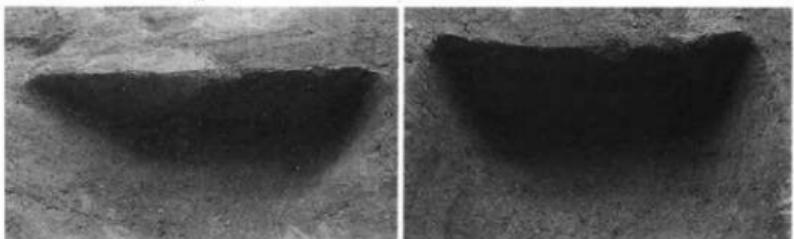
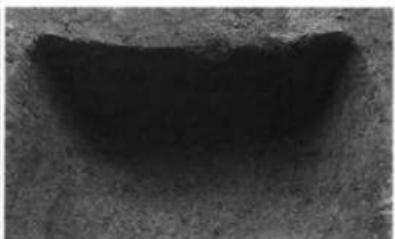




Fig.19 第2地点 溝SD30~34土層図 (縮尺1/40)



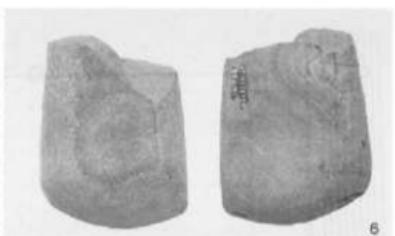
溝SD30 土壌状態



溝SD32 土壌状態



溝SD31 土壌状態



第2地点出土遺物 \*数字は実測図に一致する

SK55A (Fig.18) 平面形は隅丸長方形を呈し、長さ130cm、幅95cmを測る。覆土は暗灰色粘質土を主体とする。SK55AとSK54Bの2つの土壤の北側には最大幅81cmの弧形の溝が存在する。

SK62 (Fig.18) 平面形は円形で、断面は逆梯形を呈するが、覆土は灰黄色粘質土の一層のみである。遺物は出土していない。

#### 溝 (SD) (Fig.19)

いずれも細長く、浅い溝である。幅は1m前後である。断面形はSD32・33が逆梯形を、他はレンズ状を呈する。SD30・31・32は南北方向の溝で断続的に連続している。覆土には砂層を含んでおり、流水があったことを示している。SD31からは瓦器柄や土師器皿片等が出土した。

### 掲立柱建物 (SB01) (Fig.20)

SB01 (Fig.20) 境界地に位置する。梁行1間、桁行3間の規模である。梁間は3.6m、桁間は2.4mを測る。柱穴は小さく、径25~30cmを測る。

### 2) 遺物説明 (Fig.21)

3~6は遺構面、1はSD31、2はpit12出土である。3・4・7は縄文土器、1は瓦器碗、2は土師器である。4は鉢形土器で、口徑20cmを測る。薄手の土器で、口縁端部は丸味をもつ。3は底径7.8cmを測る。内外面ナデ調整である。7は深鉢で、口縁部と底部を欠いている。体部の中程がくの字形に屈折する。最大胴径40.2cmを測る。内面は粘土縫の接合痕跡が認められる。内外面は粗いナデ調整のため条痕がついている。1の瓦器碗は口径16cmを測る。外側は炭化している。2は口径16cmを測る。5・6は石斧である。6は打製石斧で、全長21cm、刃部幅9.8cm、基部幅5.2cmを測る。A面に剥離成形痕を残している。B面は縁辺部分を除いて自然面を残す。刃部周辺に擦痕があるが、明確な使用痕は不明である。6は磨製である。現存長8.9cm、刃部幅7.0cm、厚さ3.0cmを測る。両刃である。B面は体部の剥離破損部分を修理しており、側面部分に敲打痕を残している。弥生時代初頭の石斧であろう。石材は5が堆積岩系、6は安山岩系である。

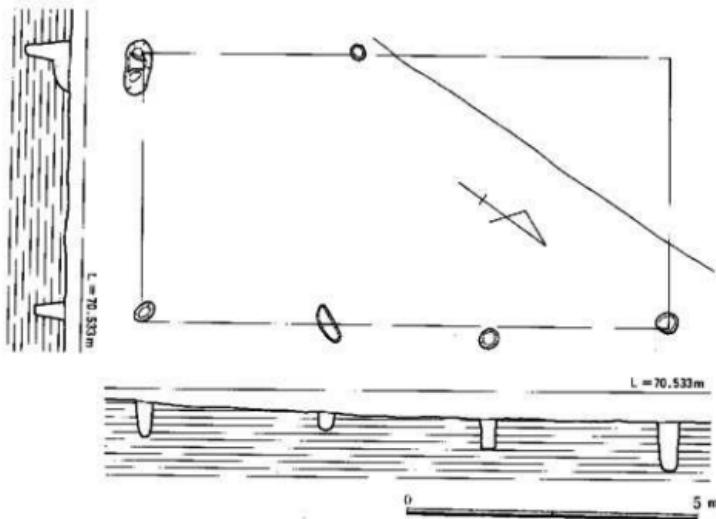


Fig.20 第2地点 掲立柱建物SB01実測図 (縮尺1/100)

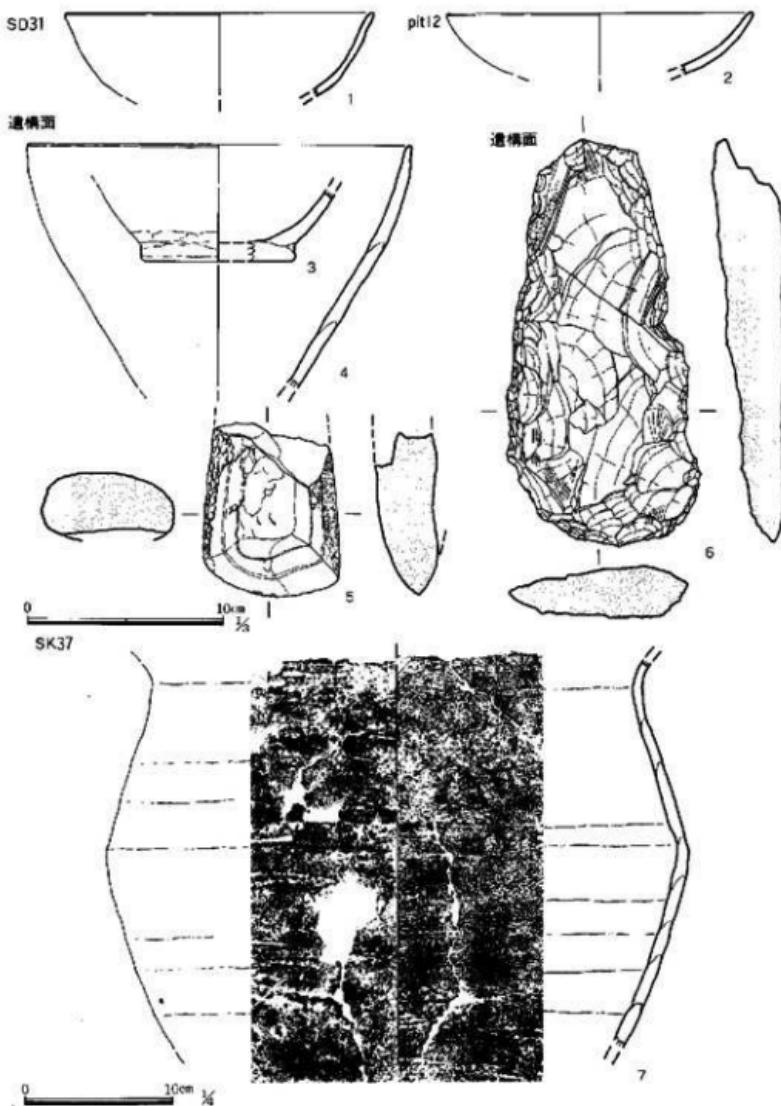


Fig.21 第2地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)

#### (4) 第3地点 I・II区(2号排水路 I・II区)

東西方向の水路予定地である。幅4m、全長約360mを計るため調査区をI～IV区に分けた。III区は現在の水路上に位置するため調査対象から除外した。IV区は第12地点のI・II区と接しているため第12地点の調査と並行して行い、まとめて報告を行うことにした。I・II区の地山は黄褐色粘質土、又は砂質土で、一部に礫が表出している。標高はI区の西側が約77.70m、II区の東側が約74.80mを測る。遺構は焼土壙5、土壤1、溝状遺構2を検出した。土壤は平面形が不定形を呈している。焼土壙は平面形が長方形のものと、不整円形を呈するものがあるが、不整円形の焼土壙は埋没時に壁が崩壊したために変形している。遺物には土師皿片、及び繩文土器片がある。

##### 1) 遺構説明

###### 焼土壙 (SX)

SX01 (Fig.23) 平面形は隅丸長方形を、断面形は箱形を呈する。長さ140cmを測る。周壁は焼けしており、最下層に炭化物層がある。

SX02 (Fig.23) 平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形を呈する。長さ195cmを測る。周壁の一部に焼壁を認める。最下層に炭化物層が存在した。

SX04 (Fig.23) 長軸方向をN63°Wにとる。平面形は隅丸長方形を、断面形は袋状を呈している。規模は長軸の長さ136cm、短軸の長さ78cm、深さ33cmを測る。東側隅に直径24cmを測るpitが存在する。このpitの深さは40cm以上を測り、底はSX04の底面より10cm以上深い。煙出しの穴の可能性がある。SX04の覆土は暗灰褐色粘質土を主体としている。周壁は赤く焼けている。土壤内の北側半分には木炭が充填されている。木炭は直径5～6cm程度の丸木材が多く、長軸方向に伏せて、重ねられていた。厚さ約30cmを測る。壙底は層状の炭化物層が厚く堆積している。

SX05 (Fig.23) 上部の平面形は不整橢円形を、底部の平面形は不整隅丸長方形を呈している。土壙断面で観察すれば土壙上部が崩壊しており、土壙の上部は原形をとどめていない。土壙周壁の下部には焼けた部分が残っており、厚さ2cm程に達している。覆土

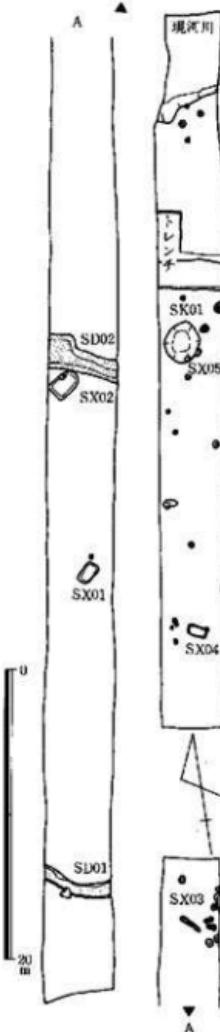
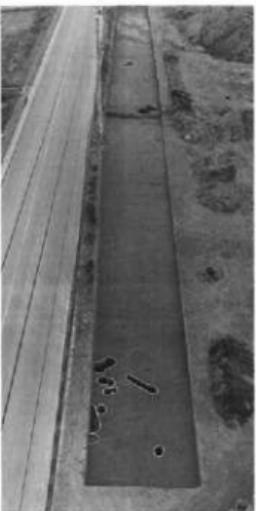


Fig.22 第3地点 I・II区  
遺構配図 (縮尺1/400)



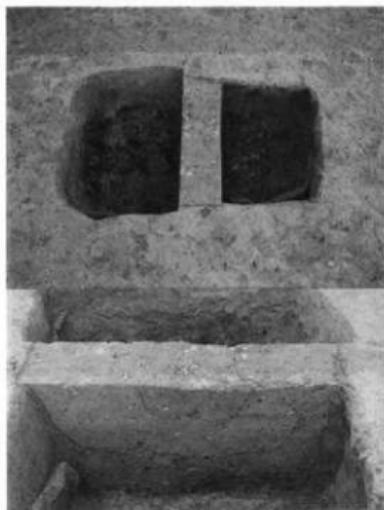
第3地点I・II区全景（東から）



第3地点I区全景（東から）



第3地点II区全景（西から）



I区 焼土壤SX01（北西から）、土屑状態



I区 焼土壤SX02（南から）、土屑状態



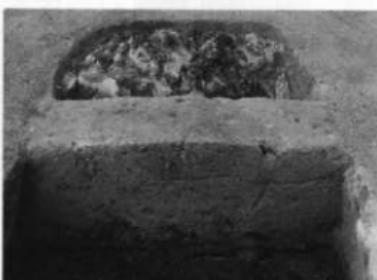
II区 焼土壤SX04（南から）



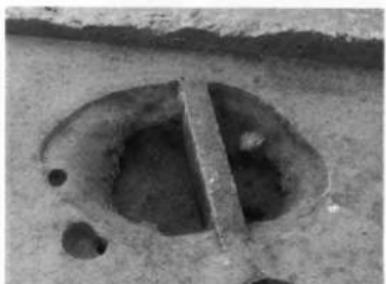
焼土壤SX04完掘状態



焼土壤SX04木炭出土状態（南から）



焼土壤SX04土層状態（東から）



II区 焼土壤SX05（東から）



II区 焼土壤SX05土層状態（北から）

は黒灰色粘質土を主体としている。最下層に木炭層が存在するが、この木炭は層状になつてゐる。長軸方向を略北方向にとり、土壤上面の長さ292cm、幅230cm、深さ64cmを測る。焼土壤の周壁遺存部分の長さ約200cm、幅約155cm、深さ30cmを測る。

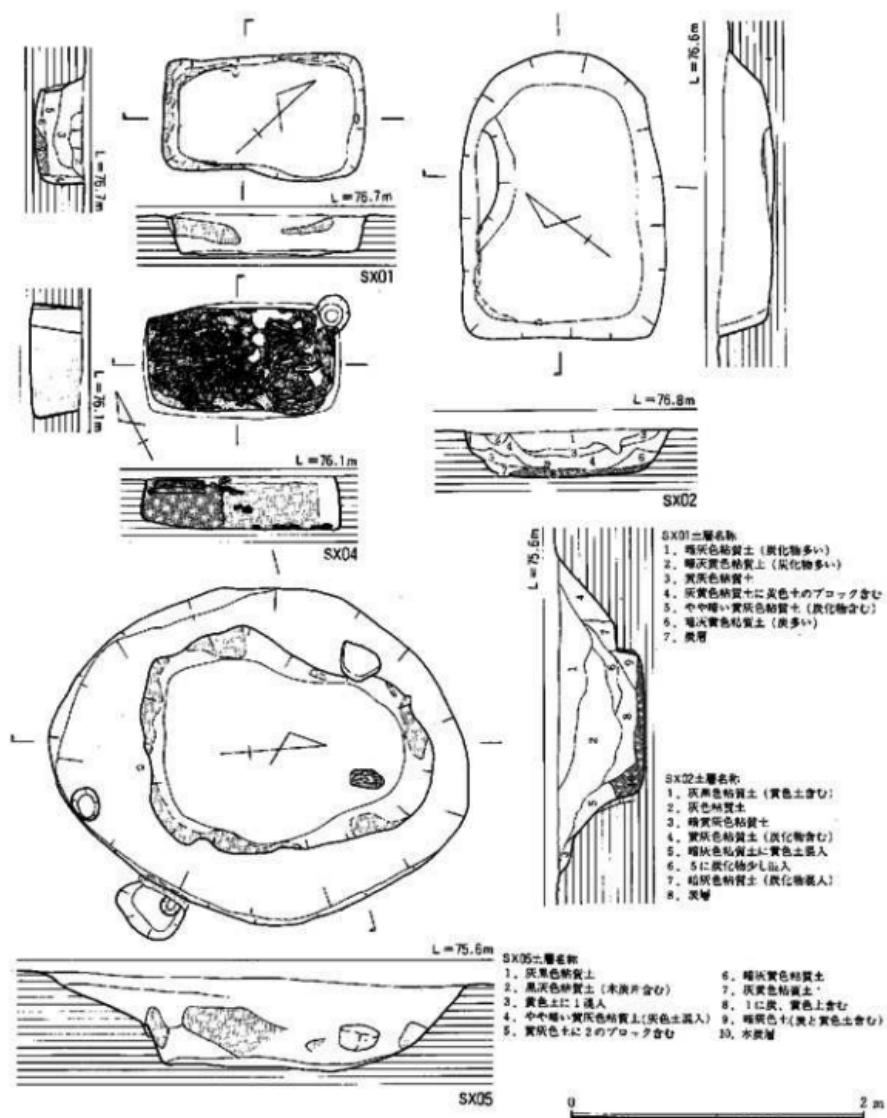


Fig.23 第3地点 燃土壙SX01~05実測図 (縮尺1/40)

## (5) 第5地点 (13-7・8田)

田面の切り土施工地区で、標高約77.30mを測る。遺構面は黄褐色粘質土である。調査区の東端には旧河川跡(現水路)の肩が表出している。遺構は土壙2、焼土壙4、掘立柱建物1を検出した。

### 1) 遺構説明

焼土壙は平面が隅丸長方形を呈するものと楕円形に近いものがある。大きさは長さが1.2~1.5mの範囲に収まり、焼土壙としては小型に属している。断面形は逆梯形と舟底状の形態がある。壙底には木炭を含んだ層、もしくは木炭層が存在する。いずれも周壁の一部に焼土壁が遺存している。焼土壙からの出土遺物はない。

焼土壙SX02(Fig.25) 平面形は不整隅丸長方形で、楕円形に近い。断面形は舟底状を呈している。長さ155cm、幅90cm、深さ37.5cmを測る。周壁は12cmの厚さで焼けている。

焼土壙SX04(Fig.25) 平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形に近い。壙底には直径26cmを測るpitが存在する。長さ135cm、幅73cm、深さ28cmを測る。

焼土壙SX05(Fig.25) 焼土壁が無いため他の焼土壙とは機能が違うものと思われる。平面形は隅丸長方形を呈しており、壙底の北壁に接して長径60cm、深さ24cmを測るpitが存在する。土壙の長さは120cmを測る。



第5地点全景（西から）



焼土壙SX01（東から）、土層状態

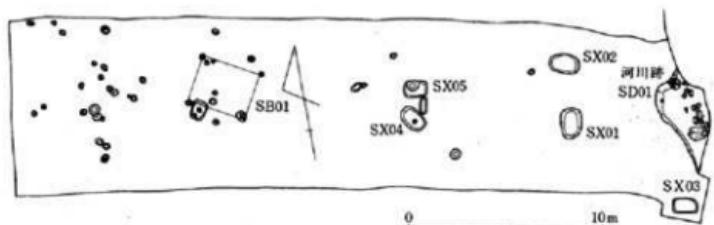


Fig.24 第5地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



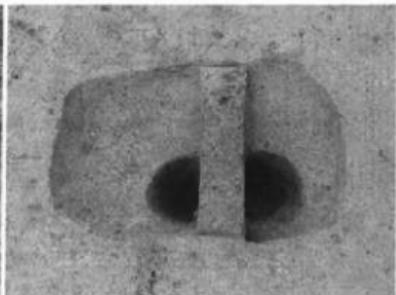
焼土壙SX02 (南から)、土層状態



焼土壙SX04 (西南から) 土層状態



焼土壙SX03 (北から)



焼土壙SX05 (北から)

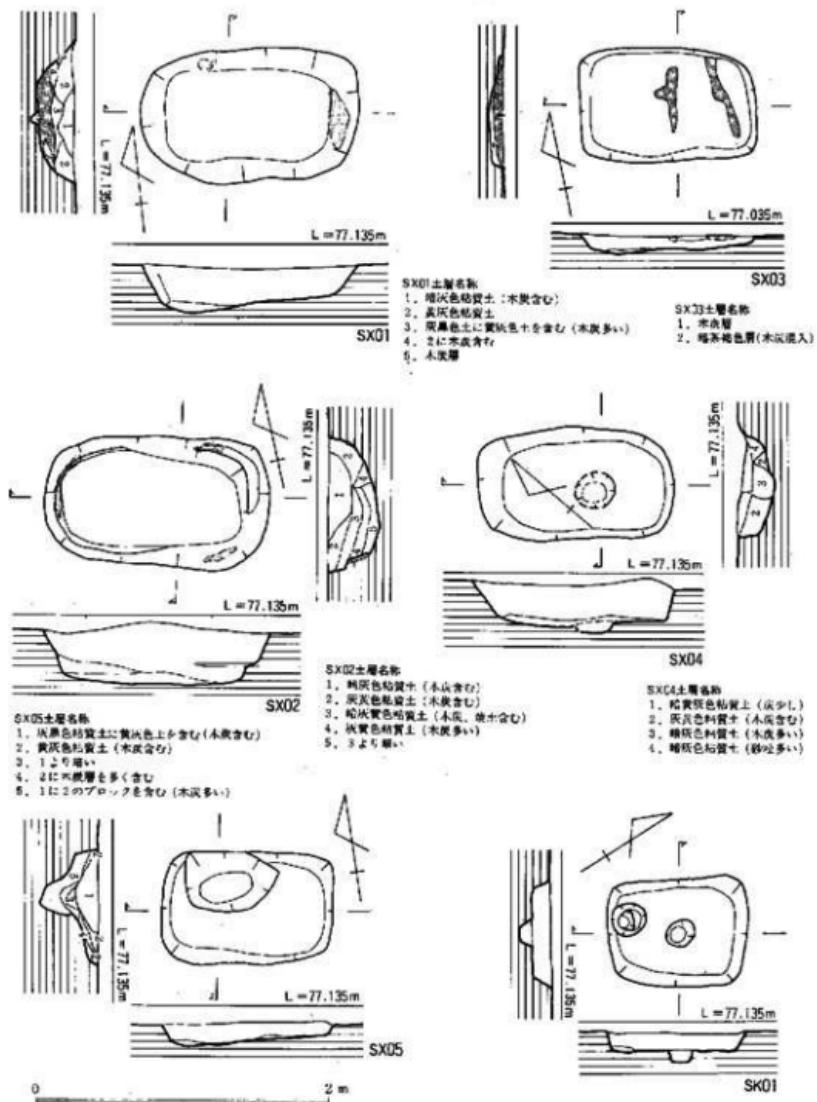


Fig.25 第5地点 燐土壌SX01~05、土壤SK01実測図 (縮尺1/40)

## (6) 第7地点 (13-6田)

切り土施工の田面部分の調査で標高約76.7mを測る。調査区の東端には水路が存在する。遺構面は黄褐色粘質土で、表土・基盤土の下に存在する。遺構は溝状遺構2、焼土壙4がある。溝状遺構は近世の地割り溝と思われる。焼土壙には、平面形が円形、隅丸長方形、不整隅丸長方形の3形態がある。断面形は逆梯形状を呈している。SX02・03からは大量の炭化物が出土した。SX01・03の周壁は焼けているが、SX02の焼壁は不明である。SX02の直径は125cm、他のSX01・03・04は長さ150cm・165cm・110cmを測る。

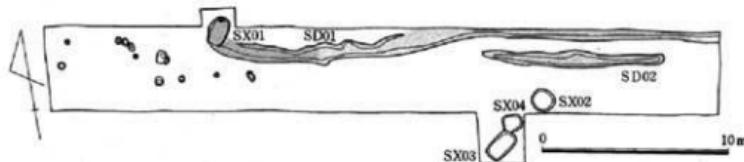


Fig.26 第7地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



第7地点全景 (東から)



焼土壙SX01 (南から)



焼土壙SX02 (東から)

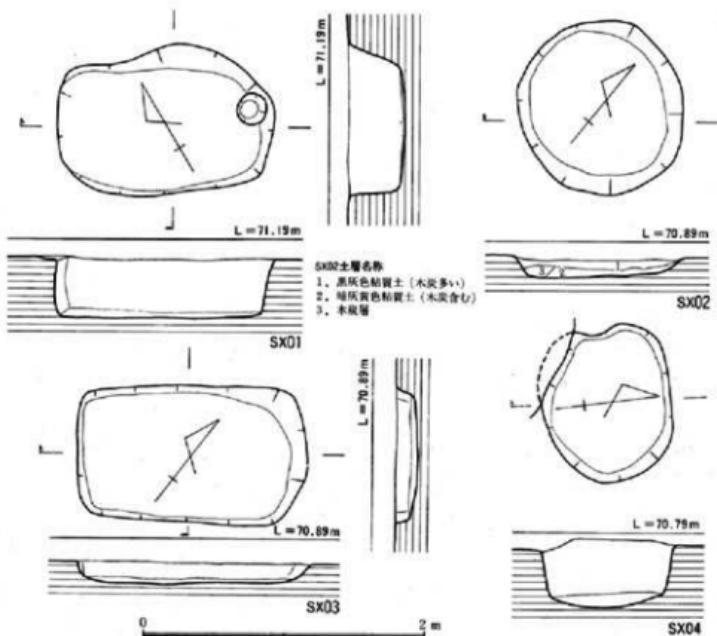
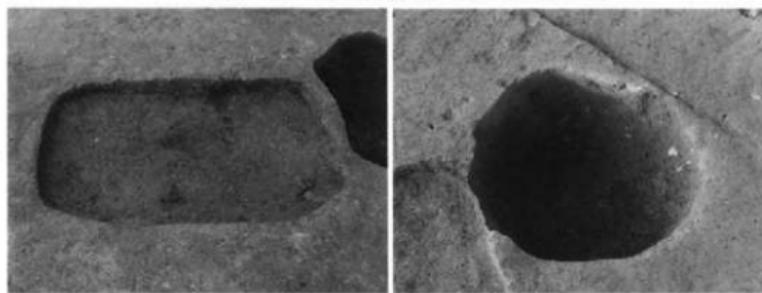


Fig.27 第7地点 焼土壤SX01~04実測図（縮尺1/40）



焼土壤SX03 (東から)

焼土壤SX04 (東から)

### 1) 遺構説明

焼土壤SX02 (Fig.27) 削平を受けている。平面形は円形を呈し、断面形はレンズ状を呈している。長径120cmを測る。周壁は焼けており、底面に炭化物層が存在する。

## (7) 第8地点 (13-5B田)

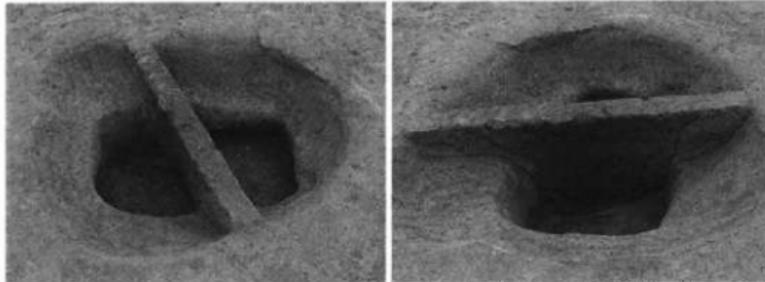
現水路の東側に位置し、標高が75.5mを測る。調査区の東側には第3地点のII区が接しており、この調査地点の検出遺構と相関関係にある。地山は黄褐色粘質土、又は砂質土である。遺構面は表土・基盤土の下に存在する。遺構は土壌3、焼土壌6及びpitである。

焼土壌の上面の平面形には隅丸長方形、不整橢円形、不整長方形の3形態があるが、不整形のものはいずれも周壁の崩壊によるものである。周壁には焼壁が遺存している。規模は長さが1.4~1.6mを測るもの(SX05・06)と長さ1.8mを測るもの(SX01・02)がある。

SX01・03-04の断面形は逆梯形である。SX02は2段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。上面の長さ185cm、下段の長さ120cmを測る。断面は袋状を呈しており、周壁は良く焼けている。



第8地点全景(東から)



焼土壌SX01(西から)

焼土壌SX01土層状態(北から)

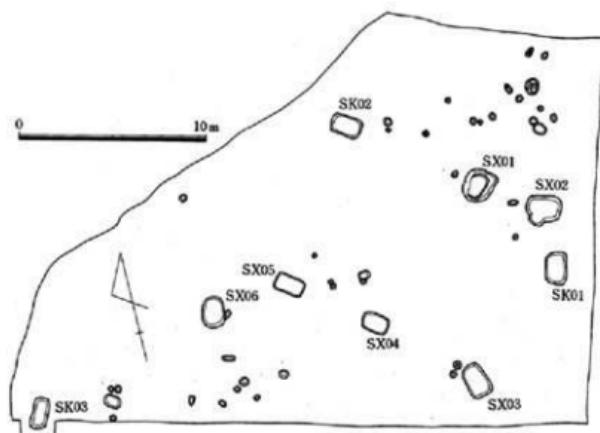
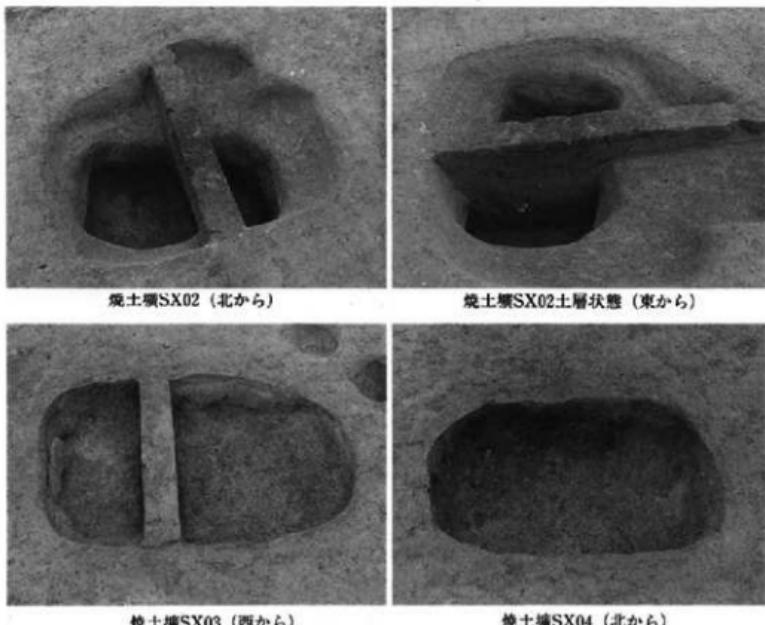


Fig.28 第8地点 造構配図 (縮尺1/300)



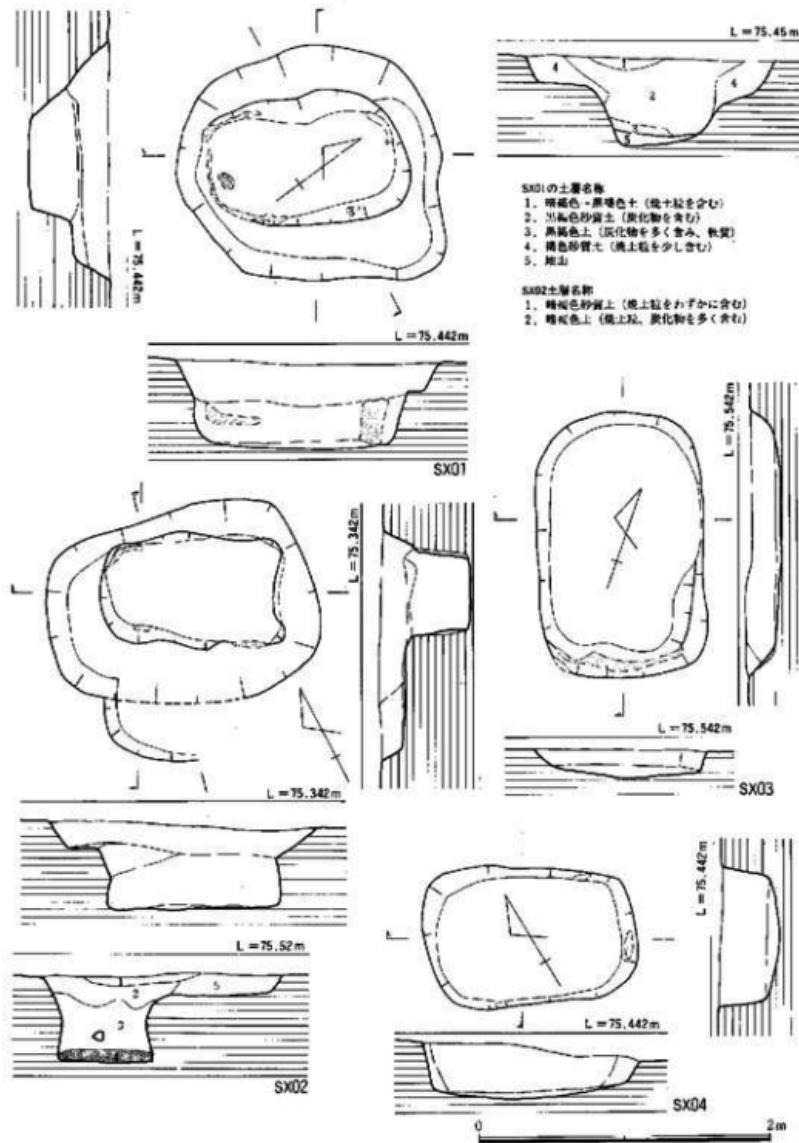
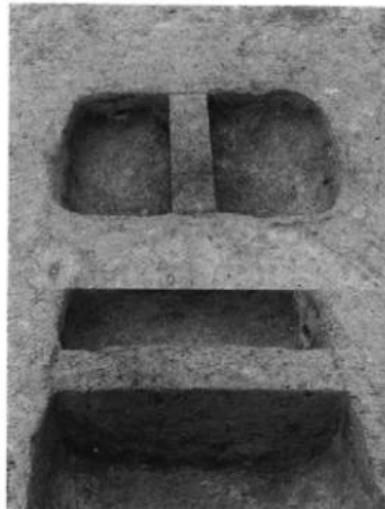
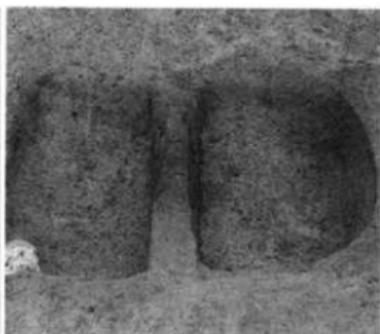


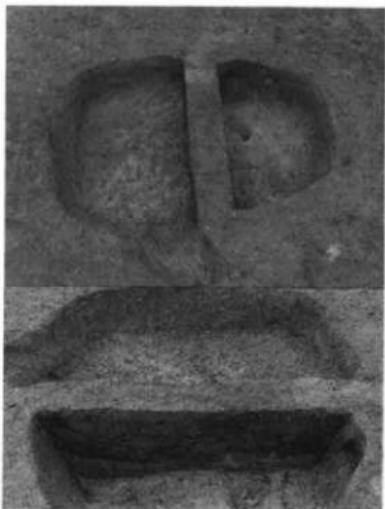
Fig.29 第8地点 焼土壤SX01~04実測図（縮尺1/40）



焼土壤SX05（北から）、土層状態



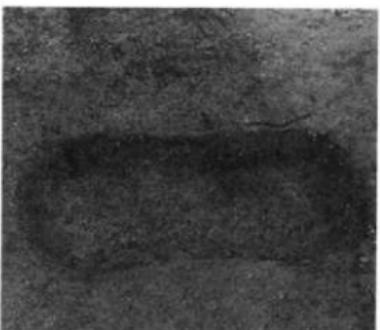
土壤SK01（西から）



焼土壤SX06（東から）、土層状態



土壤SK02（南から）



土壤SK03（南から）

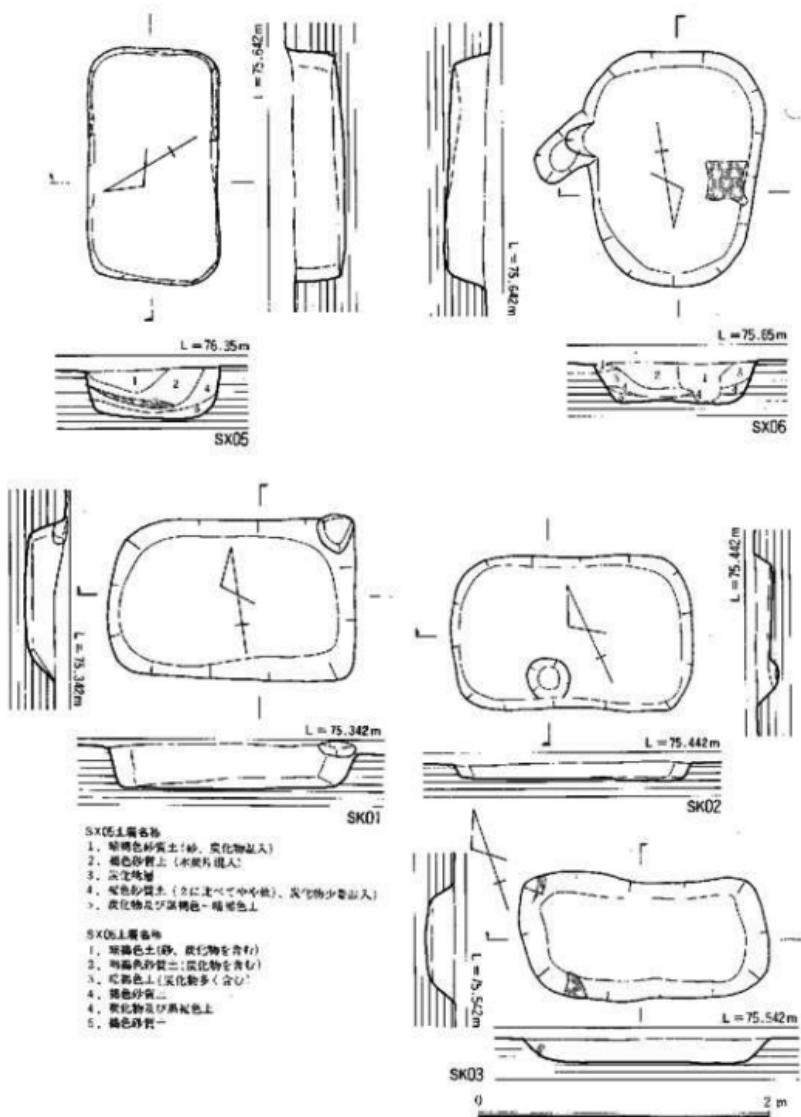


Fig.30 第8地点 燃土壌SX05・06、土壤SK01~03実測図（縮尺1/40）

## (8) 第10地点 (13-3田)

東西方向の調査区で、用水路の西側に位置する。標高は約73.5mを測る。地山は黄褐色粘質土で、風化土である。検出した遺構は土壙3、焼土壙1、河川跡である。SK01、SX01・02は土壙である。SX03は焼土壙である。調査の東半分に東西方向の河川跡が広がっており、この調査区は河川跡を横断した形で設定している。

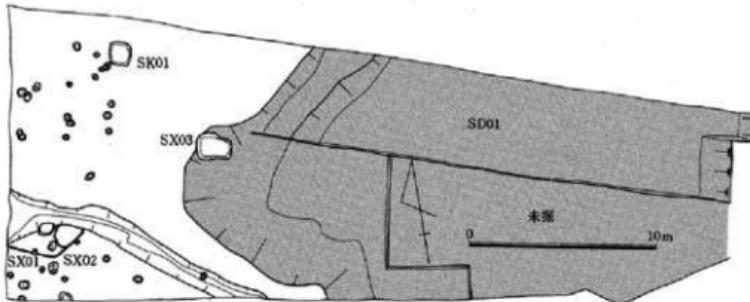


Fig.31 第10地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



第10地点全景 (西から)

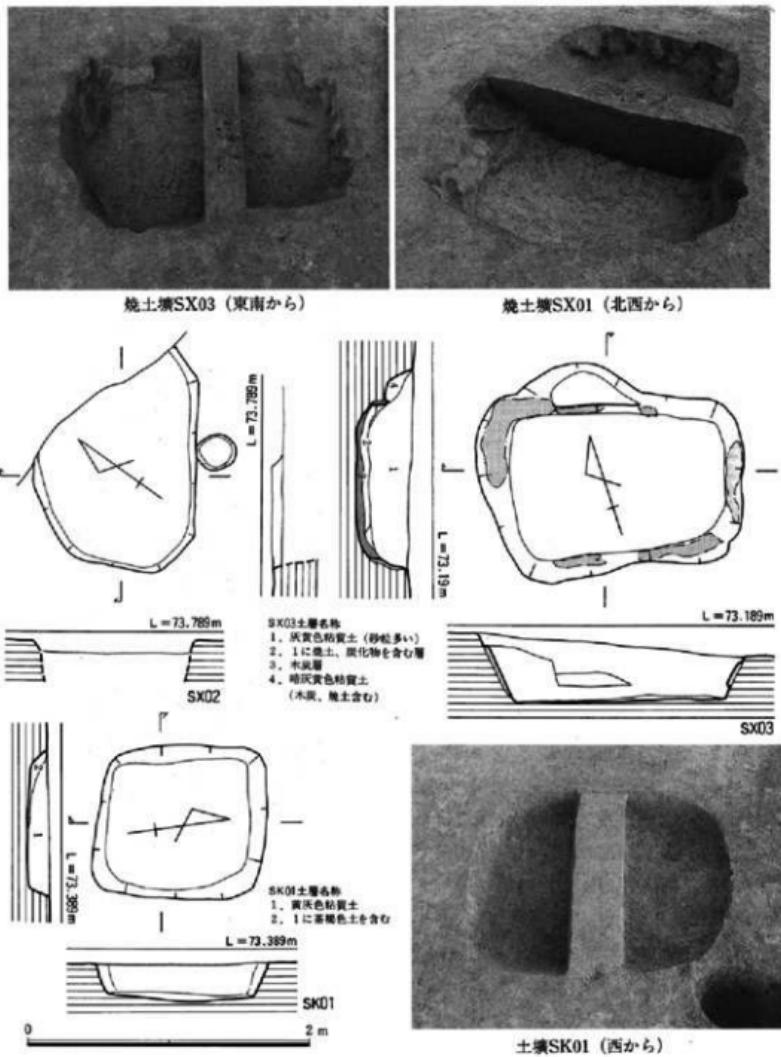


Fig.32 第10地点 焼土壤SX03、土壤SX02・SK01実測図 (縮尺1/40)

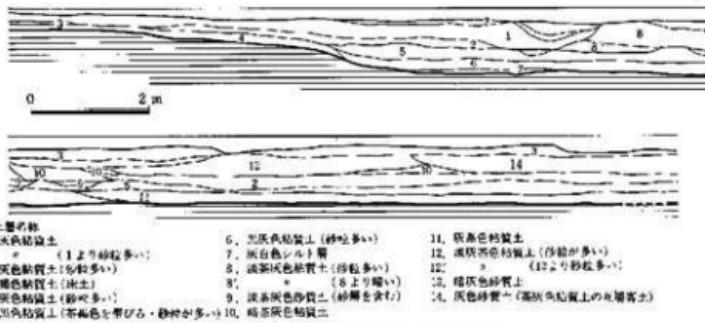


Fig.33 河川跡SD01土層図 (縮尺1/100)

## 1) 遺構説明

河川跡SD01 (Fig.33) 現存幅は約30mで大きく蛇行している。断面形は逆梯形を呈し、底面は小礫が厚く堆積し、平坦面を作る。最大の深さ約1mを測る。底面、及び覆土より土師器の糸切り皿、白磁碗片が出土している。

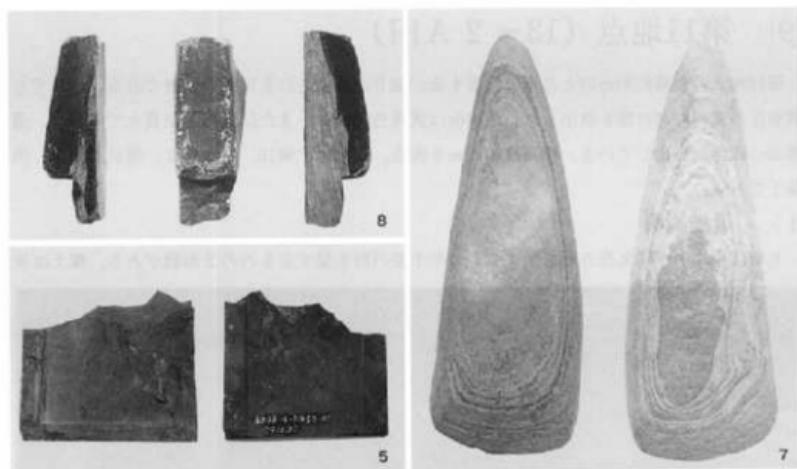
土壌SX02 (Fig.32) 平面形が不整円形を呈している。SX02の深さは約1m以上に及び、覆土から滑石製品と繩文土器片が出土している。覆土は灰褐色粘質土である。

焼土壌SX03 (Fig.32) 平面形が不整長方形を呈し、底面は隅丸長方形、断面形は逆梯形である。周壁は良く焼けており、長さ1.9m、幅155cmを測る。最下層に炭化物層が存在する。遺物の出土は無い。

## 2) 遺物説明

1～4・5・7は溝SD01出土、6は土壌SX02出土である。

1は上部器の环で、復原口径16cm、器高3cmを計る。底部は糸切り底である。体部内外面はナデ調整で、暗灰茶色を呈する。2は白磁碗の縁類で、4はIV類の玉縁口縁部である。2の底径は8cmを測る。3は伊万里系の碗である。溝SD01の上層より出土した。口径9cmを計る。釉は暗灰青色を呈する。異須による文様はない。5は小豆色凝灰岩製硯の破片である。赤開石の可能性がある。陸部のみの残欠で、海部は欠いている。幅は5.1cm、厚さ1.3cm、縁の高さ1.7cmを測る。側面・裏面は丁寧に研磨を施している。縁の中央部分は使用により窪んでいる。6は滑石製品である。石鍋のタテ長の把手部分を再加工している。裏面と側面には切断した際の鋸目状の痕跡がある。加工途中である。7は繩文時代の磨製石斧である。全長16.2cm、刃部幅5.6cm、最大の厚さ3.8cmを測る。表面が風化のため縞状に前理面が浮き上がっている。堆積岩である。



第10地点出土遺物 \*数字は実測図に一致する。

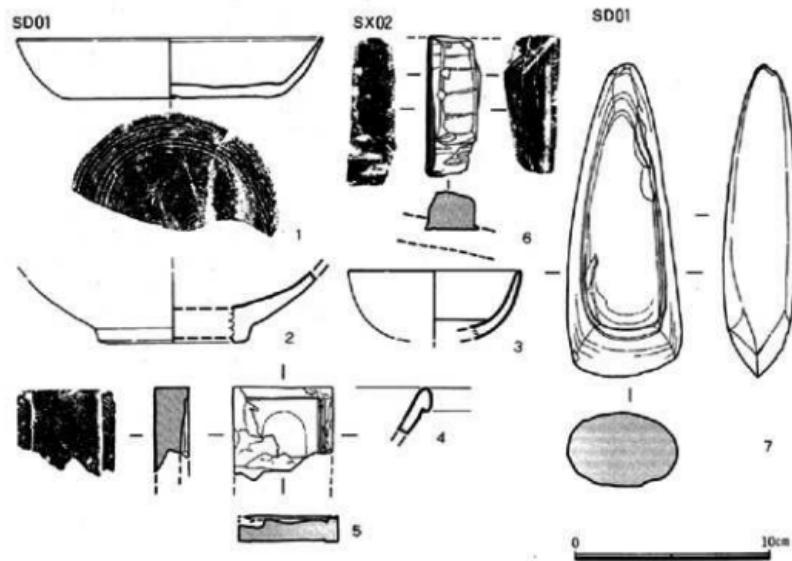


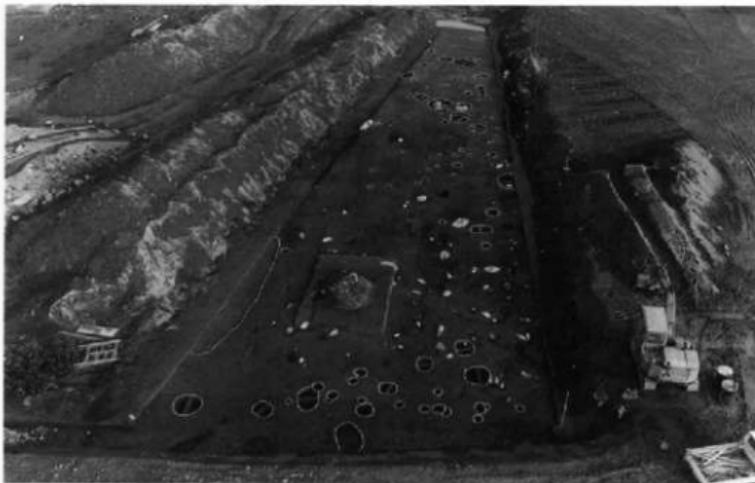
Fig.34 第10地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

## (9) 第11地点 (13-2 A田)

第10地点の東側約30mのところに位置する。切り土施工される田面の調査である。ここでも調査区の東端に河川跡を検出した。遺構面は黄褐色粘質土、または灰褐色粘質土であるが、遺構面に礫群が表出している。標高は約72mを測る。遺構は土壤16、焼土壤2、溝状遺構1、墳墓1である。

### 1) 遺構説明

土壤は平面形が隅丸長方形を呈するものや不整円形を呈するものの2形態がある。覆土は灰



第11地点全景（西から）

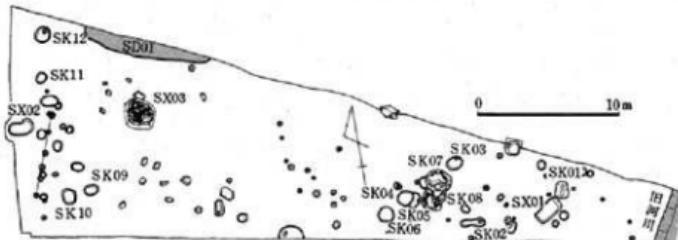


Fig.35 第11地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

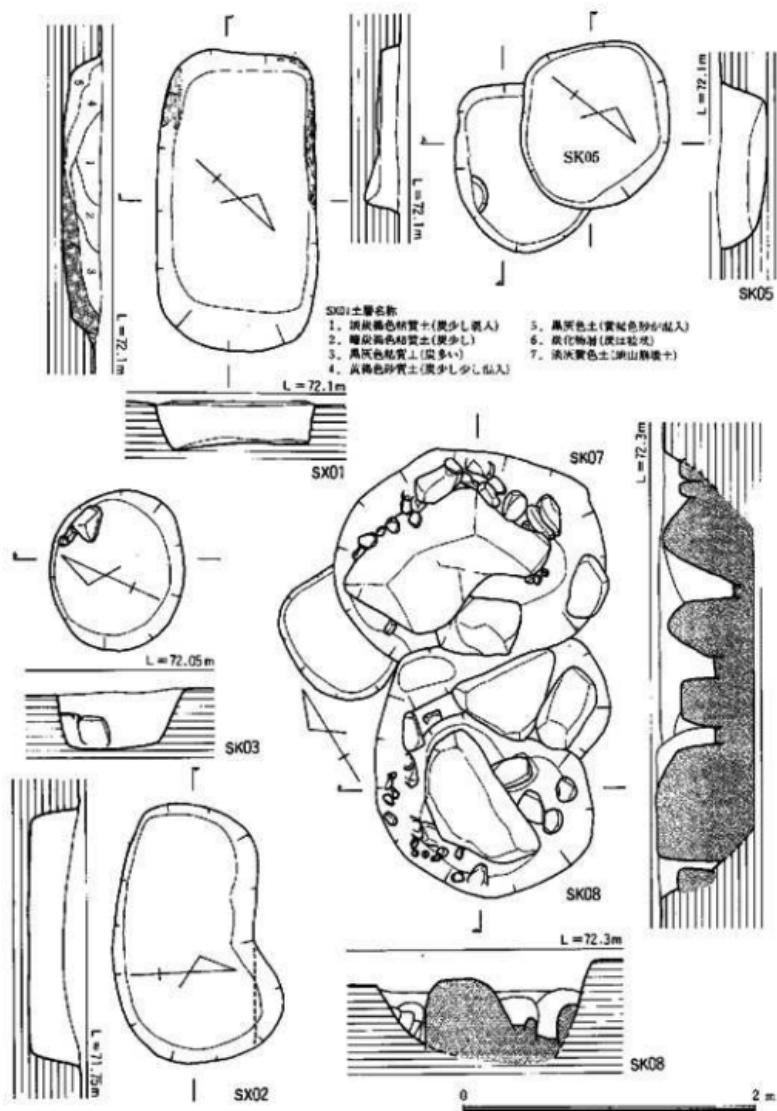


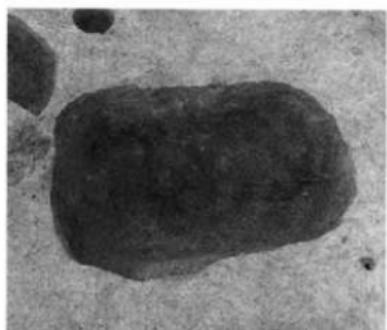
Fig.36 第11地点 烧土壠SX01・02、土壤SK03・05・07・08実測図 (縮尺1/40)



焼土壤SX01（南から）



焼土壤SX02（北から）



土壤SK01（東から）



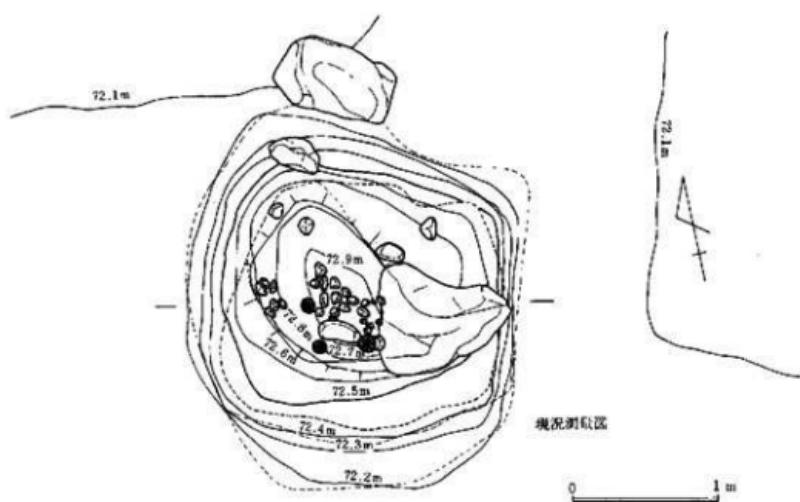
土壤SK07・08（東から）



墳墓SX03（西から）

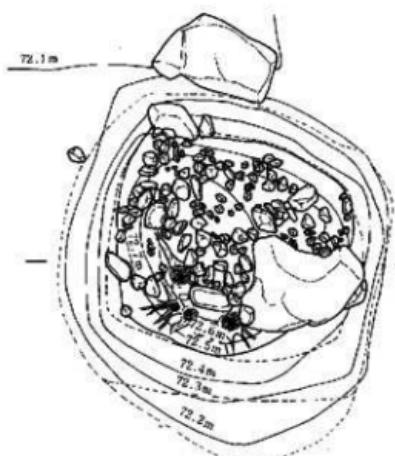


墳丘下 石組み遺構（西から）



現況測量図

0 1 m



表土除去後の測量図



境丘下部の石組造様

Fig.37 墓基SX03実測図（縮尺1/40）

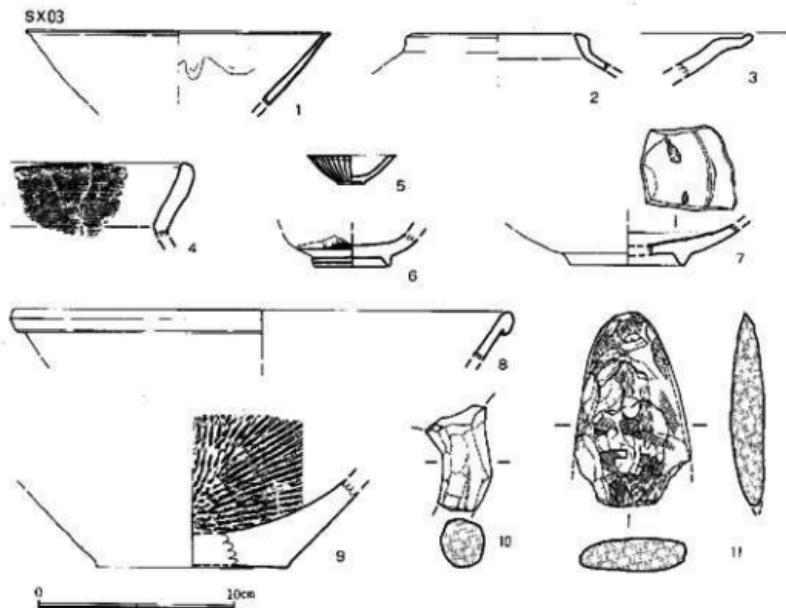


Fig.38 第11地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

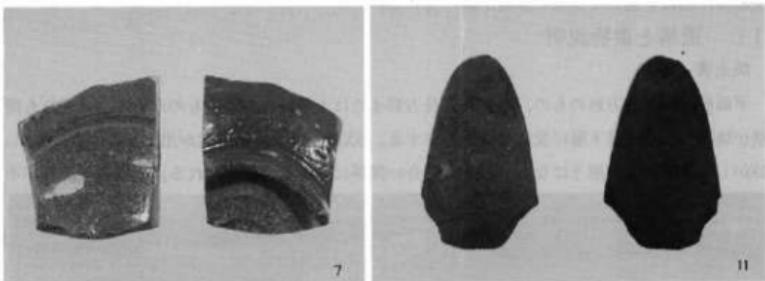
黄色、又は灰褐色の粘質土である。土壙SK07・08 (Fig.36) いずれも掘り方は不整形を呈している。土壙内には長さ100~145cmの大石が据えられ、周囲に小石が詰められている。人為的なものか不明であったが、周囲の小礫中より鉄釘等が出土した。焼土壙は長さ1.8~2.0mの規模で、平面形はいずれも隅丸長方形を呈する。周壁は良く焼けている。

**墳墓SX03 (Fig.37)** 地元において荒平くずれの落武者の墓として信じられており、永い間信仰の対象となっていた。墳丘は直徑約2.5m、高さ約1mを測り、平面形は不整円形を呈する。墳丘上部には小礫が集中していたが葺石的な要素ではなく、投げ集められたものと思われる。墳丘盛土は暗黄色粘質土である。盛土の最下部には箱形を呈した石組が存在する。この石組は長方形状の石を箱形に組んだ簡単な構造である。底面はやはり礫を積み重ねて床としている。この石室状遺構の長さは46cm、幅32cmを測る。墳丘の表土上中より遺物が多数出土した。唐津焼、伊万里系陶磁器、中国産白磁、李朝陶器などある。

**焼土壙SK01 (Fig.36)** 平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形を呈する。周壁は焼けており、最下層は炭化物層が存在する。全長208cm、幅105cmを測る。

## 2) 出土遺物説明

いずれも墳墓SX03の表土より出土したものである。1は白磁碗で、口径11cmを測る。3は唐津焼の鉢である。4は土師質の鍋である。口縁部内面にヨコハケを施す。5は紅皿で、口径4.8cm、器高1.4cmを測る。6は伊万里系の染付で、底径4cmを測る。7は李朝陶器の皿で、内底に目痕がある。底径6cmを測る。8は唐津焼の鉢で、口径25.8cmを測る。9は唐津焼の擂鉢である。10は瓦質土器で、足鍋の脚である。11は磨製石斧で、刃部が破損したため、刃部の再加工を施している。刃は片刃である。最大長10cm、最大厚1.6cmを測る。縁辺は面取りしている。表面に剥離痕を残している。表面に研磨痕がある。小豆色を呈した凝灰岩である。



第11地点出土遺物

■数字は実測値に一致する

## (10) 第12地点 I ~ IV区(13-1-1・2田、13-2B田、2号排水路IV区)

2号排水路の一部と、切り土施工の田面部分の調査区の4ヶ所を合せて行った。棚田の境界地に位置するため段差がある。そのため、北側の調査区は比高差約0.5~0.7mの段落ちとなり、遺構の遺存状態は悪い。標高は上段の面で約71m、下段の遺構面では約70.5mを測る。遺構面は灰褐色粘質土と黄褐色粘質土である。下段の遺構面は削平のため地山の黒褐色砂質土が表出している。遺構面の土は灰褐色粘質土が大部分を占めており、且つ遺物を含んでいる。整地層と考えられる。地山には礫を多く含んでいる。遺構は溝状遺構5条、掘立柱建物3棟、柵1、土壤12、焼土壤7、豎穴状遺構4、製鉄遺構5、土壤墓1、河川跡1条を検出した。河川跡の上部には軸線を逸て現在の水路が乗っている。

### 1) 遺構と遺物説明

#### 焼土壤 (SX)

平面形が隅丸長方形のもの、不整隅丸長方形または不整隅丸方形のものがある。いずれも周壁が焼けており、最下層に炭化物層が存在する。SX02・06からは木炭が出土している。

SX01 (Fig.40) 2段掘りになっており、切合い関係にあるものと思われる。上段の平面形が不



第12地点 I ~ IV区全景（東から）

整円形を呈する。焼土壙は、上の土壤に切られており、平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈する。長さ170cm、幅160cmを測る。周壁は焼けている。

SX04 (Fig.40) 平面形は隅丸長方形を呈し、幅90cmを測る。周壁は焼けしており、最下層に炭化物層を含む。

SX06 (Fig.40) 規模の大きな焼土壙であるが、削平が著しい。平面形が隅丸長方形を呈し、長さ140cm、幅100cmを測る。底面に屑状になった木炭層が存在する。

#### 竪穴状土壙 (SX)

SX07 (Fig.41) SX07-09-11は切合い関係にある。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は緩やかな逆梯形を呈する。底

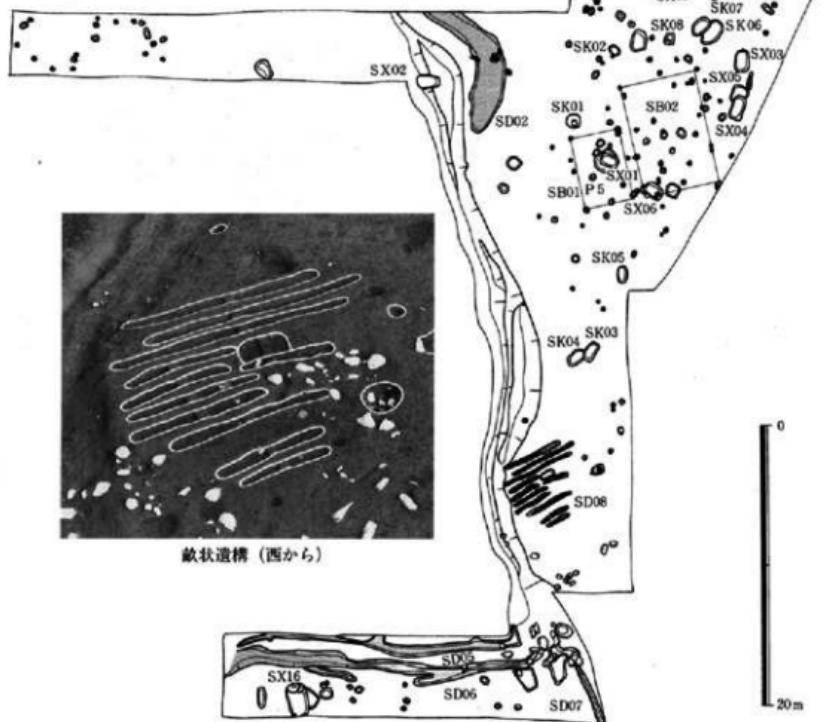


Fig.39 第12地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

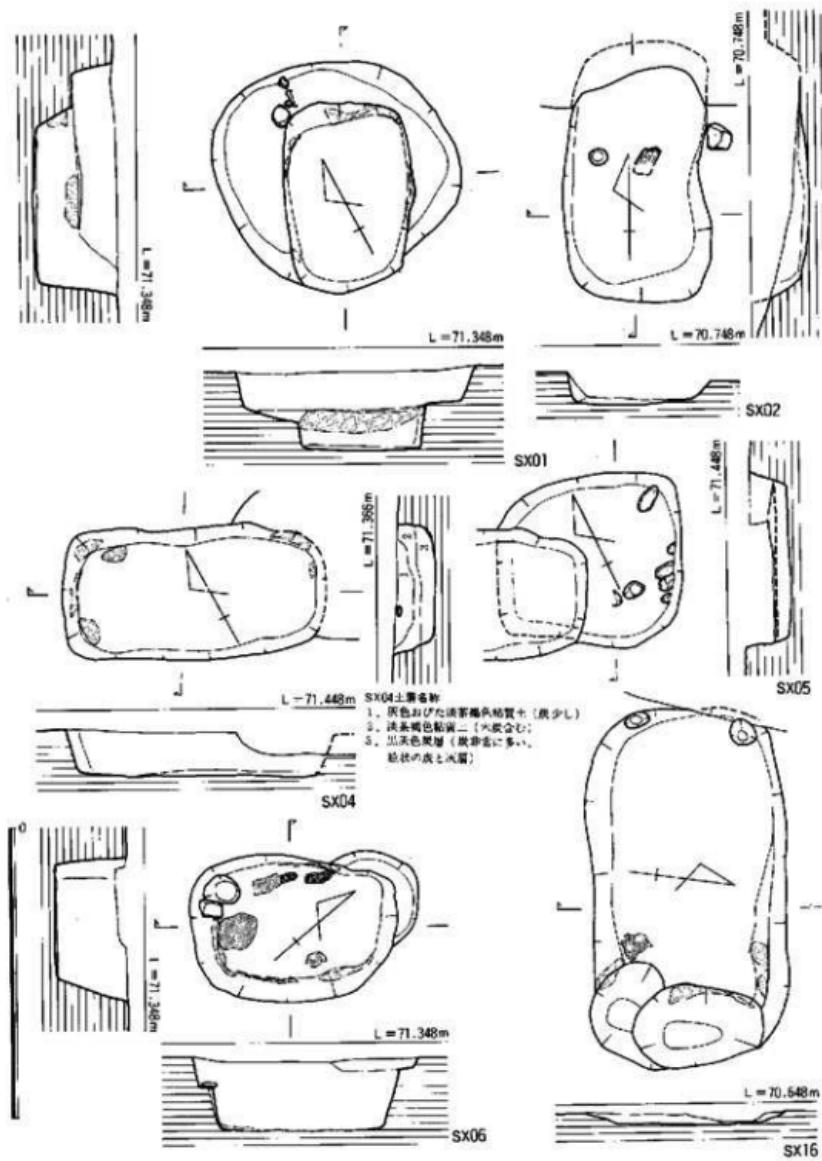
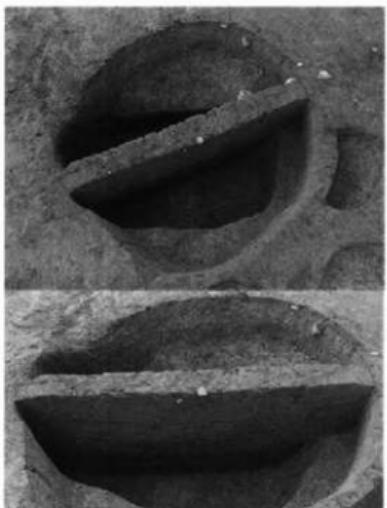
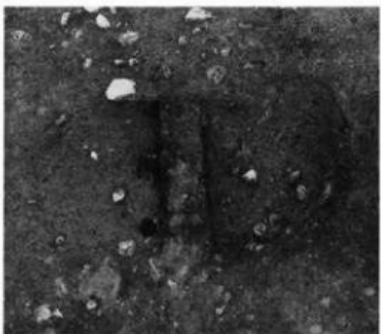


Fig.40 第12地点 燃上塚SX01~06・16実測図 (縮尺1/40)



焼土壤SX01（南東から）、土層状態



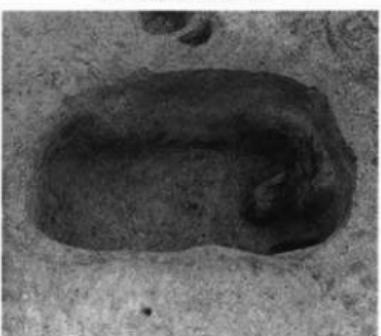
焼土壤SX02（西から）



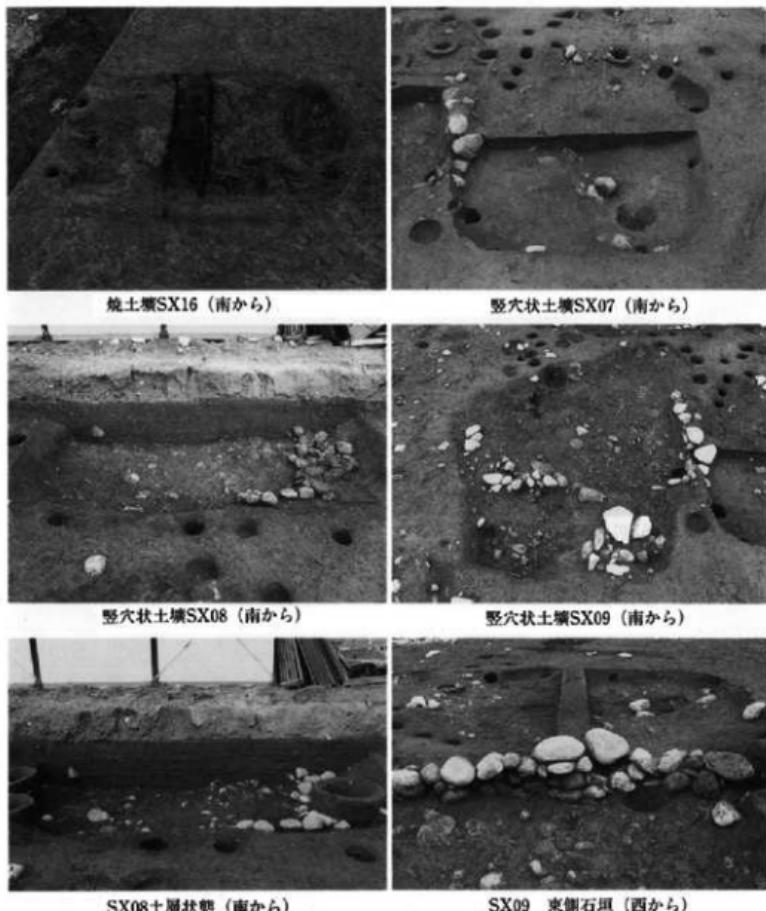
焼土壤SX04（北から）、土層状態



焼土壤SX05（北から）



焼土壤SX06（西から）



焼土壌SX16（南から）

竪穴状土壌SX07（南から）

竪穴状土壌SX08（南から）

竪穴状土壌SX09（南から）

SX08土層状態（南から）

SX09 東側石垣（西から）

面は凹凸がある。SX09・11との間に石積みがある。覆土は暗灰褐色粘質土である。遺物は土師器皿、須恵質土器の鉢片がある。13世紀の所産である。

SX08(Fig.41) 境界地に位置するため全形は不明であるが、隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は傾斜が緩やかな逆梯形を呈する。覆土は暗灰褐色粘質土を主体とする。遺物は土師器皿・壺、同安窯系青磁が出土している。

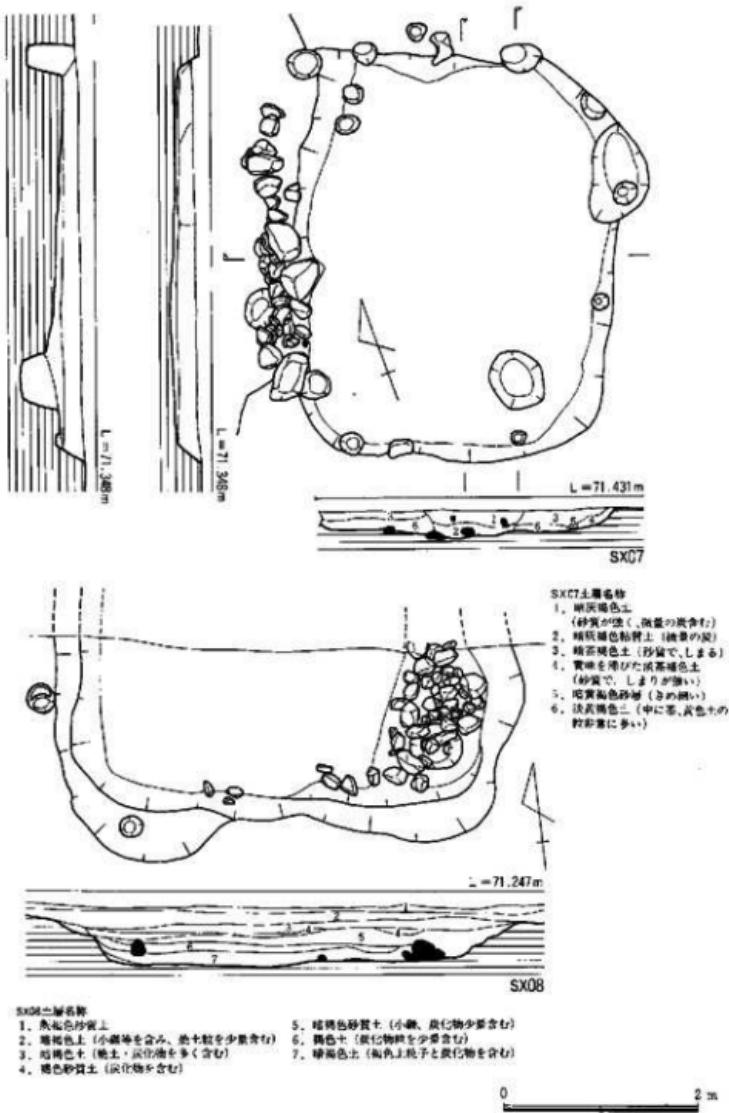


Fig.41 第12地点 穴状土壤SX07・08実測図 (縮尺1/60)

SX09 (Fig.42) 平面形は不整方形を呈する。SX07・11の切合関係にある。最大長は推定で5mを測る。断面形はレンズ状を呈し、床面は2段になっている。SX07との間には人頭大の転石で、石垣を築いている。又、南側の段落ち部には拳大の礫を並べて区画とする。遺物は上師器皿、白磁碗、同安窯系青磁皿・碗、陶器壺、青白磁合子が出土している。

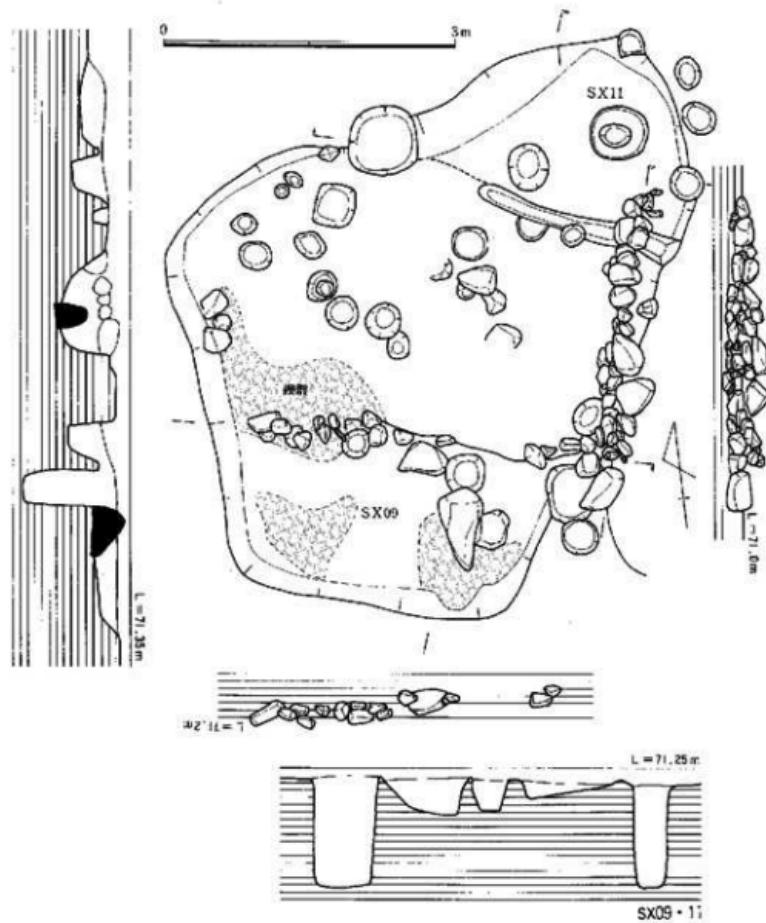


Fig.42 第12地点 穴穴状土壙SX09・11実測区 (縮尺1/60)

SXII (Fig.42) SX09と切り合うため、平面形は判断できない。不定形を呈し、断面形はレンズ状を呈する。遺物は土師器壺、白磁碗、土師質土器の鍋が出土している。

#### 豊穴状土壙出土遺物 (Fig.43)

SX07出土遺物 (Fig.43-1~22) 1~21は土師器の糸切り皿である。1の口径は6cm、器高0.9cmを測る。2~20の口径は8~10cm、器高1~1.2cmを測る。底部外面に板目跡のあるものと無いものがある。22は須恵質土器で13世紀初頭に位置づけられる。Fig.50-1~5は鉄釘である。2・4・5は上部を欠いている。1・3の頭部は折り曲げている。長さは1が8.5cm、2が8.2cm、3が9.2cm、4が7.0cm、5が3.9cmを測る。1・2・4の下半部分はタテ方向の木質が、1の上部はヨコ方向の木質が付着している。

SX07

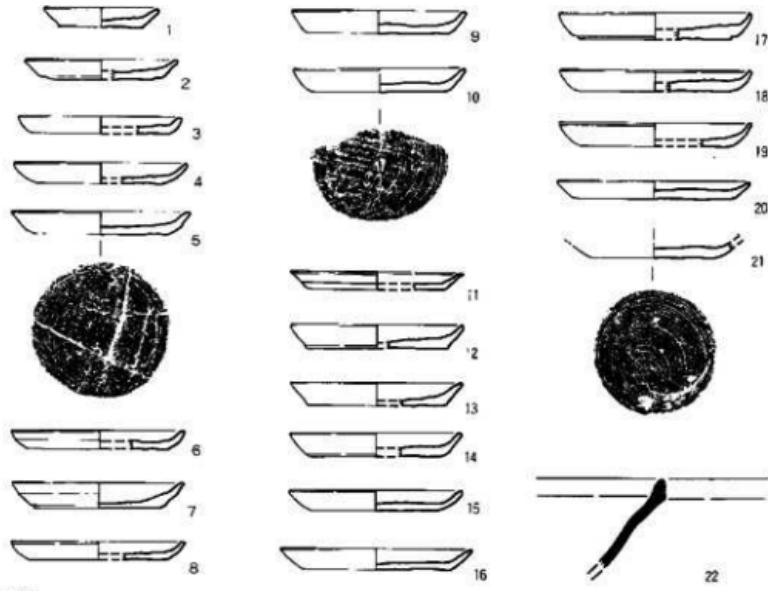
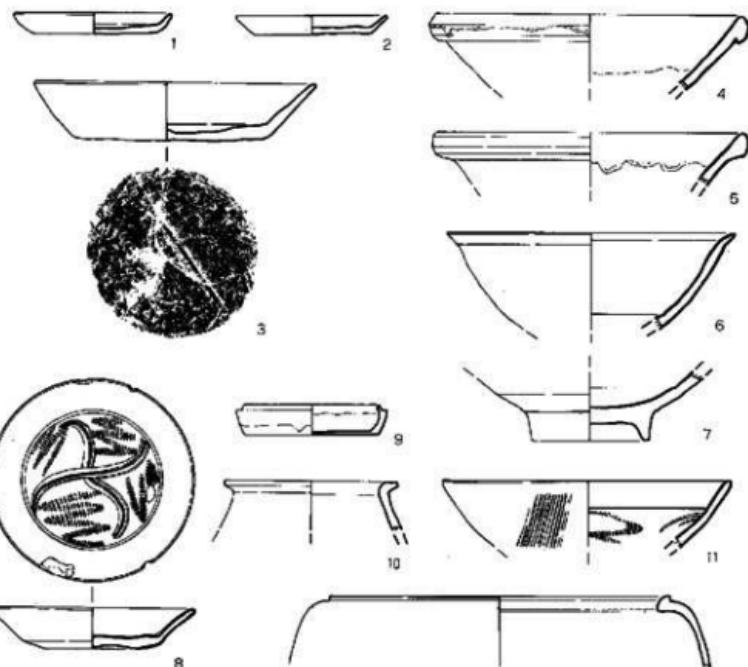
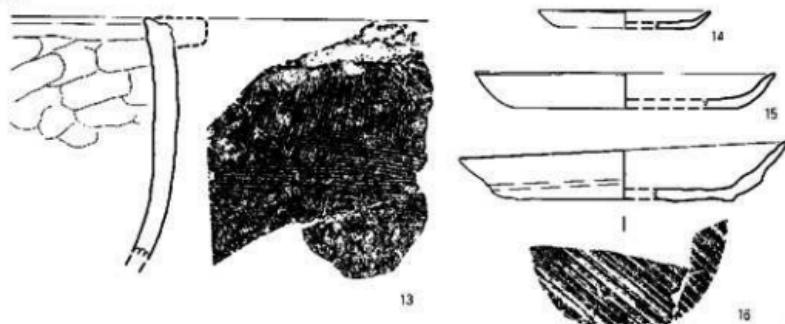


Fig.43 豊穴状土壙SX07・08出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SX09



SX11



0

10cm

Fig.44 土壌SX09~11・14出土遺物実測図（縮尺1/3）

SX08出土遺物 (Fig.48-23~26) 23は同安窯系青磁で、口径15cmを測る。24は土師器の皿で、口径10.8cmを測る。糸切り底である。25・26は土師器の壺で、いずれも糸切り底である。

SX09出土遺物 (Fig.44-1~12) 1・2は土師器の皿で、糸切り底である。口径7.8cm・8.0cm、器高1.0cm・0.9cmを測る。3は土師器壺で、糸切り底である。口径15.6cm、器高3cmを測る。4~7は白磁碗で、4・5はIV類、6はV-2類、7はV-3類である。8~11は同安窯系青磁で、8は皿、11は碗である。8は口径8.6cm、器高2.2cmを、11は口径9.8cmを測る。9~12は陶器で、9は合子身、10は蓋、12は甕である。9は口径7cm、器高1.6cmで、外面に薄緑灰色釉を施す。

SX11出土遺物 (Fig.49-13~16) 13は土師質の鍋で、外面はハケ調整である。14は土師質の皿で、底部は糸切りである。15・16は土師器の壺で、糸切り底である。16には板目痕がある。

SX03~08出土の縄文土器 (Fig.45-1~11) 1・3・6・7・9・11はSX08、2はSX07、5・8はSX05、10はSX04の出土である。1・4・5・6~11は深鉢形、2・3は浅鉢形である。1・5~9の外面には貝殻条痕が施されている。2・3の内外面は丁寧なヘラ研磨を施し、3の外面に沈線で施文する。10・11の底径は8.0cmを測る。縄文時代晩期初頭~前半の時期であろう。

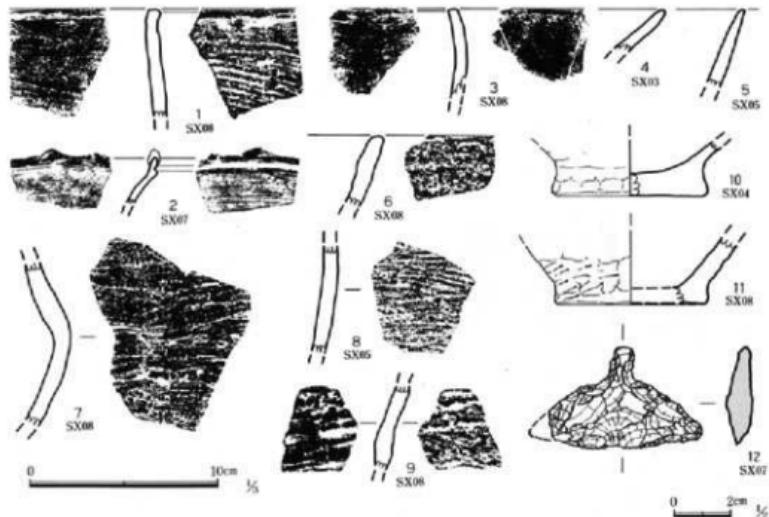


Fig.45 第12地点 出土縄文土器実測図 (縮尺1/3)

#### 土壙墓SX03 (Fig.46)

削平が著しく、墓壙の遺存状態は悪い。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.58m、幅0.9m、深さ15cmを測る。床面は不整で、木棺等の痕跡は認められなかった。墓壙の中央部の床面に接して龍泉窯系青磁碗1類が2個体、北壁近くから長さ32cmの小刀1振り、及び鉄滓1点が出土した。小刀は錆化著しく、且つ土圧による破損が著しい。

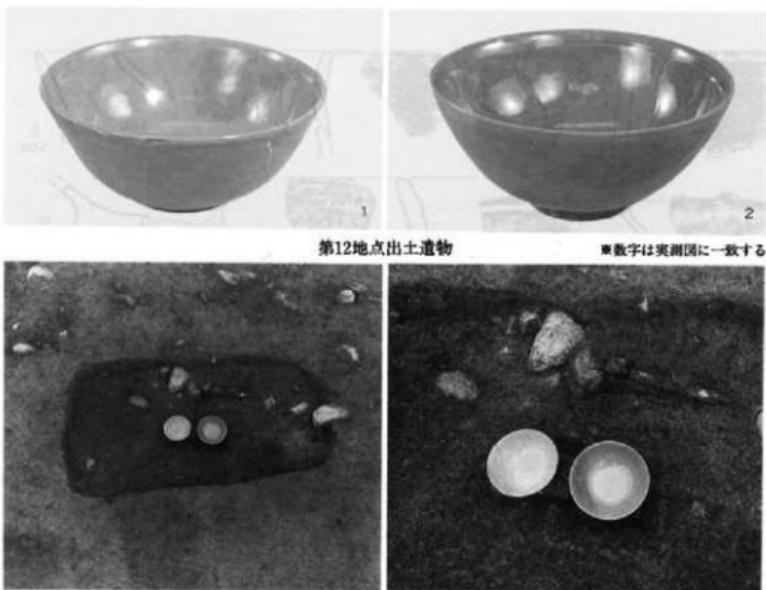
#### 土壙墓出土遺物 (Fig.47-1・2)

完形の碗で、龍泉窯系青磁I~IV類である。1は口径16.5cm、器高7.0cm、2は口径16.8cm、器高7.9cmを測る。1は2条、2は3条の沈線によって体部内面を5分割している。その中に飛雲文を施す。2の内底には花文を施している。

鉄製の小刀は推定の長さ34cm、身幅4cm、茎子の長さ5cmを測る。腐蝕のため取り揚げに失敗した。

#### 土壤

平面形は楕円形・不整隅丸長方形・不整方形の3形態を呈している。覆土は暗黄褐色粘質土、又は灰褐色粘質土である。



第12地点出土遺物

■数字は実測図に一致する

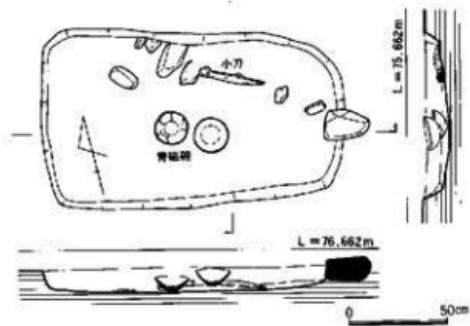


Fig.46 土塘基SX03実測図 (縮尺1/30)

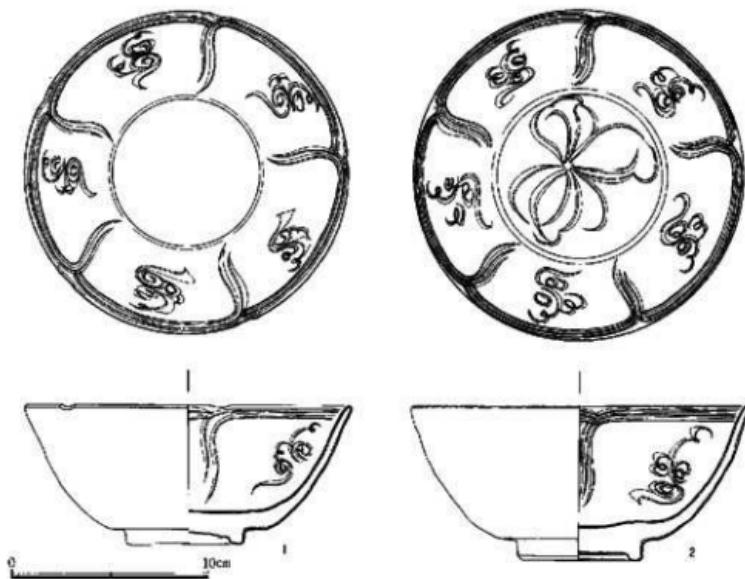


Fig.47 土塘基SX03出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SK06 (Fig.48) 平面形は椭円形を呈している。削平を受けており、長さ205cm、幅100cmを測る。覆土中より土師器の皿と鉄製火打金が出土している。

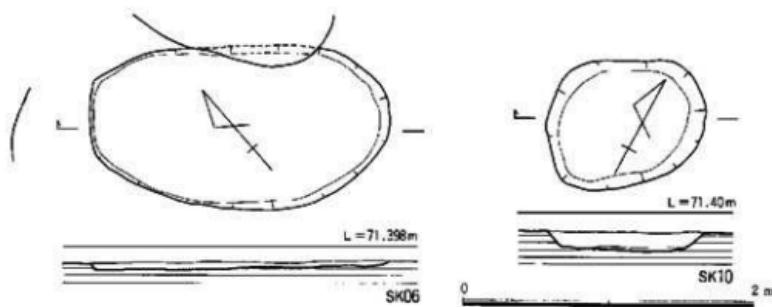


Fig.48 第12地点 土壙SK06・10実測図 (縮尺1/40)

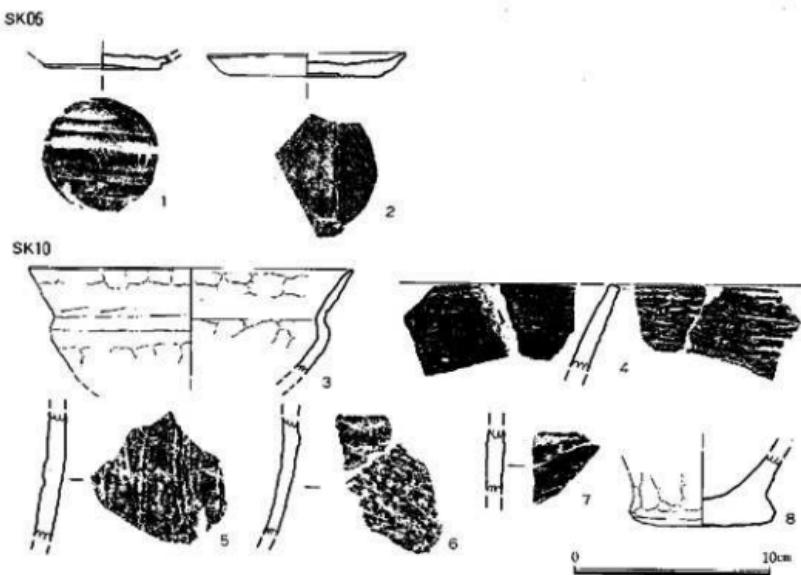


Fig.49 上塙SK06・10出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SK10 (Fig.48) 平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形の逆梯形である。長さ105cm、幅93cm、深さ14cmを測る。削平を受けている。遺物は縄文土器片が出土した。

#### 土壤出土遺物 (Fig.49・63)

SK06出土遺物 (Fig.49-1・2、Fig.63-7) 1・2 土師器の皿で、糸切り底である。2の口径は10.4cm、器高1cmを測る。Fig.63-7は鉄製品で形状は三角形を呈する。長さ4.1cm、最大幅7.1cm、厚さ0.9cmを計る。銹化が著しい。火打金と考えられる。

SK10出土遺物 (Fig.49-3～8) いずれも縄文土器である。3は浅鉢形、4～8は深鉢形である。3は口径16.8cmを計る。内外面は研磨を施している。4～7の外面には貝殻条痕を施している。8の底径7cmを計る。縄文時代晩期初頭～前半の時期である。

#### 河川跡 (SD)

河川跡SD01 (Fig.51) 調査区の東端部に位置している。遺構面より緩やかに落ち、断面形は逆梯形を呈する。現状で確認した溝の幅は4.3mを測る。この溝は第1・10地点で検出した河川跡が蛇行し、流下してきたものである。西側の傾斜面には長さ30～60cmを測る人頭火の石を護岸状に並べている。溝内に転落した状況の大石も有ることから、本来、石垣状に積まれていた可能性もある。遺物には土師器の皿・壺、白磁碗、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗・皿、陶器壺、上師質土器鍋、滑石製品等が出土している。

#### 河川跡出土遺物 (Fig.52～54・63)

SD01出土遺物 (Fig.52～54、Fig.63-8) 1～6は土師器の皿で、糸切り底である。口径は8.8～13.8cm、器高1.0～2.6cmを測る。4は土師器の壺で、口径9.6cmを測る。糸切り底である。

7～19は白磁碗で、7・8・15はIV類、10はVI類、11・14・19はVII類、9・13・16・17はV類に分類できる。9～11の口径は15.8～16.1cm、12・13・16・17の高台径は5.4～8.0cm、14・15・18・19の高台径は4.8～7.0cmを測る。16の内面には櫛描きの花文を描いている。14・19の内底

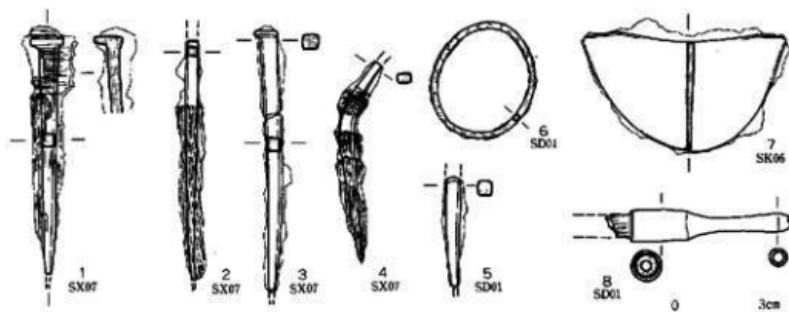


Fig.50 各遺構出土金属製品実測図 (縮尺1/2)



河川跡SD01（西から）

L = 71.64

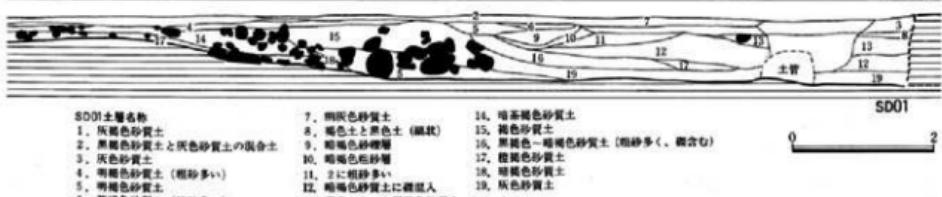


Fig.51 第12地点 河川跡SD01土層図 (縮尺1/80)

見込みは輪状に軸を取りを行っている。20~64は青磁である。20~35は龍泉窯系青磁碗である。20~21は蓮弁文碗で、20の口径は15.8cmを測る。21の蓮弁には鋲が無い。23~35はI類で、23~27は内面に蓮華文を片彫りする。25~29は内底に花文を施す。23~24の口径は15.8cm・17.0cmを測る。36~45は同安窯系の碗である。全てI類に属する。36~38・42の外表面は無文、37~39~41・43~45の外表面には補目を施す。36~40の復原口径15.2~18.2cmを測る。46は白磁の皿である。口径9.8cm、器高2.0cmを測る。48は白磁の香炉片である。外面上に淡灰青色の釉が施される。口径10cmを測る。49~51は龍泉窯系青磁の皿である。49は無文である。54~64は内底に片彫りの花文と補描きのシグザグ文を施す。52~55・56の口径10.8~11.2cm、器高2.2~2.6cmを測る。65は陶器である。外表面は茶色の釉が薄くかかる。口径14.4cmを測る。66~67は土師質土器の鍋の破片で、口縁部の外表面は肥厚させる。外表面はハケ調整を施すが、煤が付着している。68は須恵質土器の鉢片で、東播系鉢と思われる。71は滑石製石鍋である。高さ1.4cmの鋲を有しており、外表面はタテ長のケズリ痕を残す。復原口径19.4cmを測る。69は古墳時代土師器の小型丸底壺である。口径20cmを測る。外表面の一部にタテハケ調整がみられる。70は李朝白磁碗である。高台径6.4cmを測る。Fig.50~6~7は青銅製品である。1は長径4.0cmを測る。青銅製で、直径は3mmを測る。2は煙管の吸口部分で吸口の直径は0.6cm、羅字との接合部分は径1.2cmを測る。

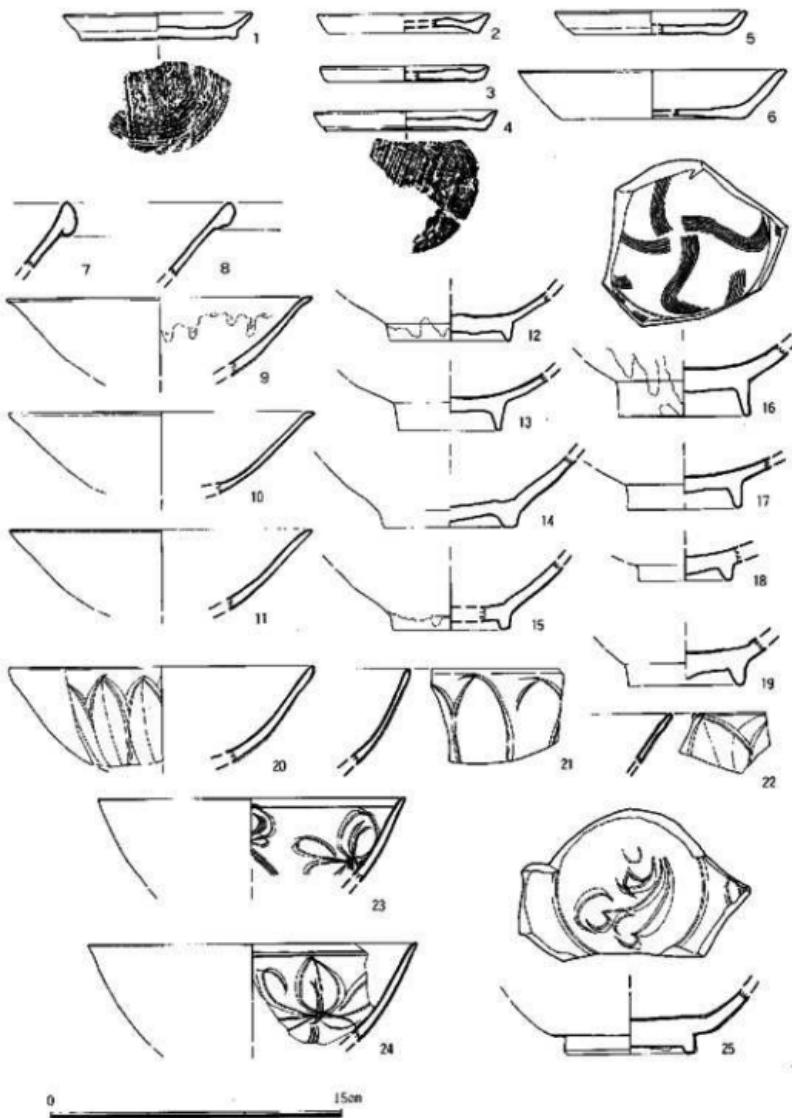


Fig.52 河川跡SD01出土遺物実測図① (縮尺1/3)

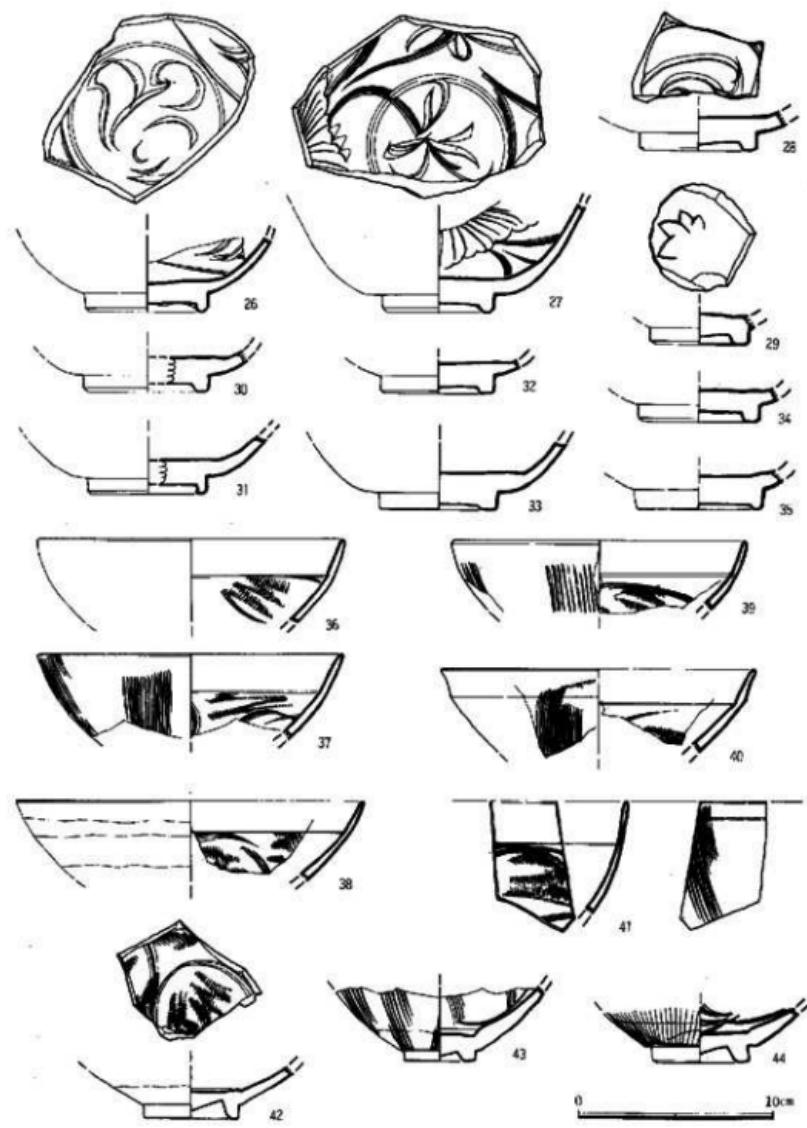


Fig.53 河川跡SD01出土遺物実測図② (縮尺1/3)

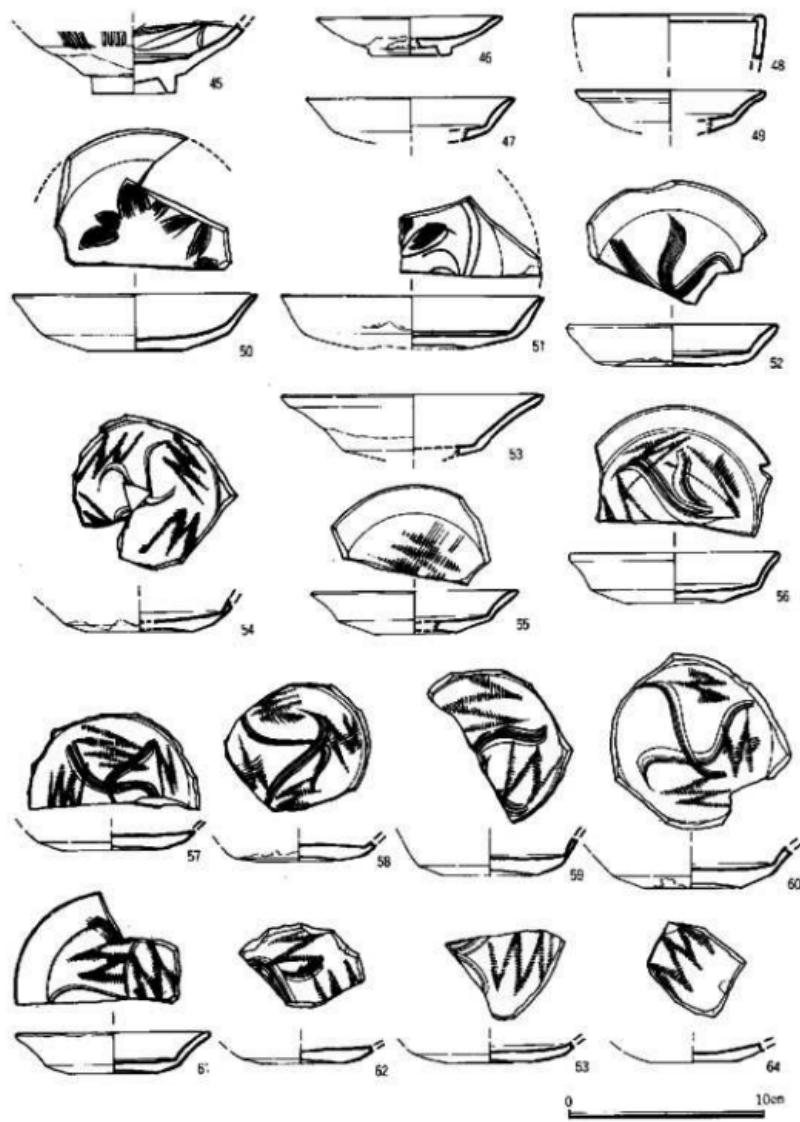


Fig.54 河川跡SD01出土遺物実測図③ (縮尺1/3)

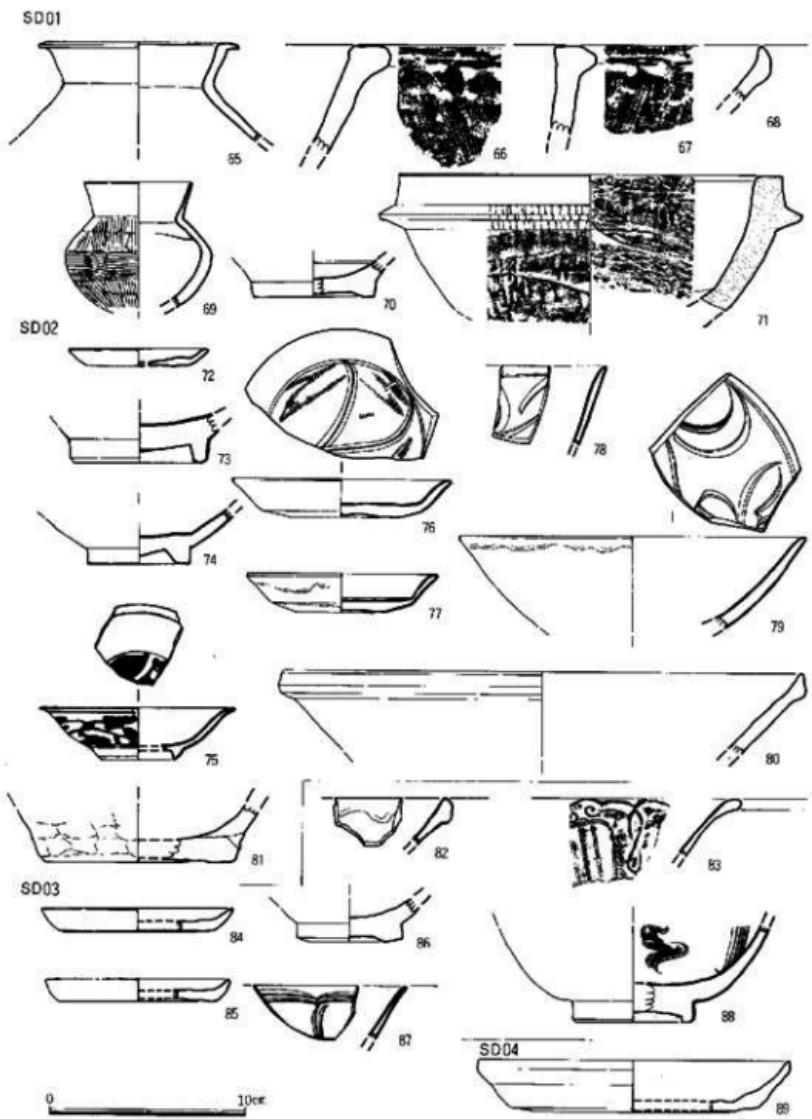


Fig.55 河川跡SD01、溝SD02~04出土遺物実測図（縮尺1/3）

### 溝 (SD)

溝状造構 (Fig.39) 7条の他、歓状の溝SD08を検出した。SD05～07は地割り溝と考えられる。溝幅は42～20cmを測る。近世の陶磁器が出土した。SD02～04の溝幅は78～215cmを測る。いずれも断面形はレンズ状を呈し、浅い。SD02～04の覆土からは中国陶磁器が出土している。

SD08 (Fig.39) 幅18～24cmを測り、10条の溝で構成される。最大の長さは5.3mを測り、溝断面はU字形である。いずれも浅い溝で、覆土は暗灰褐色粘質土である。歓状を呈する。

### 溝出土遺物

SD02出土遺物 (Fig.55-72～81) 72は土師器の皿で、糸切り底である。口径7.2cmを測る。73・78・79は龍泉窯系青磁I類である。内面に花文を施す。74・76・77は同安窯系青磁で、74は碗、76・77は皿である。77は内外面が無文、76は内面に描き文と片彫り文を施す。76・77の口径は11.5cm・10.0cm、器高は2.0cmを測る。75は明の染付皿である。呉須にて外面に文様を施す。外面は唐草文と考えられる。口径10.2cm、器高2.8cmを測る。80は東播系の須恵質土器である。口縁部を肥厚させており、口径27.2cmを測る。81は繩文土器で、底径10.0cmを測る。

SD03出土遺物 (Fig.55-82～88) 83は陶器の皿で、内面に型押しの文様を施す。口縁部は輪花状を呈し、外面に縁袖を施す。84・85は土師器の皿で、糸切り底である。87・88は龍泉窯系青磁のI類である。内面にヘラ片彫り文様を施す。82・86は白磁碗IV類である。

SD04出土遺物 (Fig.59-89) 土師器の壺で、口径16.4cm、器高2.7cmを測る。糸切り底である。

### 製鉄遺構 (Fig.56)

SX12～15は竪穴状土壙SX09・11の埋没した後に作られている。いずれも規模は小さい。

SX10 (Fig.57) 平面形は不整円形を呈し、断面形は不定形である。土壙の中央に拳大の礫と鐵滓が集中していた。

SX12 (Fig.58) 平面形は不定形で、周壁が焼けている。鉄分の堆積がみられる。

SX13 (Fig.58) 平面形は不整円形を、断面形は逆梯形を呈し、鉄分・炭化物が堆積している。

SX14 (Fig.58) 平面形は不整円形で、断面形はレンズ状である。鉄分と炭化物の堆積がみられる。

SX15 (Fig.58) 平面形は不整円形を呈し、周壁は焼けている。鉄分と炭化物の堆積がある。

### 製鉄遺構出土遺物

SX10出土遺物 (Fig.59-1) 龍泉窯系青磁碗で、底径6.6cmを測る。内面にヘラ片彫り文を施す。

SX14出土遺物 (Fig.59-2) 白磁碗のV類である。

### pit出土遺物

pit05出土遺物 (Fig.59-3～10) 3～5は土師器の壺で、口径14.4～16.2cm、器高2.3～2.9cmを測る。糸切り底である。6～9は瓦器碗である。焼成が甘く、淡茶色を呈する。6・9・10の口径は16.7～17.4cm、10の器高は7.2cmを測る。11は白磁碗で、IV類に属する。

pit17出土遺物 (Fig.59-12) 土師器の底部で、ヘラ切り底である。

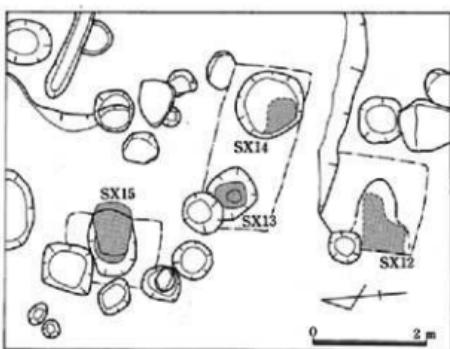


Fig. 56 鋳治炉SX12～15分布図 (縮尺1/50)

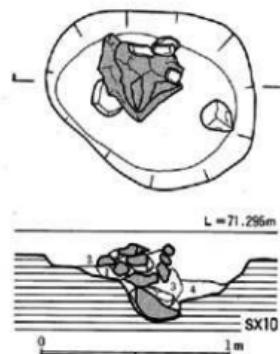
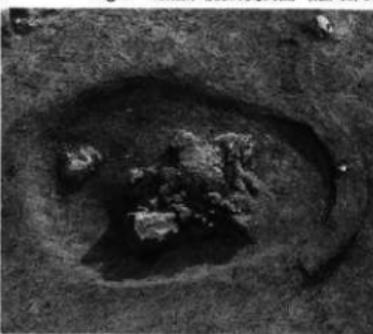


Fig. 57 鋳治炉SX10実測図 (縮尺1/30)



鋳治炉SX12-15 (南から)



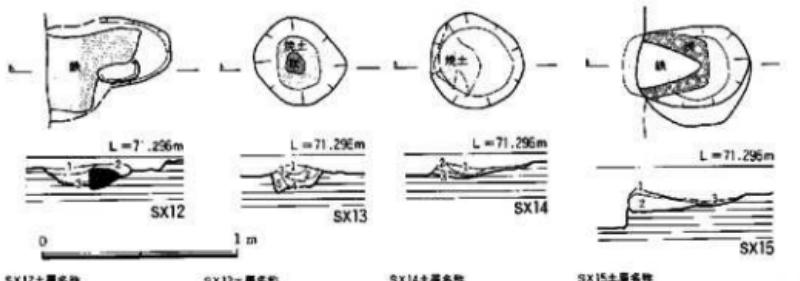
鋳治炉SX10 (北から)



鋳治炉SX12 (南から)



鋳治炉SX13・14 (南から)



SX12土層名  
 1. 黒褐色砂質土(鉄分を多く含む)  
 2. 黑褐色土(変化物質を多く含む)  
 3. 黑茶褐色土(鉄分を含む)  
 SX13土層名  
 1. 黒褐色土(本炭鉱を含む)  
 2. 黑褐色土  
 3. 黑褐色砂質土(炉盤の残り)  
 4. 黑褐色土(炉盤島)などを少量含む  
 5. 喬瓦土(黑褐色地土を多く含む)

SX14土層名  
 1. 黒色土(鉄化物質を豊富に含む)  
 2. 黑褐色土(鉄を含めていない)  
 3. 黑茶褐色土(鉄化鉄分を豊富に含む)

SX15土層名  
 1. 黒茶褐色土(泥上段の多い、鉄分を含む)  
 2. 黑褐色土  
 3. 黑褐色土(空褐色土類を含む)  
 4. 黑褐色土(炉盤島)などを少量含む

Fig.58 鋳治炉SX12~15実測図 (縮尺1/30)

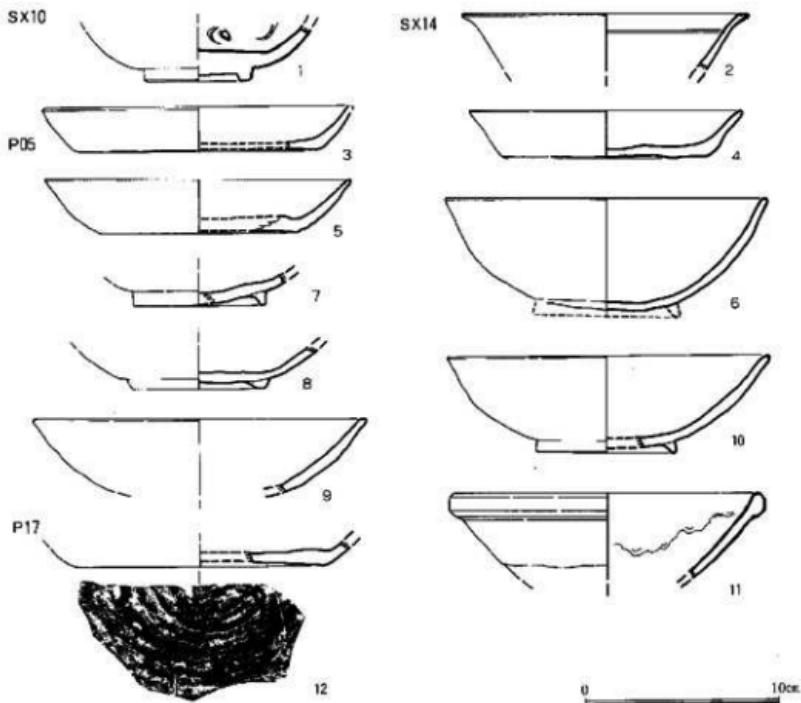


Fig.59 鋳治炉SX10・14、Pit05・17出I:遺物実測図 (縮尺1/3)

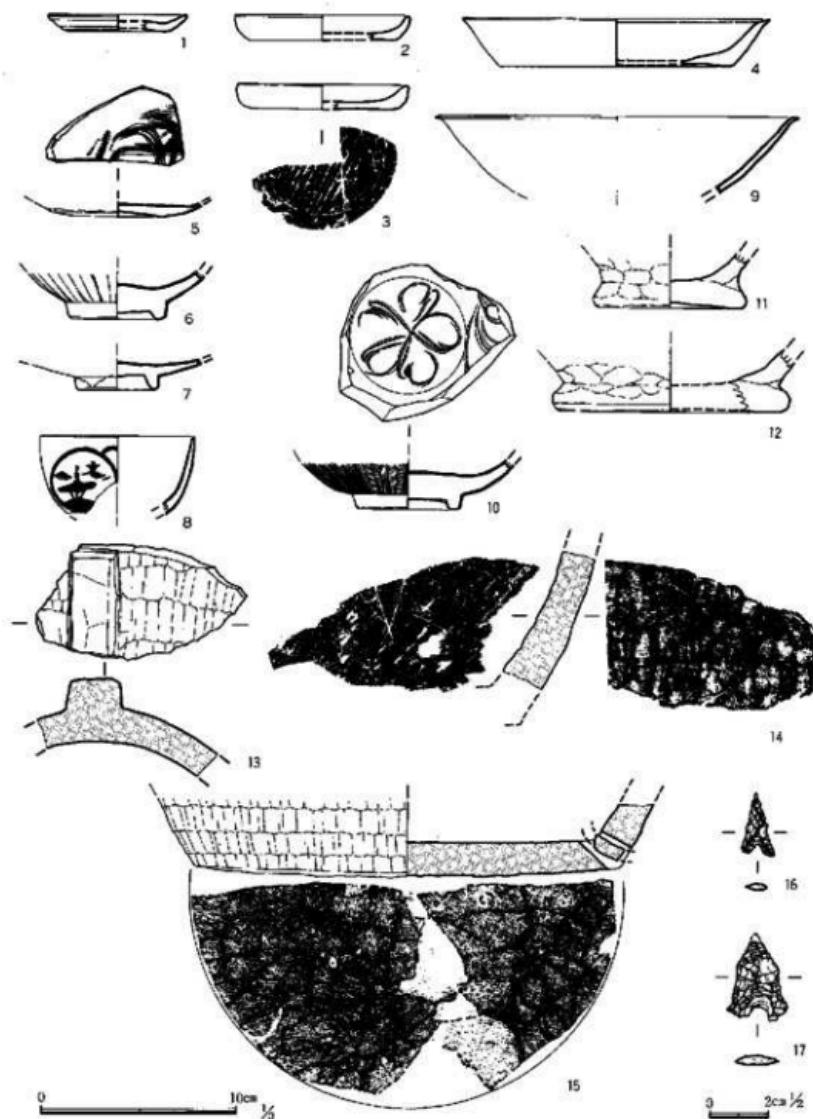
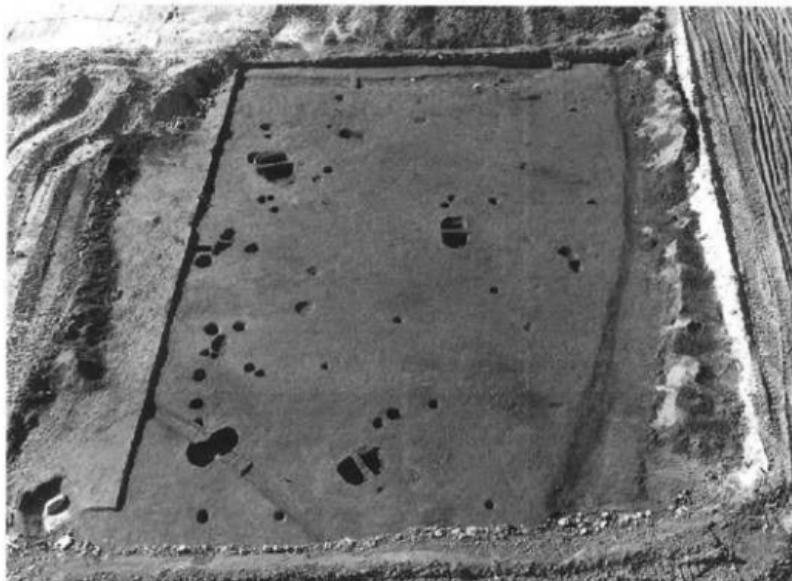


Fig.60 第12地点 遺構而出土遺物実測図 (縮尺1/3)

## (II) 第15地点 (12-5田)

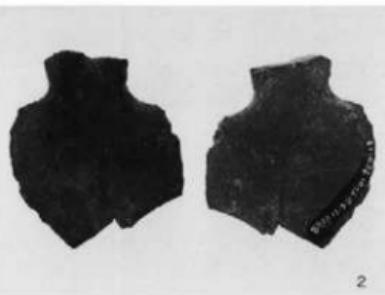
第2地点II区の西側に接している。調査区の北側は田面の境であるため、段落ちになっている。標高は約74.20mを測る。遺構面は暗い黄褐色粘質土であり、北方向に緩やかに傾斜している。調査区の北半分はこの遺構面上部に灰褐色粘質土が堆積していた。遺構は溝状遺構2条、



第15地点全景（東から）



焼土壙SX01（西から）



第15地点出土遺物 ■数字は実測図に一致する

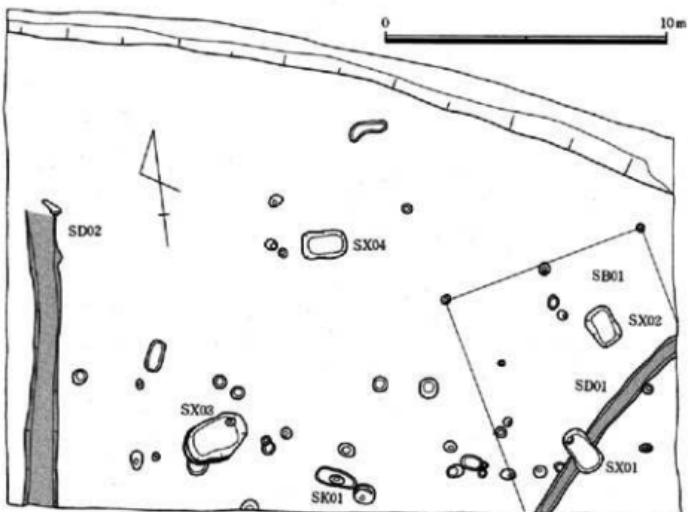


Fig.61 第15地点 遺構配置図（縮尺1/200）



焼土壙SX02（西から）、土層状態

焼土壙SX03（北から）、土層状態

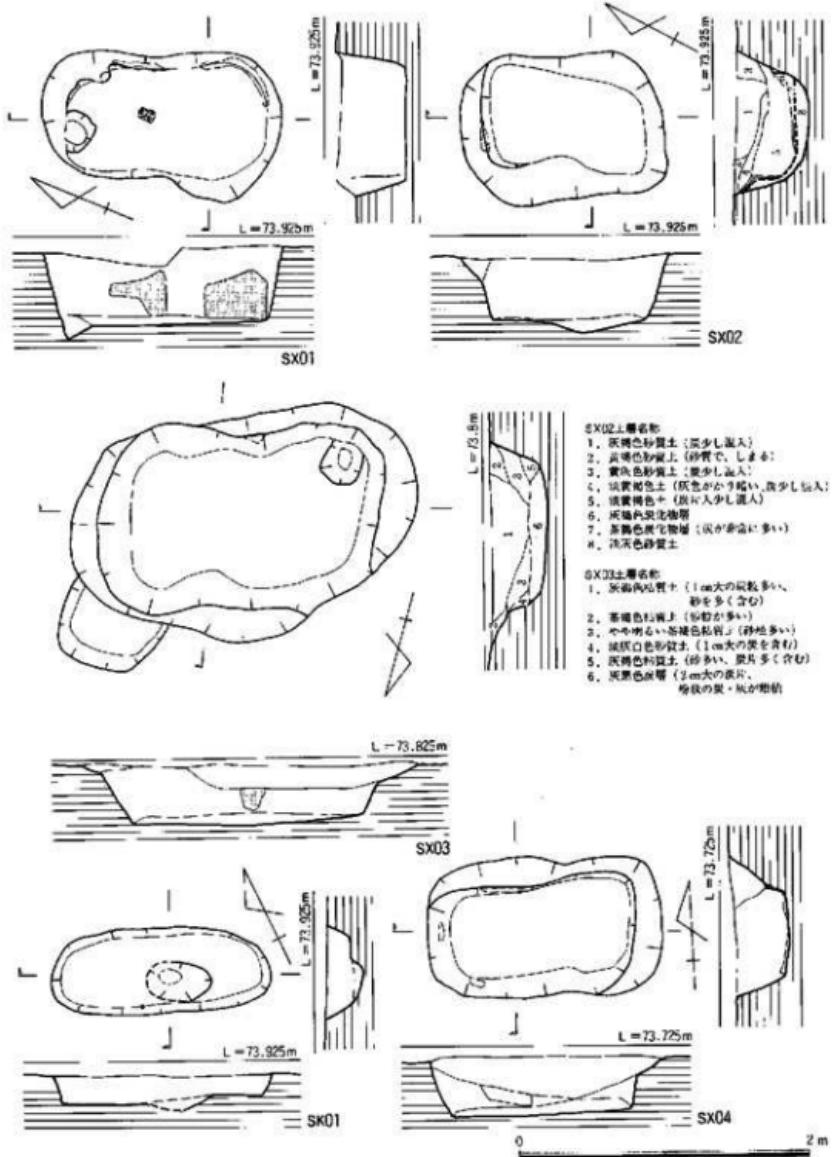


Fig.62 第15地点 焼土塚SX01~04、上塚SK01実測図 (縮尺1/40)



焼土壙SX04（南から）



焼土壙SX04土層状態（西から）

土壤3、焼土壙4、掘立柱建物2、pit群である。

### 1) 遺構説明

#### 掘立柱建物

掘立柱建物はいずれも境界地に位置するため全体形は不明であるが2間×2間、もしくは2間×1間程度の規模と思われる。

#### 溝（SD）

溝状遺構SD02は、幅約1mを測り、断面形は逆梯形を呈している。北側は消失している。第14地点のSD01と同様に近世の地割り溝であろう。SD01は幅60cmを測り、断面形は逆梯形を呈している。覆土から土器類の糸切り皿等が出土した。

#### 焼土壙（SX）

焼土壙はいずれも周壁が赤く焼けている。平面形は隅丸長方形と不整長方形がある。断面形は逆梯形を呈しているが、SX02は一部の壁が袋状を呈する。いずれも最下層に炭化物層又は木炭の粉末層がある。SX03・04の木炭層は厚く堆積している。いずれも焼壁は厚くない。焼土壙からは遺物は出土していない。

SX01 (Fig.62) 平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈する。長さ162cm、幅100cm、深さ69cmを測る。北側小口部分の床面には直径25cm、深さ15cmのpitが設けられている。

SX02 (Fig.62) 平面形は不整隅丸長方形を呈している。土壙の上部は崩壊して摺鉢状になっているが、本来の断面形は袋状、又は箱形であったものと考えられる。周壁は焼けており、土壙の下部には木炭層が存在した。現存長は140cm、幅100cm、深さ52cmを測る。

SX03 (Fig.62) 平面形は土壙の上部が崩壊したため不定形を呈しているが、下部は隅丸長方形を呈する。長さは240cm、幅164cm、深さ39.5cmを測る。西側の小口部分に径21cmを測るpitが存在する。最下層に炭化物層が存在する。

SX04 (Fig.62) 平面形は隅丸長方形を呈する。土壙の上部が崩壊している。全長は163cm、幅

92cmを測るが、元来の規模は約142cm、幅76cmと考えられる。

#### 土壤(SK)

SK01は平面形が橢円形を呈している。平面底部の中央に浅い窪みがある。長さ150cm、幅57cmを測る。

#### 2) 遺物説明 (Fig.63)

SX02出土遺物 (1) 土師器の皿で、糸切り底である。口径7cm、器高1.1cmを測る。

SK01出土遺物 (2) サヌカイト製の石匙である。先端を欠いており、身幅は4.9cmを測る。タテ長の剥片を用いており、刃部の調整は両面共に片側のみ行っている。つまみ部分には自然面が残っている。

遺構面出土遺物 (3) 青銅製煙管の吸口部分である。全長5.6cm、吸口径0.5cm、羅字接合部径1.15cmを測る。羅字は様竹製である。

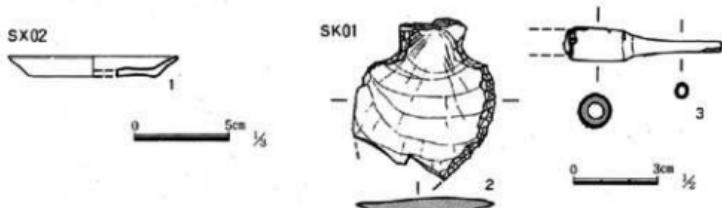
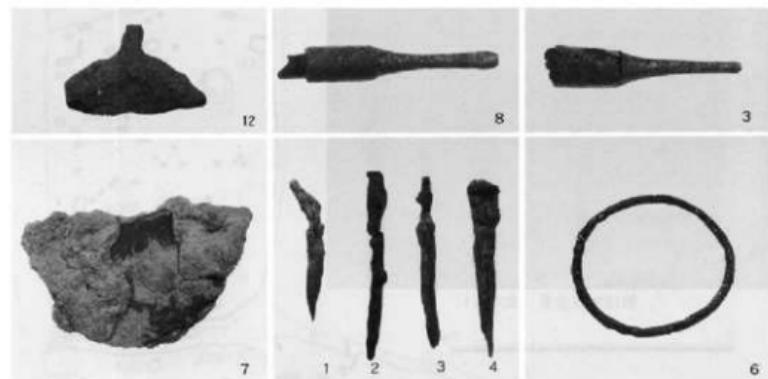


Fig63 第9・15地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/2) (1・2は第15地点、3は第9地点)



第9・12地点出土遺物 ■数字は実測図に一致する (3は第9地点、他は第12地点)

## (12) 第16地点 I ~ IV区 (12-6A~C・7A・B田)

第2地点の西側に接している。南北に長い調査区で、3枚の田面に股がっている。棚田のため3段になっており、標高は南側の調査区から順に標高約76.6m・約75.5m・約74.5mを測る。遺構面はやや暗い黄褐色粘質土であるが、部分的に地山の黒褐色砂質土や砂礫層が表出している。

### 1) 遺構説明

土壤の平面形は隅丸長方形・不整長方形・不整円形等を呈している。長さ1.1~2mを測る。覆土は灰褐色



第16地点全景（北から）

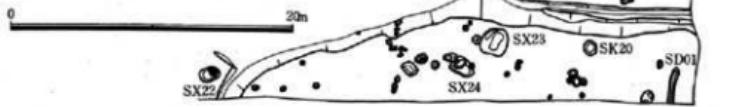


Fig.64 第16地点 I~IV区遺構配置図 (縮尺1/400)



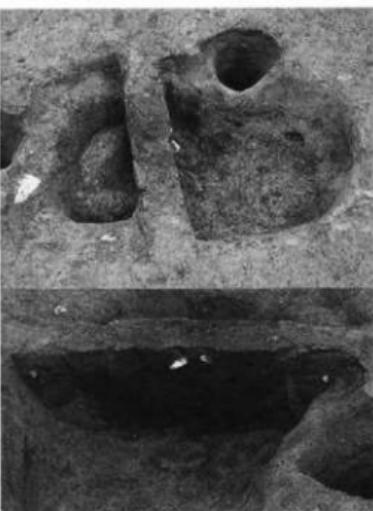
焼土壙SX17（北から）、土層状態



焼土壙SX23（東から）、土層状態



焼土壙SX18（南から）、土層状態



焼土壙SX24（南西から）、土層状態

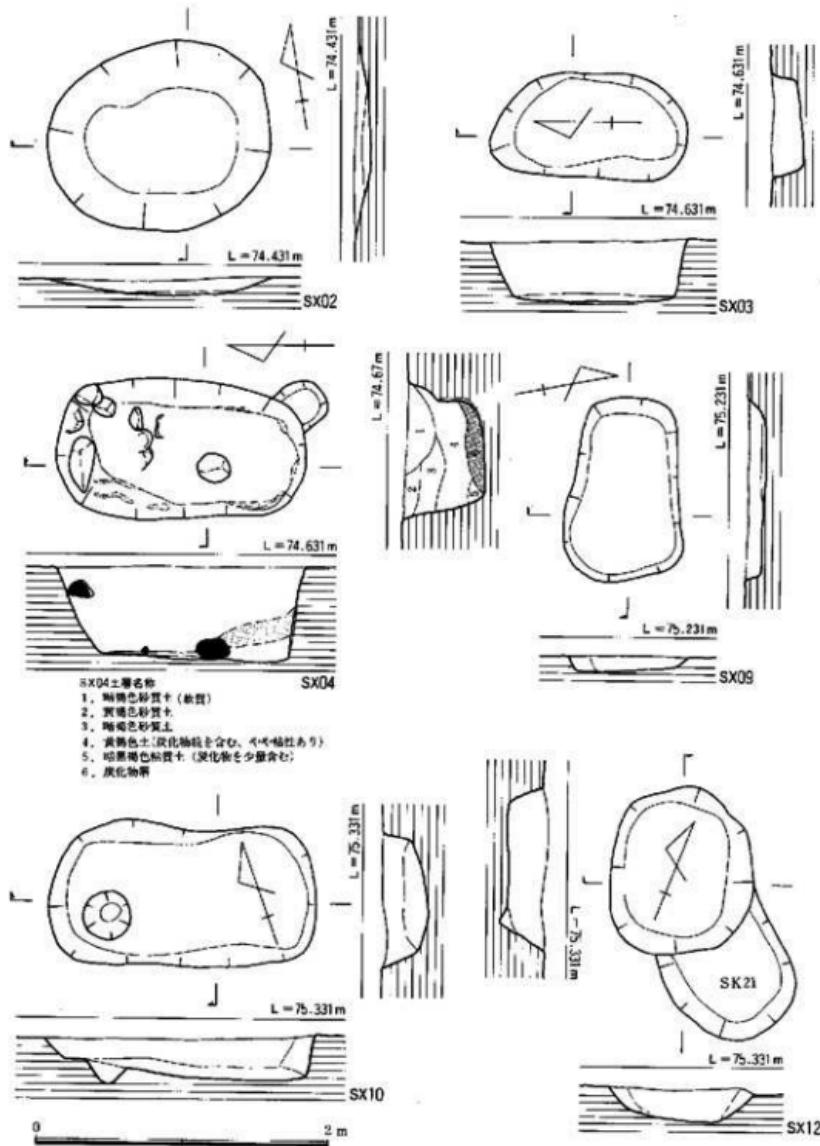


Fig.65 第16地点 焼土壌SX02~04・09・10・12実測図 (縮尺1/40)

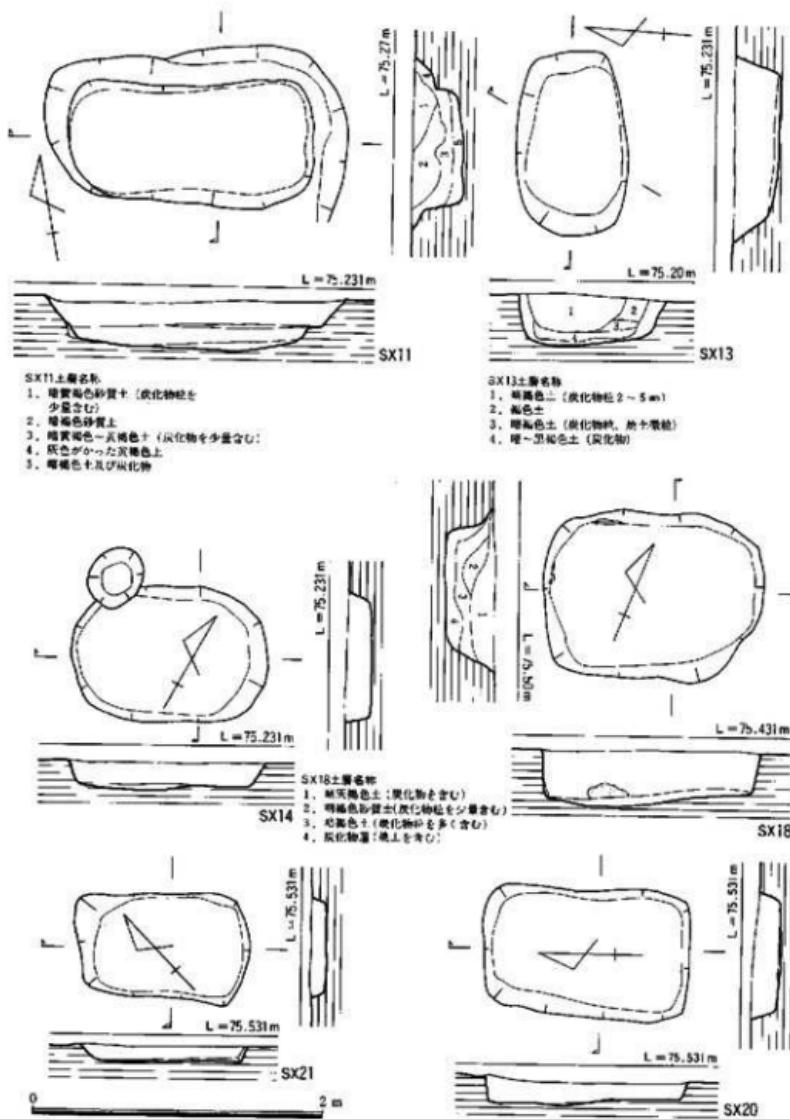


Fig.66 第16地点 燃土壤SX11~14・18・20・21実測図 (縮尺1/40)

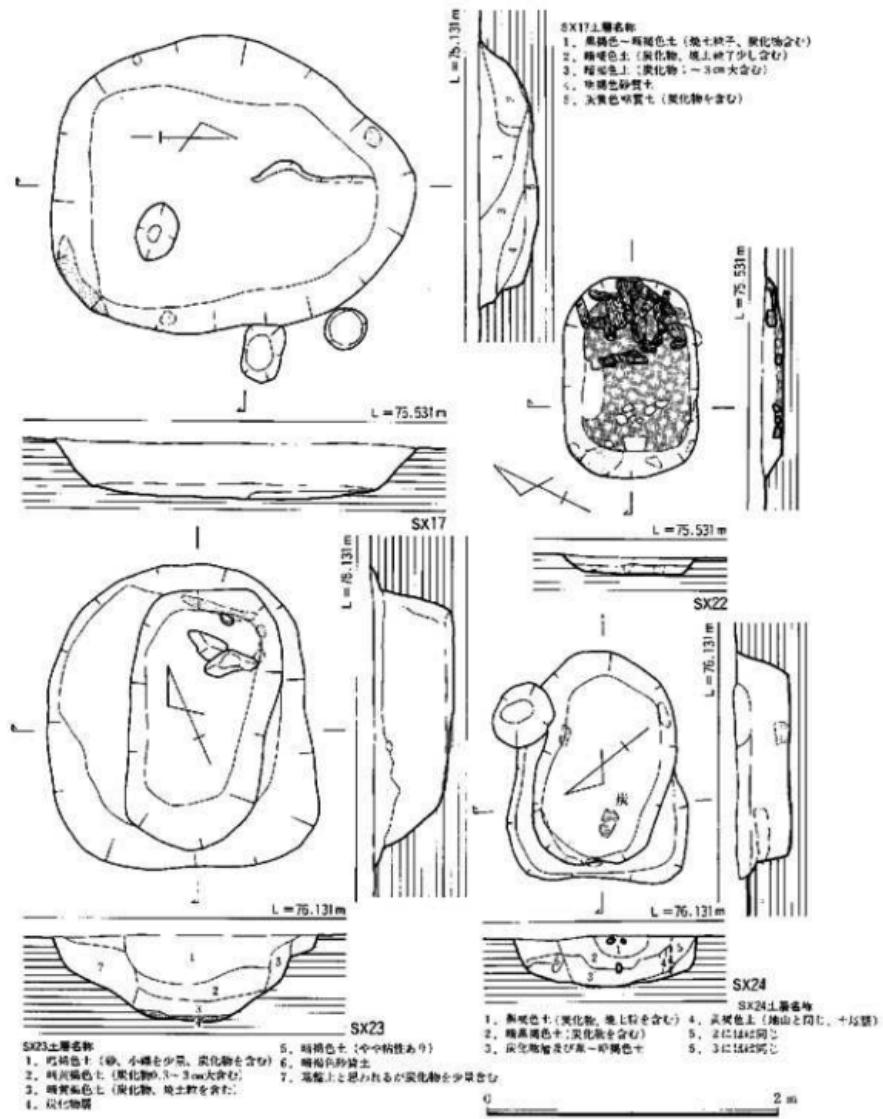


Fig.67 第16地点 燃上堆SX17・22~24実測図 (縮尺1/40)

粘質土を主体としている。

#### 焼土壙(SX)

焼土壙の平面形は隅丸長方形・不整長方形・橢円形・不整円形の各形態がある。規模は長さ1.5m以下の規模、長さ1.8m前後の規模、長さ2m以上の規模の3グループに分けられる。SX02は平面形が不整円形を呈し、他の焼土壙と形状を異にする。その他の焼土壙は、断面形が逆梯形を呈し、周壁が赤く焼けており、覆土の最下層、又は下層に炭化物層が存在する。

SX02(Fig.65) 平面形が不整円形を呈し、断面形はレンズ状を呈している。周壁はわずかに焼けており、底面には炭化物が厚く堆積していた。長径138cmを測る。第19地点焼土壙SX01と同じ構造である。

SX10(Fig.65) 平面形は隅丸長方形を呈する。長さ180cm、幅100cmを測る。底面の西側小口付近に径34cmを測るpitが存在する。

SX22(Fig.67) 平面形が隅丸長方形を呈し、長さ152cm、幅94cmを測る。削平のため遺存状態は悪いが、底面には木炭と炭化物がぎっしり詰まっていた。又、壁も焼けている。第3地点の焼土壙SX04と同様な機能をもつものと考えられる。

SX23(Fig.67) 2段掘りの土壙であるが、これは土壙上部の崩壊も考えられる。上・下段共に平面形は不整隅丸長方形を呈している。焼土壙の断面形は一部袋状を呈している。全長は210cm、下段の反さは165cm、幅180cmを測る。最下層には炭化物層が堆積している。

#### 2) 遺物説明 (Fig.68)

遺構面出土遺物(1・4) 1は縄文土器の浅鉢形で、内外面にヘラ研磨を施している。4は白磁碗のⅣ類である。

地割溝出土遺物(2・3・5) 2は古墳時代土師器の甕で、外面に平行叩き痕がある。3は土師質甕の口縁部である。5は古伊万里碗で、18世紀代である。

pit出土遺物(6) P8出土。唐津系の碗で、口径12cmを測る。内外面は黄土色の釉が施される。

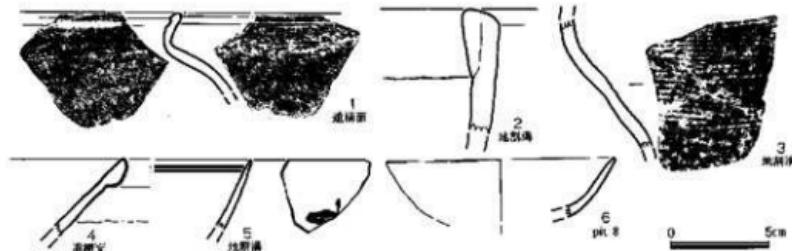


Fig.68 第16地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

### (13) 第17・18地点 (12-8・9田)

第2地点の西側に位置している。いずれも東西に細長い調査区である。第17地点が北側に位置する。標高は第17地点が約76.5m、第18地点の標高は約77mを測る。遺構は黄褐色又は、灰褐色粘質土である。遺構は第17地点が土壙1、焼土壙1、掘立柱建物1、第18地点が焼土壙4、pit群である。焼土壙は平面形が隅丸長方形、又は梢円形形状を呈しており、断面形はいずれも逆梯形である。第18地点焼土壙の規模は長さ1.8m前後の規模と長さ2m以上の規模の2形態がある。SX01の壁の一部は直立、又は袋状を呈し、良く焼けている。

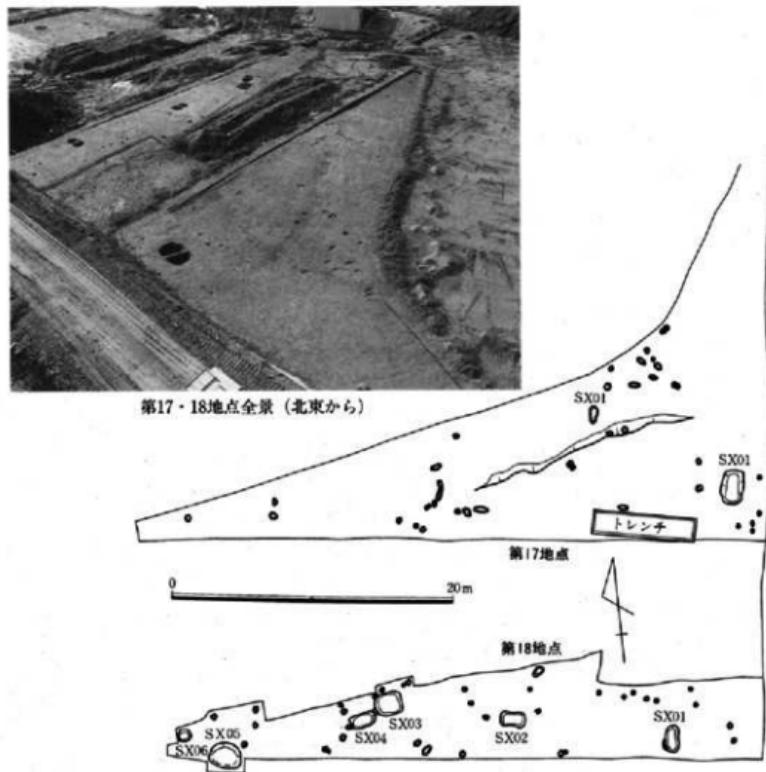


Fig.69 第17・18地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

### 1) 第17地点遺構説明

焼土壙SX01 (Fig.70) 平面形は不整隅丸長方形を、断面形は一部袋状である。土壙上部は崩壊して広くなっている。最下層に炭化物層がある。長さ245cmを測る。

### 2) 第18地点遺構説明

焼土壙SX01 (Fig.71) 平面形は梢円形を呈しているが、下面の平面形は隅丸長方形に近い。細長い形状で、長さ197cm、幅100cmを測る。壁の一部は袋状で、周壁は焼けている。炭化物層がある。

焼土壙SX03 (Fig.71) 平面形が方形に近い隅丸長方形で、他に例はない。規模が大きく、長さ185cm、幅155cm、深さ46.5cmを測る。周壁は焼けており、底面に炭化物層があった。

### 3) 第18地点遺物説明 (Fig.73)

いずれも縄文土器である。1・2は遺構面、3・5・8・10・12はSX05、6・11・13はSX04、4はP2出土である。2・4～6は浅体形で、4・6は黒色研磨土器である。2・5の外面には沈線による文様を施す。1・3・7～13は深体形で、外面に貝殻条痕がある。12の底径は9.2cmを測る。縄文時代晩期の所産である。

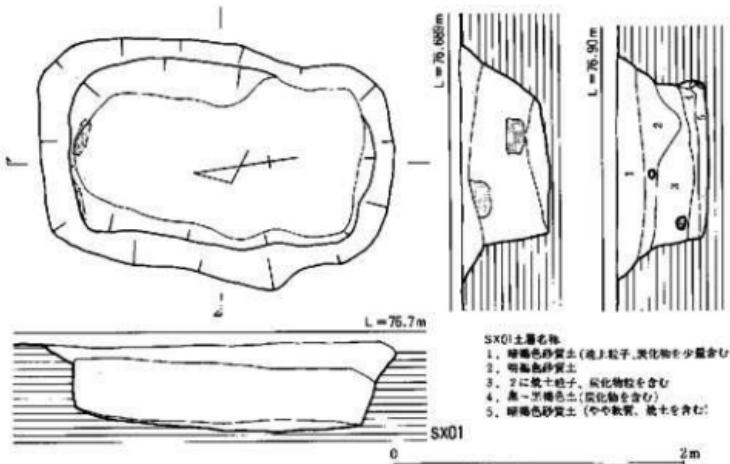
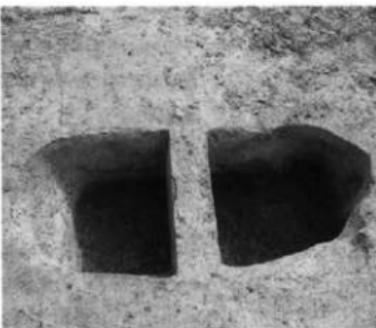


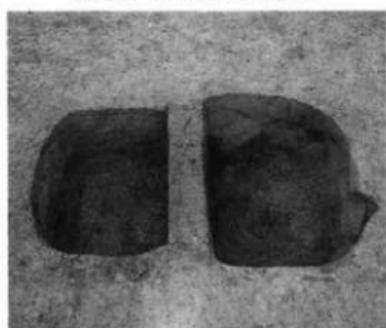
Fig.70 第17地点 焼上壙SX01実測図 (縮尺1/40)



第17地点 焼土壙SX01（西から）



第18地点 焼土壙SX01（西から）



第18地点 焼土壙SX02（南から）



第18地点 焼土壙SX03（北から）



第18地点 焼土壙SX04（東から）



第18地点 焼土壙SX05（北から）

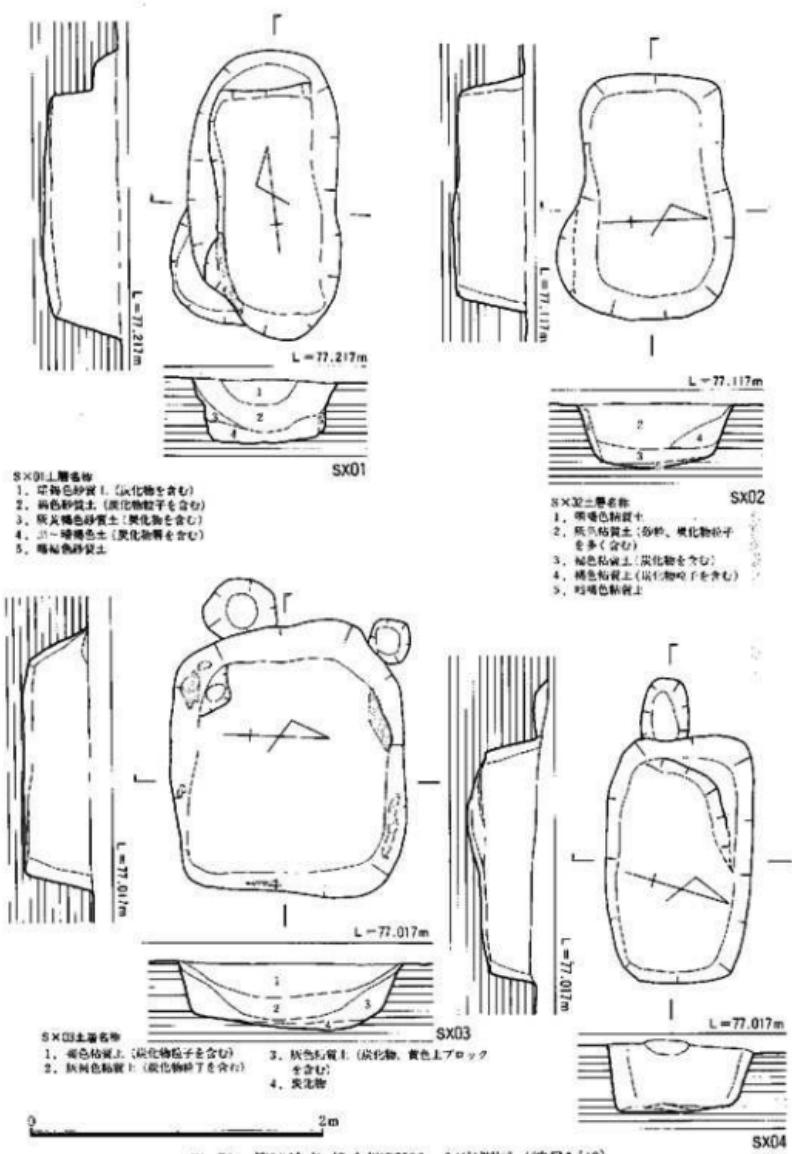


Fig.71 第18地点 烧土壤SX01~04実測図 (縮尺1/40)

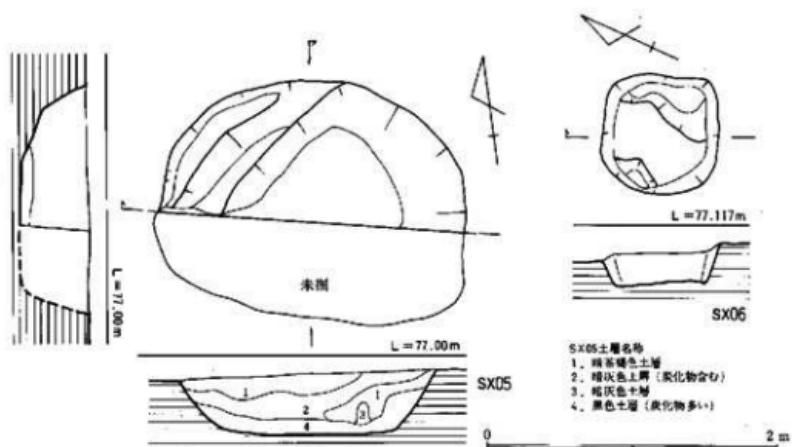


Fig.72 第18地点 烧土堆SX05·06实测图 (缩尺1/40)

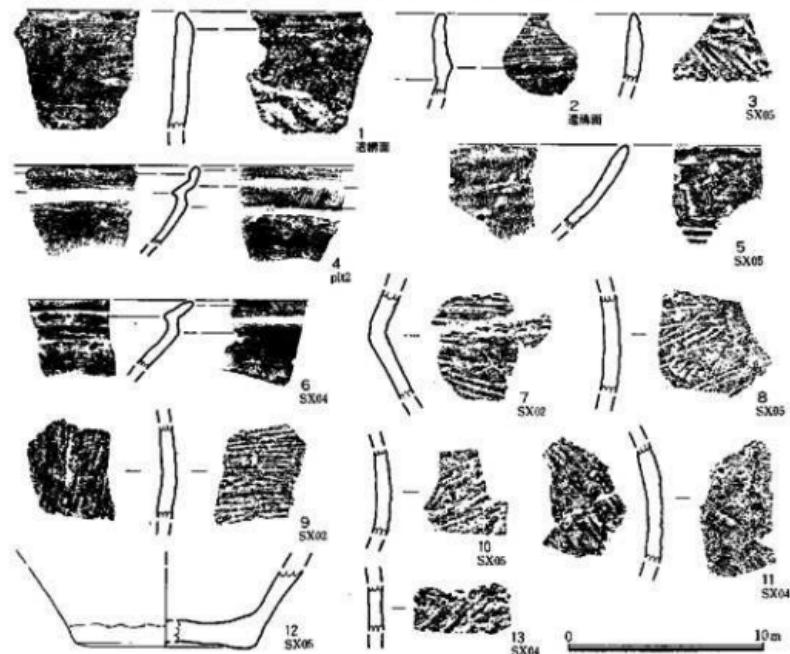


Fig.73 第18地点 出土遗物实测图 (缩尺1/3)

## (14) 第19地点 (12-10田)

調査区は第1地点II区の北側に接している。遺構面は黄褐色粘質土、又は灰褐色粘質土である。遺構面は北側へわずかに傾斜している。遺構は土壙2、焼土壙2、近世の地割溝1条等を検出した。近世の地割溝は第1地点II区の溝SD06と同一である。焼土壙は2形態があり、平面形が隅丸長方形と不整円形である。SX02は長さ1.4mを測り、周壁は良く焼けている。焼土壙

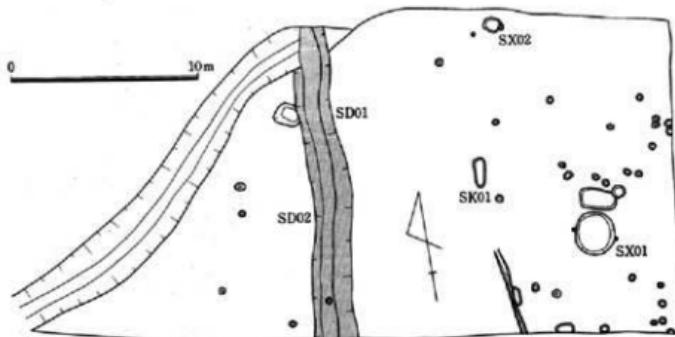


Fig.74 第19地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



第19地点全景 (東から)

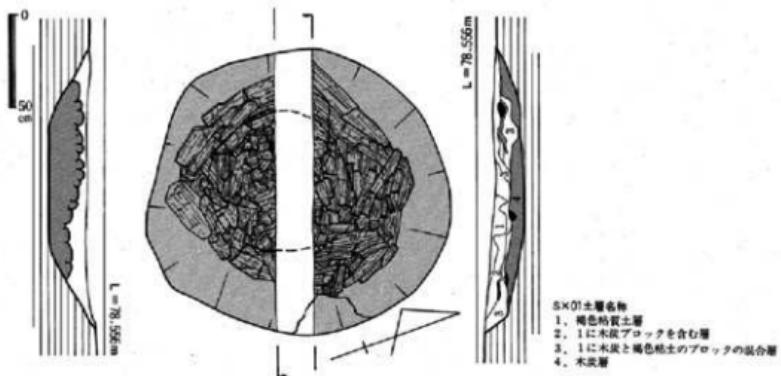
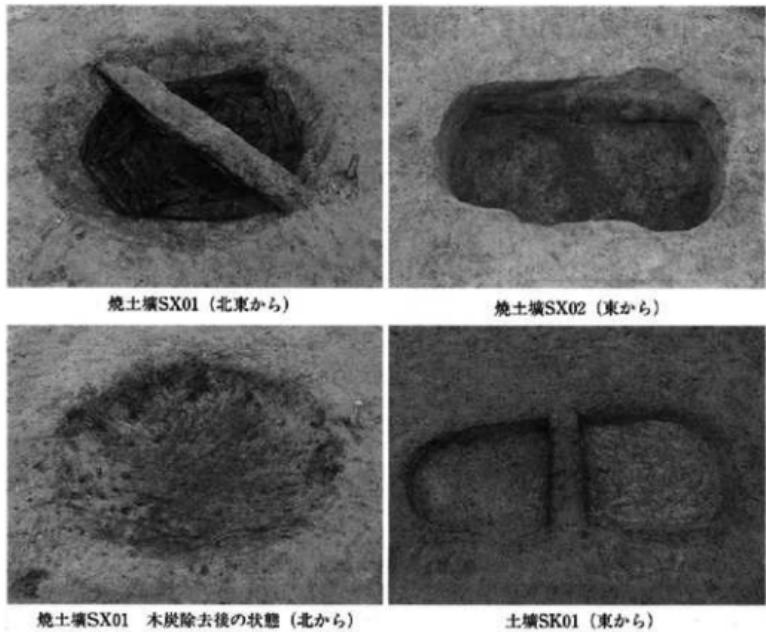


Fig.75 焼土壌SX01実測図 (縮尺1/30)

SX01は第16地点の焼土壙SX02と形状が共通するものと考えられる。

### 1) 遺構説明

SX01 (Fig.75) 平面形は不整円形を、断面形はレンズ状を呈する。直径は約2.1m、最大の深さ25cmを測る。削平を受けているものの、遺存状態は良好である。周壁は全体に焼けている。壙内には直径5~10cmの木炭が横積みされていたが、これらは同一方向ではなく環状に廻るように積まれている。木炭の最大の長さは60~70cmを測る。

SX02 (Fig.76) 小型の焼土壙で、平面形は開丸長方形を呈する。周壁は焼けている。長さ100cm、幅80cmを測る。

### 2) 遺物説明 (Fig.77)

いずれも近世の溝から出土したもので、1・3はSD01、2はSD02出土である。1・3は伊万里焼きで、3の内底にはコンニャク版のスタンプが施される。1690~1750年代の所産である。2は葵箱底の皿で、外面には芭蕉文を、内底には菊花文を呉須にて施しており、明代の染付と考えられる。

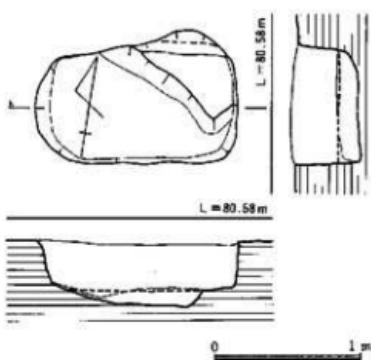


Fig.76 焼土壙SX02実測図 (縮尺1/40)

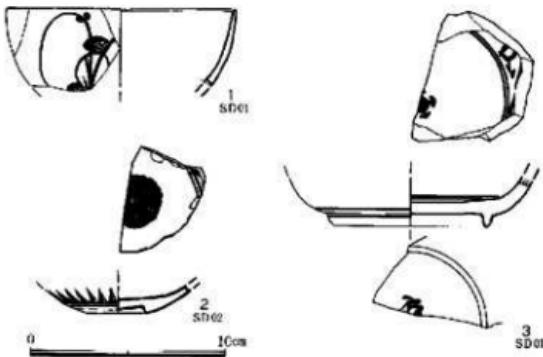


Fig.77 第19地点 出土遺物実測図 (縮尺1/3)

## (15) 谷口遺跡の出土遺物 (Fig.78~80)

平成元年度の脇山地区周囲整備事業に伴って発掘調査した谷口遺跡第1次調査の報告は平成2年度に刊行した福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集「脇山II」に於いて詳細に述べられている。遺構については報告書に委ねることとして、ここでは記載されていない遺物について述べ、脇山地区に所在する遺跡の時期に迫ってみたいと思う。

土師器の壺・皿の主体は糸切りであるが、ヘラ切り底もある。1・2は糸切り底の皿で、板目痕がある。3は糸切り底の壺である。4~6は瓦器椀の底部である。9・10は白磁碗で、10はIV類、9はV類である。8は白磁皿である。11は四耳壺の破片である。13~25は青磁で、13~23は碗、24・25は壺である。15の内底には「金玉満堂」の印刻がある。又、日痕がみられる。16~18の外面には蓮弁文がある。16の蓮弁は鏡をもっているが、18はラマ式蓮弁である。19・20の内底には印刻の花文がある。19の外面には退化した線描きの蓮弁文がある。21・23の口縁部外面にはヘラ描きの雷文を施している。22の口縁は外反させている。壺の24の外面には退化した蓮弁があるが、25は内外面無文である。これらは12~16世紀の幅をもつが、主体は15世紀代と考えられる。26~28は備前焼。26は波状文壺、27・28は摺鉢である。IV・V期に位置づけられる。29は常滑焼で、灰青色を呈し、外面に格子目の叩きがある。31~49・51は土師質の鍋である。31~37は口縁部を外反させるタイプで、鉄鍋の模倣形が退化したものである。30・33~35は体部と口縁部の境の段が退化している。31は15世紀代、他は16世紀代である。36・39~49は口縁部外面に突帯を貼り付け、玉縁状の口縁部を形成するタイプで、福岡市内では有田遺跡、博多遺跡などがあり、例は少ない。一般的には筑後地方や佐賀平野の15~16世紀に出土するものである。38は逆L字形の口縁部である。口縁部上面に繩目の押圧痕のある鍋の系統を引くものである。鉢は36・51~64で、摺鉢は54~62・64、他は挫鉢である。54のみ土師質で、他は瓦質土器である。56~58は大内系の瓦質の摺鉢で、大内氏の筑前支配と関わる遺物である。65は瓦質の壺片で、外面に稜杉状の叩き痕がある。東播系か、67~70は湯釜で、67は土師質である。68の外面は円形印文がある。火舎は71・72で、71・72の外面には巴文の印刻がある。74~79は石鍋、又は石鍋の再成品である。74・75は外面にタテ長の耳を付けるタイプである。76・77・78は口縁部外面に小さな鋤を付けるタイプで、15世紀代である。78・79は再加工する。77の内側に円形の掘り込みをつける。78は鋤に穴をあけ、内側に陽文を彫っている。印である。79は内側をレンズ状に仕上げており、当て具であろう。その他には古墳時代の土師器や碗等が出土している。

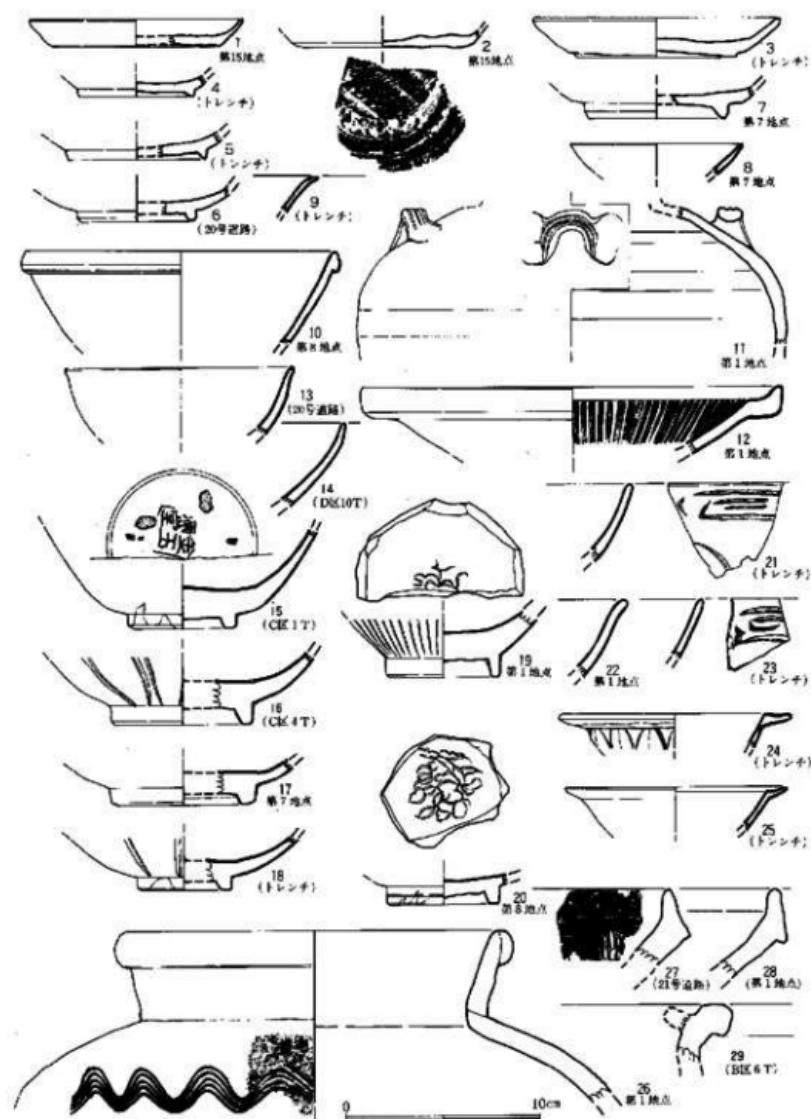


Fig.78 谷口遺跡出土遺物実測図① (縮尺1/3)

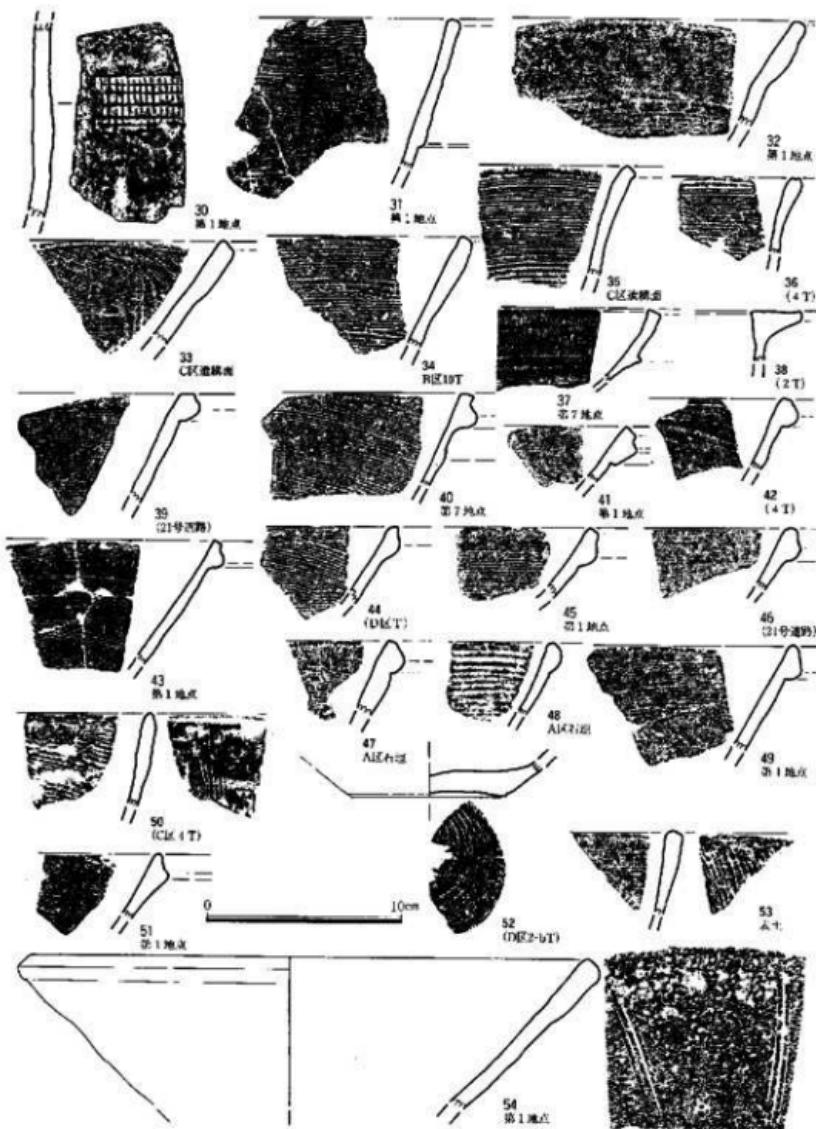


Fig.79 谷11遺跡出土遺物実測図② (縮尺1/3)

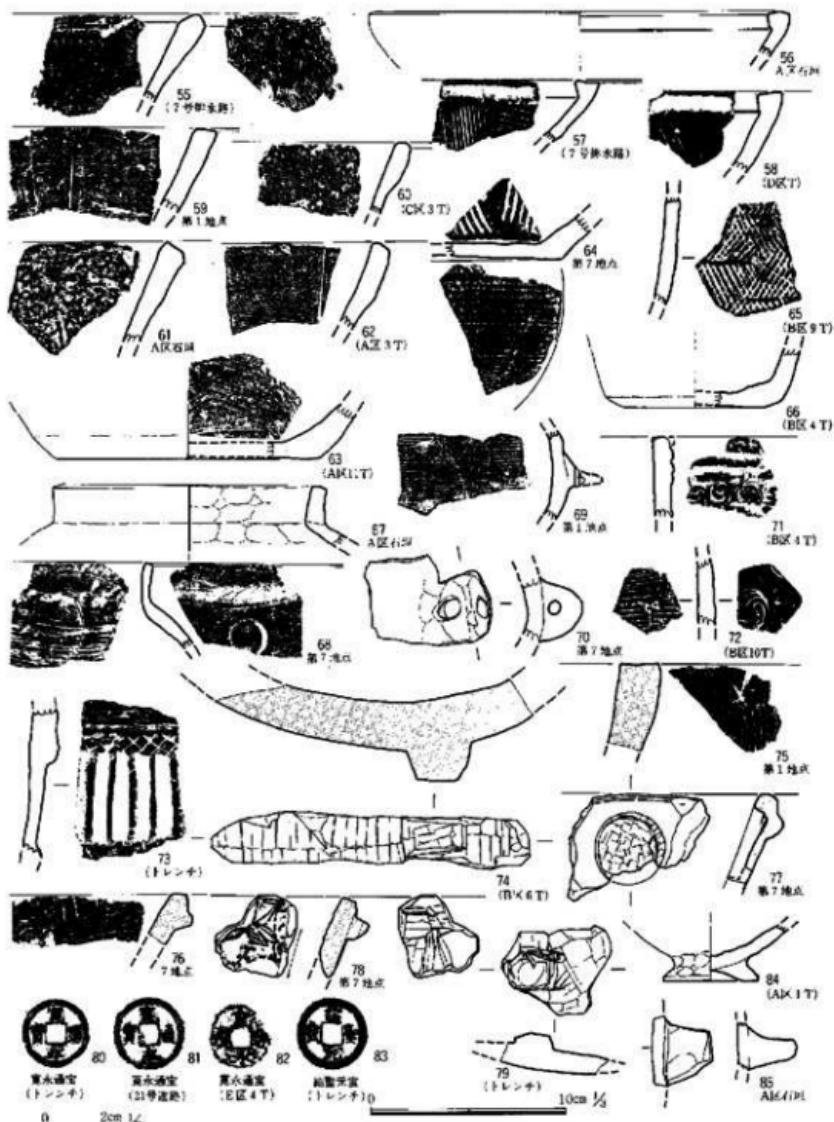


Fig. 80 谷口遺跡出土遺物実測図③ (縮尺1/3・1/2)



Fig.81 脇山A遺跡第4次調査発見場所分布図（縮尺1/2,000）

## (16) 付論 脇山A遺跡から出土した木炭について

九州大学農学部

助教授 小田一幸

脇山A遺跡の第3地点I・II区(2号排水路)焼土壙SX04および第19地点(12-10田)焼土壙SX01から出土した木炭の組織構造を、尖体顕微鏡と走査型電子顕微鏡を用いて観察した。この結果、第3地点焼土壙SX04の木炭はカシ類、第19地点焼土壙SX01の木炭はクスノキ科の樹木であると推定された。識別の根拠は以下のとおりである。

### 1) 第3地点焼土壙SX04の木炭

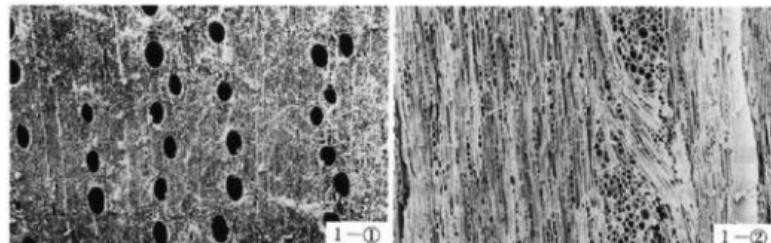
出土した多数の木炭の中から無作為に17点の試料を選んだ。これらの試料はいずれも重硬で、横断面に多くの放射割れが存在した。走査型電子顕微鏡による観察では、写真1・2に一部を示すように、17点の試料とも、木口面においては道管が放射状に多数配列し、板目面では集合放射組織がみられた。のことから、カシ類と同定した。しかし、カシ類はイチイガシ、アカガシ、シラカシ、ハナガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、アラカシなど樹種数が多いので、17点の試料が同一樹種か否かは特定できなかった。

以上のように、17点の試料がすべてカシ類であったこと、および第3地点焼土壙SX04の規模が小さいことから、焼土壙の木炭は、すべてカシ類と推定した。なお、カシ類はしばしば植生を優占することがあり、照葉樹林を形成し、重要な森林資源の一つとされている。すなわち、材は建築、器具(農具、台、柄類、運動具、荷棒など)、船舶(舵、櫂)、車両(荷車、車輪、車軸)、枕木などの堅材的用途に利用され、木炭原料としても最適である。

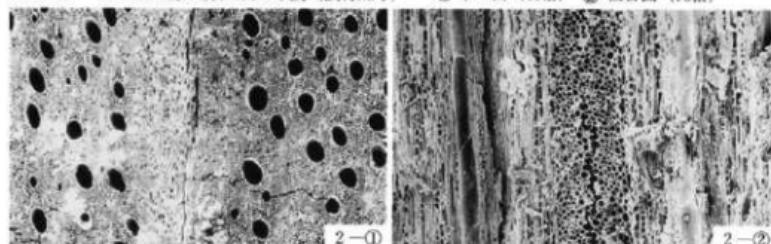
### 2) 第19地点焼土壙SX01の木炭

多数の木炭の中から無作為に8点の試料を選んだ。これらの試料には、第3地点焼土壙SX04の木炭のような放射割れは存在しないが、軽軟で消炭様を呈していた。顕微鏡観察では、8点の試料とも写真3に示すような組織構造がみられた。すなわち、木口面では道管が散在し、柔組織が道管を取り巻いている。板目面における放射組織は異性田型で1~3細胞幅、高さは1mm以内である。板目面には異形の分泌細胞(写真中央部)が認められる。これらのことから、クスノキ科の樹木、しかも8点とも同一の樹種と同定された。なお、クスノキ科にはクスノキ、タブノキ、ヤブニッケイ、シロダモ、カゴノキ、バリバリノキなどの有用樹木があるが、分泌細胞の数が少ないので、クスノキではなさそうである。

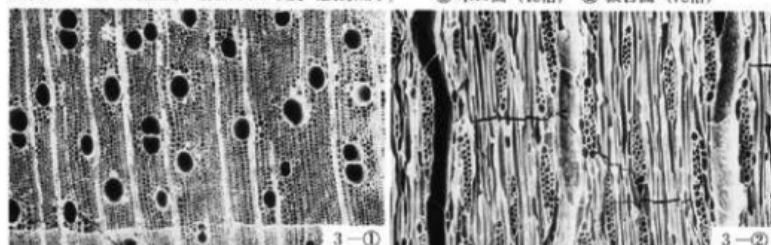
このように8点の試料が同一樹種であること、焼土壙の規模も小さいことから、第19地点焼土壙SX01の木炭はすべてクスノキ科の同一樹種と断定できそうである。



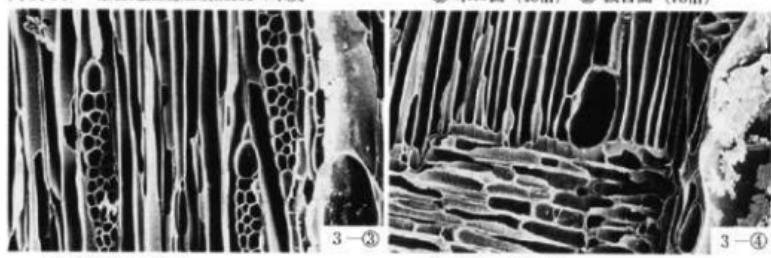
(写真1) 第3地点焼土壌SX04の木炭 (試材No.4) ①木口面 (48倍) ②板目面 (78倍)



(写真2) 第3地点焼土壌SX04の木炭 (試材No.7) ①木口面 (48倍) ②板目面 (78倍)



(写真3) 第19地点焼土壌SX01の木炭 ①木口面 (48倍) ②板目面 (78倍)



③板目面 (220倍)

④柾目面 (220倍)

わき やま  
脇 山 III

—県営団地整備事業に伴う発掘調査—

(脇山A遺跡第4次調査報告)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第311集

---

1992年(平成4年)3月13日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 アド印刷

---